

エ イ コ ス

— 十七世紀フランス演劇研究 —

XII

『フランス演劇再建試案』から『演劇作法』へ	浅谷真弓 (1)
アンドレイニ(G. -B.)の演劇擁護論とフランスでの反響	片木智年 (17)
悲劇 <i>Phèdre</i> の神々	浜野トキ (28)
翻訳 コルネイユ 『セルトリュス』	小林 卓 (48)
作品梗概集	(80)
Rotrou : <i>Céliane, Pèlerine amoureuse</i>	
会員名簿	

『フランス演劇再建試案』から『演劇作法』へ

浅谷真弓

はじめに

『フランス演劇再建試案』に与えられる評価は『演劇作法』の精神のマニフェストである。『試案』で提唱された改革案を実践するための指導書がすなわち『作法』である、と¹⁾執筆時期や精神のありようはともかく、評価の基準はあくまで『作法』にあつて、『試案』にはなく、常識的に考えて、『作法』なしに『試案』は論じられない。だから実際に『試案』を読むのは『作法』の目を通して、ということになる。『作法』だけが『試案』の存在意義を保証する、これを錯誤、転倒と呼べば、それもまたナイーブにすぎるだろう。ただ、『作法』の趣旨が劇作の実践的教科書であるために、そのマニフェストとしての『試案』の理念は演劇改革に傾かざるをえない。しかし、いまいちど『試案』を読み返してみるまでもなく、改革の発端は演劇自体の擁護にあつた。演劇というものの存在意義の確定、擁護を目的としてはじめて改革が問題にされる。何のための改革なのか、そんなことはわかりきった話ではないか、と思われるだろう。そのわかりきったところから改めて二著を読み直すとき、彼の演劇擁護論のもつ独特の論理展開があらわになる。その最初の敵は厳格なキリスト教徒、そして味方も、また。

I. コンシリア・エヴァンゲリカ

知つての通り、『作法』には特別な序文がない。²⁾第1部第1章が序文に代えてあるのみだ。そこでの主張は、大まかに言って、スペクタクル、舞台芸術が国威発揚、ひいては公民の教育に重要な役割を果す、ということである。著者は何故そんなことを言わなければならなかったのか、しかも、あえて序文の資格を付与せずに。教科書の読み手はこれで十分に説得される。だが、それにしてはいやに挑戦的な筆遣いは、もう一方のメッセージの宛て先人である論敵の存在を意識して余りある。その相手は、ここでただ一度だけ文面に現れ、残虐な古代のスペクタクルを捨てるに至った主要原因と規定される。曰く、理性も時の荒廢に手を貸し、一部の古代のスペクタクルの廢絶に何がしかかかわつた。人と人との殺し合い、あるいは猛獣との戦いが今日まで伝わらないのは、福音書がキリストの愛の基本として説く思いやりの心に背くからである³⁾、と。こうして理性と福音書は並列されるが、前者の扱いはまだごく控え目である。自らもカトリックの聖職者を示す称号を添えて名前を名乗つた彼が福音書をもって愛や思いやりを語つたからといって殊更にとりあげる必要はないかもしれない。それどころか、もっと積極的に語つていいはずだ。ストレートにこう言えば良かったのだ、キリストの愛を無知な人々に教えてやるには演劇を使えばいい。墮

落したとはいえ、過去に聖史劇、受難劇という実例がちゃんとあるのだから、簡単だろう。先人の過ちを繰り返さず、少し手直しをして、福音書の意図を正確に反映するように改革する。

問題はそうできなかった状況の複雑さにある。この場面で推測できる適当な理由は、論敵を名指しせず、同じ土俵に立って正面から論駁しない極めて政治的な事情があった、ということだ。同じ教会に属しながら、著者が名目上の執筆依頼者であるリシュリューから受けた圧力は、キリスト教の神の大義を振りかざして勢力を拡大する教会との対立を意味していた。現に今そこに存在している人々を信者とするか、臣民とするか。⁴⁾精神的な指導の主導権を握るのは、カトリック教会か国家理性か。主導権争いの渦中で、教会側が犠牲の山羊に選んだのが、墮落の極致にあつて、いや、まさにそれだからこそ、大衆を引き付けてやまないメディアである演劇であつたでしょう。ならば、である。演劇愛好家にして名のみとしても聖職者である著者こそ、敵を知り、己を知ったこの戦いの最適任者にちがいない。

そこで、半ば意図的にであろう、改革の具体的な教科書から除かれた序文を『フランス演劇の再建試案』に読めば、著者と依頼者との利害の一致がいかなるものか、うかがわれる。著者は演劇の擁護のためには、教会の論理より国家理性を有効な武器とみなし、依頼者は国家理性の実現のためにこのメディアを活用しようとした。少なくとも著者は依頼者にそう約束する。『試案』が指摘する演劇発展の阻害要因⁵⁾は、一読、そのまま教会側の演劇批判を要約するものだが、ジャンルの質自体とそれを取り巻くモラルがきつく絡み合っていることに気付く。まったく、メディアがメッセージ、である。

- 第一、観劇はキリスト教の教義に反するという一般の認識
- 第二、俳優の職業を公に営む者に法律が指弾した不道德
- 第六、観客の無秩序

これら三点がモラルに関する部分で、残りが『作法』で主要問題とされ、そのいちいちに解答が与えられるであろう、ジャンルの技術の愚劣さに割り当てられる。

- 第三、上演に見出される欠点と欠陥
- 第四、作品の優劣とかかわりなく上演される拙劣な詩
- 第五、劣悪な装飾

ジャンルの技術論はひとまず置いて、モラルに焦点を合わせてみよう。『試案』が教会側の批判にダイレクトに応える、第一の点が最も重要と思われる。先にも述べたとおり、政治的事情によって著者が依頼者に約束する舞台の存在理由は、主に、公民の教育機関として観客すなわち演劇を取り巻く大多数である一般大衆の精神指導を一手に引き受けることにある。『試案』は教会側の批判を次のように集約して、その資格を主張する。彼によれば、批判は的外れな過去の過ちに対するものにすぎないことになる。すなわち、古代の教父たちはキリスト教徒に演劇を禁じたが、その第一の理由は、演劇の上演が古くは宗教行事であり、偽神崇拜の一部をなしていたためである。しかし、今や異教に関するこの理由は消滅している。演劇は快い娯楽に過ぎず、もはや偶像を称える不道德な儀式ではないからであり、むしろ演劇に

よって公衆を教化することは必要なことである、⁶⁾と。この線に沿って『作法』に現れる古代の演劇についての記述を見直さなければならないだろう。多くは自説の合理性を裏付け、権威付けようとして引かれるのだが、それによって批判をかわすことは忘れられていない。

では改めて『作法』の反論を拾いあげてみると、どうであろう。偶像崇拜については主に、演劇の起源がバックス信仰にあることを述べる、努めて客観的たろうとする態度に終始する。歴史的事実と認定された、少なくとも著者がそうであると承認している説明が行われている。起源の古さはいかがわしさと永遠の過去による保証⁷⁾との両極を提示して、彼の考える当代の、理想の演劇がいかに優れているかを証明してくれるはずである。例えば、第3部第2章で、作品とはコソスの歌い踊ったバックス賛歌にほかならず、その賛歌に、エペイソディオンの名の下に後に悲劇となる美しい物語とともに挿入されたのである⁸⁾、と言う。次いで、同第3章に、悲劇は長年月の間ただバックスに捧げて歌い踊る異教徒の頌歌でしかなかったこと⁹⁾、にはじまるテスピス、アイスキュロス、ソフォクレスまでの登場人物数の変遷史があり、やがて第4章の「コロスについて」¹⁰⁾で既に存在しないそれが悲劇の根源、本質の根源として規定される。冒頭、悲劇は起源においてバックスを讃えてコロスが歌い踊った聖歌にすぎなかった、と再確認され、この表現は第6章の、悲劇の淵源では、コソスはバックスに捧げられる讃歌にすぎなかった悲劇そのものを構成していたが、という一文につなげられる。ただ、ここまででは、そのような賛歌が一部となるようなバックス信仰の全容、当代の倫理基準を侵す具体的事例は述べられない。カトリックの枠に照らし、異教の、バックスの、とすれば、言わずもがな、説明不要であつたらう。未熟で野蛮な起源をもつ古代の演劇がどのような紆余曲折を経て古典主義の模範となりえるかはまた別の問題だが、アリストテレスの信奉者なら当然想定可能な発展段階をそこへ置くことは簡単な話で、あくまで萌芽、可能態でしかない出発点には、いかがわしさは十分許される。諸悪の根源を誰も知らない遠い過去に押し込め、責任の一切を負わせて退場願うには、むしろいかがわしくなければならないだろう。その意味では、著者は言われるところの古典古代がまさしく古典主義の発明品であることに極めて自覚的であつた、あるいはその理論上の発明の一端を担った自負を感じていたと言える。

第一に標的とされる根源にまつわる悪は過去のものとしてこのように決着する。だが、当面の問題である風俗素乱の責任はまだ拭い去られない。その悪の系譜は起源を引きずったままの演技者を通して当代に至るまで連綿と続く。教父らがキリスト教徒に観劇を禁じた第二の理由、つまり、ミモス、パントミモス、軽業師、大道芸人が語り演じる不道徳¹¹⁾は生き残るのである。彼らは、ディオニュソス讃歌、バックス祭、イシファルス、プリアペ、他のバックス信仰に特有の恥ずべき上演を生業として、演劇はその創始者としてバックスに、そしてその伴侶のウェニユスに捧げられていた、と言う。反論はこうである、確かに、リシユリューの尽力にも拘わらず、いまだに巷間の演劇、特に笑劇、下層民を対象とする作者が下品な話、悪しき例を舞台にあげている。枢機卿の御前同様、庶民の前でも演劇が汚れないものとなるまで、福音書の神聖さと良俗に反すると判断されてもいたしかたない。福音の勧告が振り分けられる、完全な者と不完全な者

に対する二重規範さえ、やがて撤廃されなければならないと言わんばかりだ。この譲歩は戦略的で、後段、第一の理由と同じ論法が採用され、あっさり却下となる。元々、ミモス役者、大道芸人と俳優はまったく別の職種に属す。不道德な行為は絶滅したジャンル、庶民の間でしか通用しない特異例である前者にしか見いだせない。事実、後者には市民権が与えられていた。フランス演劇の不幸はひとえに前者の末裔となった、選択の誤りに帰着する。もし、純粹悲劇と正しい俳優を受け継いでいたら、ちがった発展を遂げていたであろう。またもや過去の、今は存在しない、特異な例が悪の責任を負う。『作法』はそれを評して、ギリシア人やローマ人は遊女、放蕩息子、その忠実な奴隷、老人らが展開する悪徳の例を楽しみ、当代の庶民は喜劇や笑劇、卑猥な道化芝居に熱中する¹²⁾、と。従って、古代喜劇はしばしば自説の合理性を裏付ける材料であると同時に、グレサンプランス、レゾナブル、ピアンセアンスの優位を照射する、毀誉褒貶の対象として現れる。たとえば、著者が好んで引くテレンティウスとプラウトゥスに対する評価がある。ギリシア喜劇は大体において、アリストパネスは古喜劇および中喜劇の無秩序にすっかりはまりこんでいる¹³⁾と、ひとくりに片付けられる。一方、テレンティウスの規則性とプラウトゥスのそれとの間には、かなりの隔たりを置く。テレンティウスは規則によく適っており、演劇の技法に秀でようとする者に多くの点において手本とされる¹⁴⁾だろうが、プラウトゥスは読んでおもしろい前者に比べ、動きに富み深刻なところがなく、常に上演が成功していた¹⁵⁾、と。プラウトゥスが否定的評価を受けるのはとりわけ、独白、傍白の不適確さ¹⁶⁾についてである。心中で考えていることを大声で話す過ちをしばしば犯した、あるいは、傍白をいたるところで連発し、耐え難い、と言う。技法のうえではテレンティウス、プラウトゥス、アリストパネスの順に等級が付けられるものの、上演される内容のピアンセアンスへの違背の程度は前出のように同じである。後にニコルが断じた通り¹⁷⁾、演じる内容と演技者、観客の倫理的態度は完全に一致すると見做される。古代ギリシア、ローマ人と当代の庶民の知的レベルは同等か。そういう短絡の余地もある。この距離感はまだ無関係な世界を展望する人のものだ。第2部第1章に言う、フランスの宮廷では悲劇が喜劇より喜ばれ、庶民の間では喜劇や笑劇、卑猥な道化芝居が悲劇より面白いとされている。卑賤の生まれで不道德な感情や話を聞いて育った庶民は笑劇のくだらない滑稽をよいものと受け取るよう仕向けられ、自らの言ったりなしたりすることの似姿を舞台に見て楽しむ。そして第2部第10章の決定的な断罪に行き着く。喜劇が我国で長く低俗どころか卑猥に墮していたのはこれが劇場で悲劇に添えて上演される笑劇、無作法な滑稽劇と化してしまったからである。劇作品の列に加えるにふさわしくない、技巧もなく才能も見られず理に合わず、面白いものといえば淫らな台詞や恥知らずな所作しかないから、碌でなしか破廉恥漢にしか薦められない¹⁸⁾。要するに、『作法』での喜劇の立場は著者が擁護する演劇の枠から排除され、現にある悪弊の責任を問われなければならない当事者である。『試案』のラインに沿った答えと言うべきだろう。

以上、『試案』第一の批判、第二の理由に対する態度はいかにも弱腰であった。それを受けての第二の批判、俳優の不道德への反論は反論の体をなさない。舞台上に上る者の不道德に関しては往昔はまさに

そうであったが、今日ではもはやそのようなことはない¹⁹⁾としながら、先に引いたように古代の役者に二種類あったこと、道化劇の後を継いだフランス演劇の墮落を述べる。『作法』は俳優をどう評価するか。基本的には、第4部第1章、登場人物および作者の注意すべき点について、の冒頭、ここに悲劇または喜劇を演じる者のための教示を期待してはならない。本書がかかわるのは劇作家のみであり、俳優ではない²⁰⁾と言う通り、等閑視される。最初に俳優に言及するのは、第1部第4章で、学問や才能に欠けた群小作家と結託した一部俳優が演劇の規則の確立に抵抗したことである。彼らは恥を類かぶりして技を磨こうとしなかった。しばしば注意散漫で正確に作者の指示に従わず、自分の役だけに打ち込んで、芝居の流れとの関係が分からず、上演に多くの欠陥をもたらす。思い上がりや力不足をよいことに、何もできないくせに達者だと過信している自惚れた無知な者、見事な機械仕掛けと装置を台なしにする不注意な者もいる一方、ヴァルラン、ヴォートレー、モンドリーのような名優やかつてのマレー座の新しい一座などの存在は認められる²¹⁾。しかし、舞台の上での無知、怠慢、自惚れを責めても、日常の倫理的態度を云々する場面がない。著者にとって役者はあくまで演技者として登場し、演技の技量のみを評価の対象と考える。これは作者を指導する者に必要な客観的、冷静な態度なのだろうか。そうではない。著者は眼前の悪弊に直接触れず、彼らの倫理的な等級付を暗示しつつ、敢えて非難の材料を与えないよう努めている。『試案』にあった古代の役者の二分類が第2部第10章に見える。悲劇と喜劇はまったく異種の演劇であり、正業と認められる悲劇俳優、喜劇俳優といわゆる芸人とされる人々は同列に並べられない²²⁾。著者が作品を託すべき役者とははじめから古代の悲劇俳優と重なる演技者である。尤も、そんな俳優が現実にいるかどうかは定かでない。『試案』の反論の続きを読んでみよう。

俳優の団体は墮落した放蕩者の群れと化し、放縦な生活が多くの若者を引き付けた。国王は予防処置として市民権を剥奪したし、援助する者は悪徳の手本と関係し、放蕩の不道徳を許したことになった。俳優は正業とされず、教育のない集団では上演がうまくいかず、ますます役者も作品も観客も質が落ちる²³⁾、このめぐるめく悪循環。演劇を滅亡の危機にさらしている責任はどこにあるか。第三の批判、上演の欠陥を生んだのが上の二つの原因であり、偶像崇拜にまつわる悪弊が過去に封印されてしまった以上、残るは現にいる俳優の不道徳だけだろう。とりあえず彼らを卑賤な芸人のカテゴリーに組み入れ、純正悲劇俳優の枠を確保する方法はある。しかし、そんなものが実際にいないからこそ問題なのであり、具体的な反論もできない。状況は『作法』でも『試案』でも変わらないのだ。そこでひとつご英断を、というわけだろう。良家の子女が演じるにふさわしい作品さえあれば、国家がその後援をしてくれれば、良い(というのはつまり、技量と倫理的態度が、なのか、)俳優が現れるはずだ。どこまでも仮定の話の元をたどるとそこへ着く。眼前の悪循環を放置した場合の責任、これを断ち切る力、双方が共に国家にある。『作法』第1部第1章が国威発揚を標榜するスペクタクル論なのもうなずけよう。衣食足りて礼節を知る、式の論理

が著者の想定する俳優予備軍に通用するか、また著者が本気でそんなことを信じていたのかはわからない。名優であることと志操堅固であることとの間にいかなる関係が成立するか、これも別問題だ。ただ、演劇に付きまわっている悪はみな不完全なもの仕業であって、演劇それ自体が悪いのではない、という反論は聞こえてくる。不完全なものはその都度、パッコスを戴いた偶像崇拜であったり、儀式の一部を演じる芸人であったり、古代喜劇やそれらの末裔たち、放蕩者の集団であったりする。悪の責任は完全にして善なるものにはない。世俗的な目からは単純なトートロジーでしかないこの文言が当時のキリスト教徒にとってはまったく異なった、重要な意味をもつ。完全にして善なる神が統べるこの世の不幸の原因を探り、神の義を弁じずにおれない切迫した空気に取り囲まれ、パスカルは死んだ²⁴⁾。ドービニャックはこの式に演劇を当て嵌めて見せる。答え、完全にして善なる演劇に悪弊はない。ないはずだ。ないだろう、たぶん。

では、恐らくは彼自身の判断基準となる信仰は舞台でどう扱うべきか。初版原本になかった第4部第6章²⁵⁾を中心に、『試案』と『作法』の「弁神論」を検証してみよう。

II. 演劇のテオディセ

批判に対する反論の形を借りて、『試案』が糾弾する演劇を貶める悪の原因は、一に起源を引きずったままの演技者、二にその演技者に従属した拙劣な作品、そして三にこれらを容認する観客の存在である。とはいえ、当面の批判の最大の矛先が観客に対する悪影響に向けられているのは確かで、これは演技者と作品の改善によって解決可能となるが、改善の成功いかんは大事業を後援する国家、すなわち観客の統轄責任者にかかっている。ニワトリとタマゴの悪循環の最も御し易い相手はどれか、と言うのではない。この世の一部の悪の解消が、こと財貨に関する限り、地上的権力に委ねられるなら¹⁾、その力は善導を受けて行使されなければならない。ここで問題は権力を導く精神のありかたへと展開していく。『作法』第1部第4章で、著者が自らのものとして受けた、演劇の規則に対する旧来の抵抗を語るとき、例に出しているところに従うと、その精神は、国家の統治または教会の秘儀に齎そうとする革新の如く²⁾、あるいはそれらの下にある。このことは、舞台にふさわしい物語の筋を論じる第2部第4章で、言葉を変えて述べられる³⁾。キリスト教を信仰する生活態度の方正さは、身分のある人々に悪徳の例を容認したり、楽しんだりすることを許さない。我々が家庭生活を律する法則は、召し使いたちの手練手管を認めないし、それから身を守る必要もない。しかし、今、国家と宗教と演劇の関係は危うい三角形を描いて壊れかけている。もうとっくに壊れてしまったのか。繰り返すが、国は金を出さない、教会は悪口ごんまい、役者はバカときているこの現状で、とにかくも無関心な国の態度を変えさせるべく、取った作戦は二つの力のバランスを利用することである。リシュリューの威光を借りて教会の批判に反駁するとき、説得の相手はもはや教会ではなく、国家なのだ。だから『作法』第4部第6章は実に複雑な位置にある。著者は、原義通り、どちらでもない、という意味でニュートラルな立場から、両者の敵対関係を演出し、修復し、見事な媒介者の役割を演じて、演劇の義を弁じる。外見上の四面楚歌は、中心に囲うに足る何かを存在せしめるであろう。

神々の性質、威力、人間がその恩恵から受ける幸福、その怒りから齎されるのを恐れる不幸を見出し、神々の偉大を敬い、その行動をまねさせるため、古代の作者は作品を書いた。その目的から外れたら、宗教制度に背く罪を犯すことになった。偶像崇拜の是非を問うのではない。ただ、舞台上に宗教性を帯びさせるか、否か、だ。次いで語られる若きフランス演劇の蹉跌、挫折、復活。但し、娯楽にすぎず、聖俗混淆の冒流につながる喜劇の、宗教とのリンクは考えない。それでは、喜劇の観客である庶民にモラルを教えるのはいったい何だ。教会で演じられる聖史劇、すなわちキリスト教信者のための演劇作品が説教と平行してそれを行った。当たり前だが、彼の考える良き庶民とは教会へ行く習慣のある良きキリスト教信者である。善良な国民は劇場へ行く、とはまだ言わない。蜜月は早々に終わる。聖人を演じる俳優の自堕落のせいで、教会から追放された演劇は、劇場で節度のある娯楽を提供する一方、学校で教育に奉仕する。

演劇は大人には楽しく、子供にはためになる。そういえば、娯楽と教訓の両立はホラティウスのめざすものだった。自堕落な俳優はひとまず脇へ除けて、伝説や歴史上の英雄と共に、キリスト教的題材の物語は、教会では受け入れられなくとも、劇場では上演可能である。教会はだめでも劇場は良い。劇場の方が教会よりずっと間口が広い。劇場は敷居の低い、誰でも入れる教育機関になりえる。ここで終わると教会不要論に陥りかねない危険を敢えて冒しつつ、著者は条件を提示して行く。絶対に宗教を悪罵しない。秘儀に反論しない。その成立の真実性を云々しない。神の奇跡を説明する時間や知識がないなら、書かない。キリスト教の秘儀に固有の語法を変えて、台詞にはいけない。元々、韻文の作詞法と神学の定める語法は相入れないから、拙劣な詩をつくるか教義に背くかの二者択一である。どちらにしても、作家として、信者として、不実な結果を招くであろう。作家であることが信者であることを排除するなら、この場合、彼は作家の方を断念すべきなのである。教会あつての劇場である。教会は、劇場が世俗の娯楽を提供する場である限りにおいて、存在を許す。越権行為をしないという保留付きの保証が与えられる。(と言うか、著者が勝手に与えてしまっているのだけれど。)これらの条件は、実際には書くことを禁じたようにしか読めないのだが、当章冒頭を思い出してみると容易に理解できる。古代の作家が、崇拜の対象が異なるとはいえ、神々に捧げて書いた傑作こそは恐らく著者の言う難条件に適っているのだろう。精神世界での教会の指導力は十分に尊重され、あまりに断固たる態度が示されるので、並の作家はここで投了、お役御免となる。いつから教会の代弁者に変身したのか知れない著者は、国民の教育機関としての劇場の存在意義を忘れたのか、と疑うなかれ。教会の力はかくの如く強い、このままでは、国家はみすみす教化の場と人材を失う。庶民はまず教会に行き、そして宮廷に行く代わりに劇場に行くのでなければならない。教会に行くことと劇場に行くことが矛盾してはならない。教会と国家の関係は互いを牽制しあい、緊張を孕んで成立するよう仕組まれる。

劇場で作家は説教をしてはいけない。上の条件を受け、次は劇場側に立って演劇=娯楽論を述べる。特別に堅固な信者となるのを諦め、つまり聖職者の代役を務めようなどと自惚れず、演劇の本分は娯楽と

認識すること。誰だって公然と生活を咎められるのは不愉快だろう。そんなことをすれば、庶民は劇場に行かなくなる。教会は教会の、世俗は世俗の方法に従って行動すれば足りる。はっきり線引きしてしまえば良いのだ。楽しみ、感覚に快いことは劇場にあり、教会にはない。たぶん自堕落な俳優の口を借りてする説教は自由思想家と信心深い信者を刺激するだけだ。説教臭さ、あからさまなイデオロギー宣伝を抜いてしまえば、自由思想家から熱心な信者まで、あらゆるジャンルの人々がやって来るだろう。庶民も自由思想家も信者も、皆、劇場では観客と呼ばれる、別の顔をもっている。娯楽は思想信条を越えられるとでも言いたげな口ぶりだ。まるで総員観客化構想である。だから道徳的教訓は一般に認められる範囲に止まって、キリスト教的生活の峻厳な実践を説くに至ってはならない、と念を押される。再び聖俗混淆を戒めるわけだが、それが教会の意向に沿うためであると同じくらい、作家としての技量の見せ所をどう作るか、にかかわっていることは確かだ。コルネイユのポーリーヌ⁴⁾の徳は彼女が弱さ、情念と義務や結婚という世俗の良識、理性とキリスト教の教えの間で引きちぎられ、はじめて悲劇のテーマとなる。自分自身の心情、理性、信仰のどれに従うべきかはあらかじめ決められていなければならない。建前上、当然ながら優先順位は信仰、理性、心情である。殉教劇の難しさは結果として前二者の犠牲のうえに成り立つ信仰の成就を、現に俗世界に生きている観客にむかって提示することにある。カタルシスを求めるあまり、情感に訴える過剰な演技は理性と信仰に対する疑いを助長する。コルネイユの天才をもってしても危険な題材なのだから、避けるのが得策だった。現実的には執筆禁止と言える。だがポーリーヌの恋が信仰に抵触しない場所で語られるなら、まったく別の話であろう。そういう場所では信仰は良識の中に吸収され、外に顔を出すことがない。作品の葛藤は世俗的問題として片付けられる。神にお出まし願うまでもなく、世俗的権威、法律がポーリーヌを罰する。この舞台では法律のみが彼女を処罰する力をもつ。教会が劇場から信仰を奪うのではない。劇場の方で特定の信仰を排除するのである。もうひとりのポーリーヌの結末は剣を握っている手⁵⁾に生殺与奪権があることを示す。キリスト教の教義は学寮に委任し、劇作家は世俗的良識を軸に、かつて「神々の怒りから齎されると恐れられた不幸」と同じ図を描いて、観客をその力に従うよう導く。総員観客化は実は観客総国民化と表裏なのだ。伝説や歴史から取った世俗的物語で宗教を語ってはならない。英雄に神の加護があるか否かは今更問われない。当たり前のことだからである。一点に集中して高揚する意識に水を差すあの世の権威が観客の苦痛と非難の種になる⁶⁾。だとすれば、これもまた両者にとって不利益このうえない。やがて世俗的権威を宗教の検閲にかけることも許されなくなろう。ことここに至っては、悪信心を攻撃する喜劇など論外である。だいたい、喜劇はドービニャックにとって演劇の範疇に入らない。しかも偽信者を演じるとはもってのほか。せつかく建てた相互不介入原則を侵し、無用の刺激を与えてどうするのだ。少なくとも劇場でそれを劇化し、観客に見せるのはごめん被りたい。わたしなら、と著者は約束している、そういうことは絶対にさせない。約束して後援を乞う相手は勿論、国家である。

当初、キリスト教に忠実であるはずの著者の、精神的な支柱は言うまでもなく信仰であると思われた。信

仰の台詞についてという標題にそれを期待してしまうのだ。だが、舞台を動かす力を導くのはキリスト教ではない。宗教は、なるほど丁重なやり方ではあるが、徹底的に彼の舞台から外へ出される。世俗的権威、良識、理性と言い換えて、結局辿り着いた先は宗教の対極にある。この章は改訂版に備えて書かれ、自筆原稿のまま残されていた。約束は相手に届いたのか。演劇の無罪は勝ち取られたか。それは不明だ。しかしともかくも、演劇がこの世で果す役割の重要さは主張できた。信仰を語らず、国家に逆らわず、要するにいかなる悪にも加担しない演劇の正当性を弁護する、第4部第6章は標題を欺く、演劇のテオディセなのである。

もうひとりのポーリーヌはどこへ行くか、初版原本の連続する二章を構成していた第5章と第7章に答えがある。ドービニャックは教育的台詞あるいは教訓についてと題された第4部第5章⁷⁾を始めるにあたり、これは詩学における新しい分野で、それぞれに大著を残している諸家にもこれに触れたものは何も見当たらない、と書く。新分野を拓く気概を感じさせる書き出しではある。しかし『試案』と第4部第6章を読んだ後では、その気概は単に劇作術、台詞の構成方法に関する新機軸を打ち出すのとは異なった様相を呈する。まず、教育的台詞、教訓を次のように定義する。共通する真理を包含し、その応用と結果だけが劇行為に適用される格言あるいは一般的な命題をさし、観客に公共生活の規則を教えるのに適切な言辞。すべての教訓調の台詞は冷たく退屈で、観客を賢くするが、興奮はさせないから、感動的でもなく、楽しくもなく、一般に舞台では成功しない、とした上で、劇行為の中にいかにこの教訓を取り込んでいくか、が課題となる。成功が望めないなら止めてしまえば良いものを、わざわざ考察の対象とするには、それなりの訳がある。実際には教訓なしに舞台を成立させることができないのだ。最上位に置く精神的教訓のカテゴリーに宗教、政治、経済、人間生活の金言を入れ、尚かつ祭司、学者、教師の登場は歓迎しない。キリスト教関係者には触れられないが、容易に批判が予想され、当然、除外である。舞台は教会でも学校でもないから、美辞麗句を連ねても、教育や指導にかかりきりになって劇の筋から離れ、動きを止めたら終わりだ。劇場は公共の教育の場、劇作家は観客を教化し、同時に楽しませなければならない。相反する要素を結び付けるために、説教臭い台詞を忌避し、劇行為全体で教訓の本性を描くことが要求される。だから、この章が教訓的台詞の修辞学を教えてくれるのだと思ったら、大変な誤解である。演劇は上演された事件の知識によってのみ教育的であるべき⁸⁾で、極論すると、登場人物に下手な教訓の台詞など言わせてはならない、と言っているのだ。もっと巧妙に、注意深く、見る者に教化の意図を気付かせないように行う。曰く、風紀すなわち我々に善を愛し悪を憎ませる道德生活の行いに関する規則については、間接に諸行為を介入させて教えなければならない⁹⁾、と。

しかし最初に、劇行為を仕組むに十分な強く大胆な教訓¹⁰⁾が必要である。それには共通する真理、公共生活の規則が適当だろう。著者は教訓の内容が問題なのではなく、表現方法が問題なのだ、と言うが、宗教、政治、経済の一般原則が生硬な表現を避けて、しかも観客に意識させずに劇の内部に入り込ま

せられるかは疑問である。それらの普遍的命題は彼が言う共通する真理、公共生活の規則へ昇華、と云えば聞こえが良いが、一定の加工を施されて、舞台上に上がる。聖史劇の上演において、俳優個人のモラルと演じられる内容の宗教性の齟齬が指摘された時、著者は誰より表現方法、表現者の影響力の大きさを知っていたはずである。俳優個人のモラルの矯正、表現の質の維持が失敗に終わったからこそ、演劇は教会から追放されたのではなかったか。ここでも内容と表現は密接に結び付いていて、耳に心地よい台詞、目に楽しい動作に加工される時点で、心地よさを演出する相当な強制力が働いていると思って差し支えない。強制力は未だ正体の定かならぬビヤンセアンス、ヴレサンプランス、レゾナブルと言い換えられ、良識、真実、道理を認定する主体は建前上、観客ということになっている。勿論、実際はそうではない。宗教劇の可否を採決するのが教会であるのと同じく、世俗的な教訓を旨とする劇で裁量権を握るのは、観客を代表すると称して彼らを管理統括し、作品を採用するために検閲を行う組織、すなわち国家である。著者はそこここで、自らの経験から、古典古代劇の傑作がアテナイやローマに固有の習俗を描いて当代の国家が要請する意識とずれた場合、受け入れ難くなるケースを示している。王であるからには、暴君が舞台上で殺されるのはよろしくない。あるいは、主人に忠誠を尽くして吝嗇な老人から金を巻き上げるのはどうかと思う、等々。最低限の遵法精神が基底にあって、世俗のポーリーヌの悩みが悩みとなりうるわけだ。情念に操られた奔放さは既婚女性の取るべき態度ではない。そのことを彼女はよく理解している。結婚や結婚の約束が行動を制限するとしても、制度自体を疑い、なぜ、と問うてはならない。公共生活の規則を犯す者は公共生活の場から排除される。隠遁と呼ばれようが死と呼ばれようが大差ない処罰が待っている。その固有の道理、真理、良識を教え、啓蒙し、遵守させるために、国家は演劇を後援するだろう。教訓、教育と言って、とどのつまりは財力の根源となる得体の知れぬ暴力装置を背景とした意識、国家理性の実現にふさわしい概念を盛り込むのだ。後援者の意にかなう教訓はざらついた姿を現すことなく、劇の活力、精彩として機能する¹¹⁾。何のことはない、広告会社が営利目的で顧客の製品販売を促進する広告を作るのと似て、欠陥には目をつぶり、あたかも国家が保証してくれるかのような印象を与えつつ、従ってお仕着せにならざるをえぬ幸福な生活の実現を約束する。消費者は買った後でしか製品の良し悪しが判らないが、別の製品を選べるという点でまだ救われる。幸か不幸か、ひとたびこの世に生まれたら、選択の余地はない。

続く第4部第7章¹²⁾はとかく窮屈になりがちな教訓を口当たり良く仕上げ、情感に訴える具体的方法に言及する。観客の警戒心を解くのに気を取られ、嘘、大袈裟、紛らわしい方向へ走ってはいけぬ。登場人物の心の動きの原因が真実であるだけでは十分でなく、万人に共通する感情に従って尤もらしいと思わせることである¹³⁾。また、観客のに適合しない感情に基づく情熱は常に悪趣味に陥り¹⁴⁾、同調を呼ばない。例えば、暴君を殺す謀反が発覚し、捕われた人物の悲しみは同情ではなく、嫌悪感を生む。ギリシア、ラテン喜劇の哀傷的な台詞、嘆きの場面はキリスト教が認めない情熱のために締め出される。以下、多様な技巧によって自然の感情の混乱状態との相似を保つ方法が述べられていく。順序や規則に従

った台詞はあざといという批判に対し、悲しみの特徴を際立たせるにはそれが不可欠で、自然の欠陥、人間の行動の過誤は元の状態に戻されるべきなのだ、と答えている。彼の舞台では、加工された自然が観客の同調を促す力を持った「元の状態」あるいは「自然」である。人が、いつ、どのような状況で泣くのか、感情のコントロールさえ、良識が手綱を引いて教える。訓練を重ねれば、どんな馬も上手に乗りこなすことができるのだろうか。良識と感情の教化が娯楽の扮装をして語る台詞は、耳に甘い、幸せの約束である。

III. 逆襲する古典主義

教会に対しては不可侵、国家には忠誠を誓う『試案』に残された最後の、そして最強の敵は観客と総称される人々である。フランス演劇の発展を妨げる第六の原因、観客の無秩序について、ドービニャックは次のように言う¹⁾、わが国では上演は絶えず若い放蕩者に悩まされている。彼らは無礼を働くためだけにやってきて、いたるところに恐怖を振り撒き、しばしば殺人を犯す。観客が悪いのではない。素行の悪い連中が劇場に来るのだ。なぜか、と問うのに答えて、作品の質が低いから、と。またはや堂々巡りの泥沼に嵌まり込む前に、『作法』を振り返って見よう。

第1部第1章²⁾に登場する観客は娯楽に食欲で妬み深く、無学であるために道德の一般的準則がまったく意味をなさない。道理にも権威にも不服従な、哲学を疑う卑俗な輩である。しかし、非常に感覚的な彼らは、勸善懲悪の教訓が眼前に展開されるや、それを強く心に焼き付け、忘れることがない。そこで、同第2章で『作法』の意図を述べ、不足している演劇の規則に関する知識が補われれば、彼らはいっそう大きな楽しみを得ると宣言する³⁾。こんな論理に説得されるのはまだほんの少数の一部にすぎまい。自分の快樂の原因を分析し、解明しようなどという意志が前述の観客にあるとは思えない。多くは真実らしさのかけらもない作品を称賛して憚らず⁴⁾、理性に従うことを拒む。だが時として、彼らはフランスの習俗に合致しなければ、たとえ古典古代の傑作であっても断固としてこれを拒否し、忌憚のない意見を吐いて学者をやり込める。それと知らずに備わったある種の判断力、感性に忠実に、劇場の実質的な命運を握っている。無知であるが故に結果として悪をなす善良なオルゴン⁵⁾よろしく、啓蒙される可能性は無きにしてもあらず、である。常識の人、クレアントの台詞に曰く、正しい信仰を罵倒してはならない。どちらか極端に走らざるをえないなら、偽信心に引っ掛かった方がまだしも罪が軽い。中にはもっと手に負えぬ連中がいる。追従に長け、愚作に媚びること甚だしいくせに、あとでゆっくり嘲笑して楽しむ⁶⁾くらいはお手のもの、自覚をもった墮落の先導者である。しかし、そういう人々を抜きにして演劇が成立すると考える程、ドービニャックは脳天気ではない。観客あつての劇場、劇作家、そして理論家としての自分の存在意義がある。劇作家がそうであるように、彼もまた観客の気に入るために仕事をする⁷⁾にやぶさかでない。その目はいつも観客の方に向いているのであって、教会の領分から締め出された者を收容し、教化教育と引き換えに国家に後援を求める時も、娯楽の提供を条件にしてでなければ、何も始めることができなかつたのである。彼の観客は批判に腐心する教会の論客、規則に抵抗する旧弊な批評家、劇作家、役者、あるいは頑固なアリストテレス学者、それ以上に平土間の、大多数を占める一般人なのだ。上演におい

ては、集中力の持続しない彼らの意識を乱すな、いたずらに彼らの現実に踏み込むな⁸⁾、と戒め、以降、阻害要因を避け、作品世界を保持する手法を詳細に論じていく。第2部第1章に再び現れる観客は、いくばくか国家の意志の検閲を受けながらも、圧倒的な力を付与された存在として描かれる。主題が観客の慣習や感情に合わないと、せつかくの劇作家の配慮、粉飾が成功に至らない。たちまち拍手はやみ、そのはっきりしたわけも分からないまま、心に不快の念が生じる。上演を見る観客が変われば、劇作は変わらなければならない⁹⁾。愚者は智者と共に完璧と欠陥を感得する¹⁰⁾からだ。既知の事実の繰り返し、無用の長台詞には退屈し、うんざりする¹¹⁾。彼らが舞台上に視線を注いでいられる許容時間こそが実際に上演時間を決め¹²⁾、事件は見る側の推理能力に合わせ、展開する¹³⁾。さまざまな局面で観客の感受性、想像力を正確に測り、これに応えることが要求される。読者に比べてずっと忍耐に欠け、動きのない議論を嫌い¹⁴⁾、文彩に凝りすぎて一旦理解不能になれば、もうついて行かない¹⁵⁾。ひとつ確かなことは、彼らは芝居を見て心底泣いたり、笑ったりしたいだけなのだ。単純な話ではないか。しかし、娯楽以外の何に対しても無欲なこの人々を理詰めで納得させることは至難のわざと言って良い。劇作家はこれまで、個人的な経験の積み重ねと生来の感覚に頼ってこれら大多数の人々の求めに応じて来たが、時間、能力にはおのずと限界がある。チャンスは少なく、あったとして、度重なる失敗を許す寛容が期待できないとなれば、労力を最低限に押える方策、すなわち喝采の最大公約数である規則が必要になる。極めて感情的な存在と規定されたこれら大多数の観客の嗜好に合わせ、ドービニャックが提示するルールとは、またその最終的な狙いは、いったい何か。

真実らしさを構成する時間、場所、筋の一致を劇作術の中心課題とした時¹⁶⁾、彼の理論を指して後にそう呼ばれることになった、古典主義演劇理論が観客の情動を犠牲にしたと考えるのは誤解であろう。事態はまったく逆である。彼が最も心を砕いたのは、本来受動的であるにもかかわらず、だからこそ無定見な観客をいかに同調させるか、効率的に情動を引き起こすか、であって、真実らしさにかかわる一切がその最低部に属す、基本的な事項にすぎない。これのみを金科玉条にすえて上演ができるとはしていない。アリストテレス学者である彼が『作法』にテオリーを名乗らせず、敢えて一段下のプラティックという位置付けをするのはそのためにちがいない。では実際、傍若無人の観客を舞台上に引き付けるにはどうすればいいのか。第3部第5章¹⁷⁾で、各幕の配分を述べるに際し、注意すべきこととして、事件の緊迫さ、発露される情熱の大きさ、スペクタクルの特異さをあげている。幕毎の新味がなければいけないが、かといって、それによって引き起こされた情動を味わう時間的な余裕がないなら、効果は失われる。目に見、耳に聞いて楽しいこと¹⁸⁾を最優先に、ジャンルによって重点を変える。喜劇は目で見た動きのおかしさ、活気を求めて場数を多めに設定し、悲劇は集中して情熱の発露、心の動揺を聞かせるために多くの台詞を割く¹⁹⁾、などである。ただ、その動揺のうち、最も内密で真意を語り、観客の同調を最も容易に得られそうな独白が大声でする演説に化したら、もうあざとい、興奮めだ²⁰⁾。傍白も同様な扱いを要する²¹⁾。使えば効果的なのは分かっているが、扱いが難しい劇薬である。独白はとぎれとぎれの嘆き、傍白は二行以

下に限られる。同調する登場人物の数もその能力、集中力から限定を受け²²⁾、主要登場人物は、ドービニャックがそこにこそ演劇のすべての力と魅力が存すると言う、最良の衣装、美しい台詞、激しい感情で観客の感覚を充たし²³⁾、我を忘れさせる。次いで、モンドリーの名演を例に、やがて激情に昇り詰める感情の段階的な発展を具体的に記すと²⁴⁾、美しい感情の前では、真実らしささえ時にまったく力が及ばないことを、ロドリグとシメヌによって実証する²⁵⁾。この舞台は焦慮と動揺と悩乱の悪霊の支配する場²⁶⁾である。矛盾した心の動きに駆り立てられ、さまざまな情念にせかされ、極限の決意に高揚する精神が目前にある。度肝を抜く豪華絢爛な舞台装置、魔術を思わせる大規模な機械仕掛けがある²⁷⁾。こうして登場人物と一体化した彼らは、燃え上がる情念に共に身を捧げ、人間の弱さと強さを存分に味わい、眼前に展開する奇跡的な情景に恍惚とし、一時なりと現世の桎梏から解き放たれて茫然自失する。観客に約束されるカタルシスはざっとこんな具合であろう。divertir-divertissementの字義通り、彼らはこの現実から目をそらされ、ありえたかもしれない自分を生き直す。物語は架空でも、そこで起きた情動は現実だからである。同調が危険なのはまさにそのためだが、『作法』の著者はそんなことは百も承知でこれを書いたのである、いまさら言うべきことでもあるまい。感情を作り出す方法を理論的に考え、これを未熟な劇作家に与え、観客の大多数の支持を得ようとした、そのことが重要なのだ。舞台は机上の空論で役者を操る場ではない。観客が自ら感情を消費し、意味付け、再生する場である。あなたがたを楽しませずにはおかない、損はさせない、だから劇場に来なさい、と。この口調は誰かに似ている。貪欲な観客がドービニャックの考える娯楽のかたちに満足するかどうかは分からないが、なんとか説得しようとした努力は認められよう。

現実には抑圧され、疲れ、不満を募らせ、自暴自棄になって暴力に訴えるドービニャックの観客たちは、他のどこでもない、劇場に来れば、「本当の自分」を見い出すことができる。完全無比のスペクタクルの前に、貴族たちが宮廷の壮麗さから味わう喜びに嫉妬しなくなるはずだ²⁸⁾。これが『試案』の結論である。彼は悲惨な群衆への慰めを伝えるマタイやルカの口を借りて²⁹⁾、地上の天国を語る。大多数の人々にとって、来世の天国はあまりに遠い。果てしなく続くと思われる労苦に対する慰めは明日ではなく、今日、彼らに差し出されなければならない。世俗の言葉で感情を謳うドービニャックは演劇の使命をこのささやかな慰めのうちに置く。絶望の代価に咲く花は実を結ぶのであろうか。

おわりに

『フランス演劇再建試案』を通して見る『演劇作法』には、教会、国家、観客の三者を相手に演劇擁護に力を尽くすドービニャックの姿がある。不可侵を誓う教会への反論はそのまま、後援を請う国家への忠誠、そして慰めを必要とする観客への約束に振り替えられる。改革が焦眉と思われたのは、それだけ切迫した危機が実感できたからだろう。書齋の理論を越え、つぶさに現場を見て来た者に特有の熱が今もじゅうぶん保たれている。筆遣いは最善説信奉者、弁神論者、そしてまた俗人にキリストの福音を伝える

使徒に似て、やがて防御から反撃に転じる。けれども彼は、楽しい芝居が見たい、ただそれだけのためにこれを書いたのかもしれないのだ。そうであれば、最も扱いが困難で、説得を要し、慰めを求めているのはドービニャック本人ということになる。掲げるプラティックの看板に偽りはなくても、望みが実現可能かどうか。この観客は演劇の理想形を知ってしまった。天才の登場なしに、もはや誰の手にも負えまい。そして、自らに約束した傑作が現れたとき、『作法』は過去の遺物となる。その日、彼の敗北は同時に勝利である。

注

*以下の頁数はすべてオービニャック師、『演劇作法』、戸張智雄訳、注解、1997年、中央大学出版部による。なお、本文中の著者の呼称についてはアベ・ドービニャックの訳を取ってオービニャック師とすべきところだが、多少馴染みのある通称の方を使用した。

はじめに、I.

1)注解、302-307頁

2)作法、3頁

3)作法、8頁

4)マルティン・ルター、『現世の主権について』、吉村善夫訳、1977年、岩波文庫
J-J・ルソー、『社会契約論』、第4部第8章、桑原、前川訳、1977年、岩波文庫
マックス・ヴェーバー、『職業としての政治』、脇圭平訳、1988年、岩波文庫
Georges Couton, *Richelieu et le théâtre*, Presse Universitaire de Lyon, 1986.

5)試案、287頁

6)試案、286頁

7)ヴェーバー、11頁

8)作法、142頁

9)作法、147頁

10)作法、156頁

11)試案、286頁

12)作法、第2部第1章、58頁

13)作法、第1部第8章、43頁

14)作法、第3部第5章、175頁

15)作法、第4部第2章、225頁、第3部第5章、177頁

16)作法、第3部第9章、202頁、第3部第8章、200頁

17)Pierre Nicole, *Traité de la Comédie*, chap.II, pp.42-43, Ed. par Georges Couton, Paris, Société d'Édition les Belles Lettres, 1961(1675).

- 18)作法、59 頁、115 頁
 - 19)試案、286 頁
 - 20)作法、213 頁
 - 21)作法、第 1 部第 4 章、18 頁、第 1 部第 8 章、42 頁、第 3 部第 8 章、200-201 頁、第 4 部第 1 章、222 頁、第 4 章第 9 章、282 頁
 - 22)作法、117 頁
 - 23)試案、288 頁
 - 24)1623 年生まれ、1662 年没
 - 25)作法、凡例、252 頁
- II.
- 1)ルター、58 頁
 - 2)作法、17 頁
 - 3)作法、58 頁
 - 4)作法、第 4 部第 6 章、257-258 頁
 - 5)ルター、45 頁
 - 6)拙論、バロックの戦略(V)、『演劇作法』とバロック的戦略、中大仏文研究、1998 年
 - 7)作法、245 頁
 - 8)作法、249 頁
 - 9)同上
 - 10)作法、249 頁
 - 11)同上
 - 12)作法、260-261 頁
 - 13)作法、262 頁
 - 14)作法、264 頁
- III.
- 1)試案、290 頁
 - 2)作法、3 頁
 - 3)作法、11 頁
 - 4)作法、第 1 部第 4 章、17 頁
 - 5)モリエール、『タルチュフ』、第 5 幕第 2 景、89 頁、鈴木力衛訳、1984 年、岩波文庫
 - 6)作法、第 1 部第 5 章、23 頁
 - 7)作法、第 1 部第 6 章、29 頁

- 8)作法、第1部第6章、30頁
- 9)作法、57頁
- 10)作法、59頁
- 11)作法、第2部第6章、89頁
- 12)作法、第2部第7章、90頁
- 13)作法、第2部第8章、第9章
- 14)作法、第4部第4章、243頁
- 15)作法、第4部第8章、275頁
- 16)作法、第2部第2章、60頁
- 17)作法、第3部第5章、182頁
- 18)作法、第3部第5章、183頁
- 19)作法、第3部第7章、195頁
- 20)作法、第3部第8章、200頁
- 21)作法、第3部第9章、203頁
- 22)作法、第4部第1章、217頁
- 23)作法、第4部第1章、220頁
- 24)作法、第4部第1章、222頁
- 25)作法、第4部第2章、225頁
- 26)作法、第4部第4章、239-240頁
- 27)作法、第4部第9章、277頁
- 28)試案、293頁
- 29)『新約聖書』、共同訳、全注、マタイオス、第5章第1節-第12節、11頁、ルカス、第6章第20節-第25節、191-192頁、1978年、講談社学術文庫

アンドレイニ(G.-B.)の演劇擁護論とフランスでの反響

片木智年

十六世紀末から十七世紀初頭、フランスでも高い名声をえた女優イザベッラ・アンドレイニの息子にあたるジョバンニ・バッティスタ・アンドレイニにはパリで刊行された作品がいくつかある。なかでも、リシュリュー枢機卿に献じられた *Teatro Celeste*, Parigi, N.Callemont, 1624 はフマローリの論文(1970)¹⁾で言及された。近年、ロトルーによる『聖ジュネ伝』がコメディ・フランセーズで上演され、さらにはアグレガシオンでもとりあげられたが、そんな状況のもと出版されたサンチェスによる同作品の校訂版(1991)では、*Teatro Celeste* に収められたジュネに関するソネが紹介されている。

アンドレイニの一連の作品は、イザベッラ、ジョバンニ・バッティスタと続く宮廷文化との接触で純化されてきた *comici virtuosi* の称揚を目的としたものであり、コメディア・デ・ラルテ一般の擁護ではない。ましてやパリで出版されたものであってもフランス演劇について語っているわけではない。しかし、フマローリが指摘するように、チェッキーニ、アンドレイニと続くイタリア的演劇擁護の議論の含蓄するものは大きい。実際、*Teatro Celeste*(Parigi, 1624)と *Lo Specchio* (Parigi, 1625)は出版年代からいっても、またリシュリュー、及びヌムール公に献ぜられたパリでの出版であることから、30年代から始まるフランスにおける広範な演劇擁護運動のモデルとなったというのはいくらにありえることである。本論も多くを負っているこのフマローリの論文では、主にイタリア人によるいくつかの重要なテキストの紹介とコンテキストの説明がされており、具体的にイタリア的伝統がフランスでの議論にどういふ影を落としたかは、研究の方角の示唆にとどまっている。したがって、ここではアンドレイニに焦点を置いた上で、アンドレイニ的演劇擁護論とフランス的伝統との具体的干渉を検証することになる。

まず1624年に出版された *Teatro Celeste* から検討してみよう。表紙のタイトルは同時代の出版物に多く見られるように、かなり長いものである。

TEATRO CELESTE Nel quale si rappresenta come la Divina bontà habbia chiamato al grado di

Beatitudine, e di Santità Comici Penitenti, e Martiri; con un poetico Esordio à Scenici Professori di far l'Arte virtuosamente, per lasciar in terra non solo nome famoso: ma per non chiudersi viziosamente la via, che ne conduce al Paradiso. All'Illustrissimo, & Reversissimo S.S. & Padron mio Colendissimo il S. Cardinal di Richelieu.

すでにここからも伺えるように、地上的なものと神聖なものとの関係が、役者の職業の問題とからんで扱われている。「悔い改め、殉教した役者たち」がいかにして聖者、福者に列せられたかというものである。

アンドレイニは序文で過去の改宗した敬虔な役者たちを回顧し、その「祝福された改宗を歌う鳥」に自分をなぞらえ、殉教した役者たちと対比させながら、生き続けている罪深い役者の自分を語っている。そして彼ら、Comici Devoti, Beati, e Santi は「役者たちみんなに劇場同様、エルミタージュにおいてもまねばれる機会を与えるだろう」²⁾というのである。

「地上に名声を残すためのみではなく、天国へと通じる道を、不徳によって自分自身に閉ざさないように」とタイトルページにも明記しており、l'Arte を virtuosamente にまっとうすることによって、殉教したいにしへの役者たちに近づくことができるのである。アンドレイニはこうして、まず過去の同業者を喚起することにより、役者という職業をはたすものが従うべきモデルを打ち立ててみせる。と同時にそれは現在の自分たちの社会的存在に歴史的奥行きを与えることである。もはや役者は社会のマージンで疎外され続けた匿名の異端者ではない。殉教した役者という具体的で歴史的なモデルからの連続の中で、位置づけられる存在となる。歴史的正当性にくわえ宗教的正当性の中で自分たちの社会的アイデンティティーを模索しうるのである。

さて、フランスで殉教した役者を題材にした作品はといえば、デフォンテーヌ、ロトルーの1640年代半ばの聖ジュネを題材とした競作芝居がよく知られている。

ただ、デフォンテーヌ、ロトルーいずれの作品においても、結末において、一種の演劇の自己否定ともとれない事態で幕が下りる点が気になるところであった。地上において現世の芝居を演じていた役者はローマ宮廷、ディオクレティアンの寵愛を捨て、殉教という行為のみによって天上の舞台へ達することになる。現世における営みとしての演劇活動はフランスの両作品においては否定されてしまうことになる。ローマ宮廷でそのモラルと礼節をたたえられ、栄光の座を獲得したジュネの劇団の姿はルイ13世＝リシュリューのもとで復権したフランス演劇を映していると考えられるだけになおさらである。

この点においても、アンドレイニの視点は示唆するところが多い。アンドレイニにおいても、現世の舞台と天上の劇場は峻別されている。現世における Scena del mondo はすなわち死

の世界にすぎず、真実の永遠の人生は天上において準備されている (Ch'un bel viver eterno est 'n Ciel serbate.) という。しかしそのいっぽうで現世において演劇が果たす奥義的な役割が、はっきりと位置づけられているのがアンドレイニの視点の特徴である。

アンドレイニ的 *theatrum mundi* 観が否定しなければならないのはプラトンの伝統、すなわち演劇は「影の影」であり、二重化された虚無であるという考え方である。この舞台の上の舞台という内包的な捉え方は後代のニコラの演劇批判にも現れると同時に、皮肉なことだが、演劇サイドにスタンスをとったはずのデフォンテーヌ、ロトルーの作品でも暗示されているように思える。

ところがアンドレイニの *theatrum mundi* は現世の舞台上の演劇を、舞台の上の舞台という内包関係の中でとらえない。元来世界の舞台の中に内包された小舞台である演劇を逆に世界を包み込むものとして形而上的レベルでとらえなおすのである。アンドレイニにとっては舞台は鏡であり、世界自体をグローバルに映し出してみせる、いわば世界と対峙し、同時に世界を包み込んだ無限体となりうるのである。直接に世界劇場に言及したソネの終わりでアンドレイニはこう語っている³⁾。

Spettator qui sù l'ali humile alzato
Entro Specchio rimira hoggi funesto
Ch'un bel viver eterno est 'n Ciel serbate.

現在は死に満ちているものの、観衆には同時に天上に準備された永遠の命への誘いが鏡に啓示されるのである。この現世を映しながらも、高次の世界への誘いとなる演劇の概念は *Lo Specchio* (1625)⁴⁾ の読者への前書きにおいてもっとはっきりと示されている。

Poiche si come lo Specchio il vero ci rappresenta, cosi da questa intitolazione chiaro si vegga com'io no apporto, se non il lucido delle più trasparenti dottrine Sacre...

こういった演劇観のもとで、役者はどういったステイタスを与えられるのだろうか。

QUESTA Vita fatal piena di morte
Pur ci rassembra Recitante anch'Ella;
Ne la Scena del Mondo ecco la Bella
Giovinetta apparir con sogge accorte.

Poi cambiando tenor Comica sorte
D'horrida Vecchia parte fa novella,
Che fatta d'agonia misera ancella
Nulla cosa hà che l'ami, o la conforte.

同じソネだが、女優は「死に満ちたはかないこの人生の中」、美しく若い姿で現れもするし、劇的に装いを変えて醜い老人の役でも現れるのである。舞台の上でさまざまな役割を演じきってみせることは、やはり多様な人生とそのうつろい、儚さを映し出し、鏡と象徴としての役割を同時に体現してみせる行為である。この意味で、役者はすべての人間のメタファーであるとともに、それゆえに個々の存在を超えることができる。このソネに言及してフマローリは《Comédien-Microcosme》という考え方を導入しているが、先に述べた意味で、むしろ役者は人間世界を包含しているといいたくもなる。

実際にアンドレイニ自身、多くのキリスト教劇を書いているのは、役者を媒体として現世の存在と天の存在をつないでみせるためだからだ。役者は、私的存在、生物的存在を超え、象徴としてふるまうことができる故、神と人間全般の仲介者となることができるのである。

もちろん、このアンドレイニ的役者論はオーソドックスの護教論者にとっては非常に危険なものとなるだろう。

フランスでの反響は、アンドレ・リヴェの著作⁵⁾の中に認められる。ルイ13世、リシュリユーの演劇擁護に積極的だった政権のもとにある30年代としては、唯一の注目すべき教会側のリアクションである。リヴェはマリアーナの考え方を援用しながら以下のように述べている。

Mais quoy, si ces Acteurs se contiennent es termes de la modestie, & ne representent es lieux sacréz que des histoires sacrées? (...) Pourquoi? <<Pource qu'il n'est pas convenable, dit-il, que les gestes des Saints soient représentéz par des hommes infames (...)>>p.32.

ここでも、役者たちの私生活はキリスト教道徳からはかけ離れたものであるという大前提が認められるが、それゆえ、聖人が役者によって演じられるというのは認めがたい。ましてや、「qu'en une compagnie des comoediens une femme qui jouïoit le personnage de la Magdelene, fut surprise en adultere avec celuy qui jouïoit le personnage du Sauveur, & qui le representoit, en voix, gestes, & habits. »p33. などとなつては何をかいわんやというところだろう。当時の観客一般が「舞

舞台上で役者が演じる役柄と彼らの私生活を混同していた」というのはよくいわれるが、わたしには本当かどうかはわからない。しかし確かにここで護教論者リヴェは、彼自身のもつ「記号＝本質」観、もしくは表象は本質の反映であるというオブセッションを露呈してみせる。聖なるものの現れは、聖なる本質を前提とするという宗教的前提が、生身の存在を超えたところにあるアンドレイニ的役者観とぶつかっているのである。

こういう固定概念を持ち続けた人々の存在を意識してこそ、アンドレイニは「美德に満ちた役者」と「断罪されるべき役者」、「よい演劇」と「悪い演劇」、「非難されるべき過去のミームたち」と「現代の *comici virtuosi*」を峻別して見せた上で、彼らの舞台のプロフェッショナルリズムを強調して見せたのである。 *Lo Specchio* の読者への前書きにおいてアンドレイニはこう語っている。

BENCHE superfluo in tutto sia, che i Comici de' moderni tempi s'affatichino in dimostrar la nobilità, e concessione di quest'arte Comica, tratta dall'honesto, e virtuoso loro operare, non di meno per far chiaro à quelli che vivono in tenebre di malvagità, che lecitissima, e di proffitto, e questa virtuosa Professione, e ch'ad ogni momento si compartono favori, e si dispensano lodi à civili, e studiosi Comici, presi la penna e la prensente Operetta scritti, intitolata lo SPECCHIO.

「現代において役者がその nobilità を例証してみせるのはまったく、余計なことだが、」というのはもちろんレトリックであろう。主たるターゲットは相も変わらず *tenebre di malvagità* の中に生きているもののだとして、その他の読者が完全にこういった偏見から解放されていると前提してみせるのもポーズである。

そしてはっきりと *arte Comica, virtuosa Professione* と演劇を職能として強調しているのは、どさまわりで民衆を笑わせ日銭を稼ぐ社会的アウトロー、としての役者集団から、プロフェッショナルリズムへの脱皮を強調する故である。

先に引用しておいたリヴェのリアクションが直接にアンドレイニに向けられたものとは思いがたいが、アンドレイニ的演劇観の反響はすでに30年代前半のフランス演劇においても認められる。

Dieux, d'Empereurs, de Roys, de Princes, de Seigneurs, de Gentilhommes, d'Advocats, de Medecins, de Marchands, de Bergers, de Serviteurs ou autres de quelques qualitez ou conditions qu'ils puissent estre, comme il faut que le Théâtre en produise de toute sorte, estant une figure racourcie du monde, (A.1,

Scn.3)

同じグージュノのテキストでも次のくぐりはさらに興味深い。

mais qu'il [théâtre] requiert aussi des esprits universels soit aux paroles, aux actions & sur tout représenter en abrégé toutes les actions du monde. Et c'est avec beaucoup de peine, d'autant que douze Acteurs pour le plus dont la scène est composée doivent en cinq actes & en deux heures représenter ce qui dans l'univers aura peut-être succédé en vingt années à mille personnes. (A.1 Scn.3)

グージュノが esprits universels と呼ぶもののおかげで役者は舞台の上に時間と空間の本質を凝縮した上で世界と人生を再現してみせることができるのである。著者はさらにこう続けている。

Et de plus c'est que dans le Theatre universel nul n'est attaché qu'à sa propre condition; mais au Comique chaque Acteur doit représenter la qualité, la condition, la profession ou l'art que les sujets requierent (A.1 Scn.3)

役者の私生活における道徳性を *honnêteté*, *civilité* といった当代のモラル意識に絡めて、称揚してみせる本作品だが、教会の問題は欠け落ちてしまっている。同時に演劇と役者という存在のもつ天と現世を結ぶ形而上的な意味あいも消し去られてしまっている。フランス30年代に相次いで上演、出版された演劇を主題とし、自己言及的な演劇擁護キャンペーンを展開する作品群では、宗教の問題に触れるのはタブーであったようだ。この点でもアンドレイニとのコントラストは明確である。アンドレイニははっきりと教会サイドの賛同に言及している (Non più dalle Città discacciate sono: ma da quelle di santa Chiesa, e da I Regni, e Catolici, e Cristianissimi chiamate, ascoltate, ammirate, e premiate vengano. Non più I sacri Canonici negano à Comini le Communioni : *Lo Specchio* 序文)。もちろんイタリアにおいても、宗教サイドが一致して演劇を認めていたわけではない。ストラテジックな発言なのである。フランスの事情はといえば、リシュリユーのもと、教会側としても政治権力への遠慮があったのだろう。沈黙が続く。この奇妙な沈黙の中で、フランス演劇は礎を築いていったのである。

この沈黙を破ったのが、リヴェの *Instruction chrestienne* だったといえるが、同年に出版されている演劇サイド、スキュデリーからの *L'Apologie du Théâtre*⁶⁾ との関連を考えなければなるま

い。この演劇擁護論の中、スキュデリーはきわめて慎重な言葉で、教父たちの伝統を検討した上で、アンドレイニ同様に過去と現在、不純なものと道徳的なものを峻別する必要を説く。すなわち«ce qu'elle estoit dans quelques uns des Siecles passez, & ce qu'elle est maintenant dans le nostre»(p.2)は別物であり、«l'une n'estoit que medisance & salletez, & que l'autre n'est que pudeur & modestie»(p.2)とする。そして演劇というメディアの特性に基づく教化的作用の有効性を説いている。このあたりの論旨はアンドレイニ的演劇擁護論や、イザベッラ・アンドレイニを賞賛し、おそらくアンドレイニ一族の演劇観を大きく反映した *Mademoiselle de Beaulieu*⁷⁾ などとも共通するところである。しかし、スキュデリーはそれにとどまらず、演劇と役者の内包する危険性にも言及した上で、論を展開させているのである⁸⁾。スキュデリーは「役者＝不道徳もの」というレッテルをはぎ取るために、歴史的に著名な役者たちを想起しているが、ここでジュネについて言及されている。

Il s'est trouvé des comediens qui ont [...] merité celle du Martyre, comme S.Ginesius, qui de la Scene ou il representoit, fit l'Eschaffaut de son suplice, & le Theatre de sa gloire. (p.83-84)

しかしながら、スキュデリーもこの殉教した役者というエピソードがもちうる意味をこれ以上掘り下げるような論議は進めていないのである。

殉教した役者について

さて、*Teatro Celeste* から論を起ししながらも、あえて、ここまで、デフォンテーヌ、ロトルーによる殉教者ジュネについての競作にはあまりふれずにきた。しかし、これで問題の二作品が現れた歴史的コンテクストが見えてくるような気がする。両作品の意味あいについては、別に長く論じたこともある⁹⁾ので本論ではくりかえさないが、以下若干の考察をつけ加えておきたい。

フランスではじめてキリスト教と演劇を主題として取り上げた演劇作品が、コメディアン、ジュネを題材としているのは特筆に値する。これはこれで演劇サイドからの一つの態度表明であったからだ。そしてデフォンテーヌ、ロトルーによるこの二作品はアンドレイニ的演劇擁護の内包するものを、フランス的コンテクストにおいて問題化したものであったと考えられるからだ。

デフォンテーヌ、ロトルーの両作品が現れるためには、ポリュウクトの成功に代表される40年代のキリスト教悲劇の流行が重要であったことはいままでもない。しかし、このキリ

スト教悲劇ブームだけで、護教論と演劇擁護という矛盾したメッセージを作り出すことを使命とした作品の誕生について語るのは、片手落ちであろう。

これについては、30年代の終わりに出版された、アンドレ・リヴェとスキュデリーの著作が重要なターニングポイントになったのではないかと思う。プロフェッショナリズムを標榜するフランス演劇がその道徳性を示すためには、そして、それまでタブー視されてきた教会サイドへのメッセージを送るには、護教劇を演じることがまっとうな方策である。ところが教会サイドには、リヴェがむしかえしたように、聖なるものを役者たちが演じるのはとく神であり、世俗劇にとどまってもらった方がまだましだというアレルギーがある。アンドレイニに続く、スキュデリーのジュネについての短い一文はこの意味で、1645年に最初の『聖ジュネ伝』を出版するデフォンテーヌに対する啓示となったのではないだろうか。

ジュネの殉教を上演することにより、護教的なメッセージと役者が聖なるものを演じることの擁護を重層化させることができるからである。

アンドレイニのソネにおけるジュネはローマ宮廷で *Idolatra* としてあつかわれており、「洗礼の儀式をあざ笑う」ために舞台に上り、実際に改宗してしまうというアイロニーを例証するものである(*CONVERSIONE DI S.Ginesio Comico, & Idolatra, alhor che 'n Theatro per derider il Battesimo si convertì dadovero, onde sotto Diocliziano fù decapitato*)。これに加えて、死刑台を栄光の舞台とした(*l'Eschaffaut de son suplice, & le Theatre de sa gloire*) というスキュデリーのレトリカルな一文が、おそらくデフォンテーヌの構想の出発点となったのであろう。

Changer les eschaffauts en superbes Theatres,
Et là, leur faire voir dans la derision
L'erreur et les abus de leur Religion, (A. 1, Scn 1)

デフォンテーヌはこうして刑場と劇場のアナロジーによるアクロバティックな反転を見せる。ローマのキリスト教迫害の刑場は、劇場へと装いを変え、その劇場は栄光の舞台としての殉教の刑場へと変化する。そして、地上の舞台と天上の舞台への橋渡しが行われるのである。

本論のはじめに少し言及したが、デフォンテーヌの本作品では、アンドレイニ的な形而上的役者論が一見、抜け落ちてしまっている。ジュネに従う恋人パンフィリをのぞくと、残る役者たちは宮廷的な道徳は身につけているものの、キリスト教的には迷妄の中にとどまる。ここではどうやら、「選ばれたもの」という視点が導入されているようである。さらに気になるのが、デフォンテーヌの踏襲した「洗礼式を嘲笑うための演技が真実の改宗を呼ぶ」と

いう図式は、元来キリスト教の奇跡、洗礼の秘儀的な力にアクセントをおくものであり、そのためにこそ、この芝居の極端な図式が選ばれたといえる。したがって、本作の構成にはレトリカルな力は十分にあるものの、それが本当に現世の役者のモラルの擁護につながるメッセージとして適切であったかということだ。フランス的コンテクストにあるデフォンテーヌとしては、アンドレイニ的 *Theatrum mundi* の内包するものを十分に取り入れることができなかったのではないだろうか。

もちろん、演劇を鑑賞する場合にどこのレベルでメッセージを受け取るかという問題はあ
る。作品内容のレベルからいうと役者の擁護とはいえずとも、モリエール率いる「盛名座」
の役者がこうして護教的な演劇を演じるというレベルでのメッセージは生きているからだ。

こう考えてみると、ロトルーの芝居の方が役者の擁護と復権というメッセージにおいては
一歩踏み込んだものだということがわかってくるのである。ロトルーにおけるジュネは「洗
礼式を嘲笑うための演技が真実の改宗を呼ぶ」という奇跡以前にすでに、改宗のサインを見
せている。ローペ・デ・ベーガの芝居に発想をえた『聖ジュネ伝』におけるリハーサルの一
シーンはこの意味でも重要である。殉教者の役を準備するジュネに幻聴体験として、神の声が
届く。ローペ・デ・ベーガでは天使のメッセージであることが暗示されるが、ロトルーでは
そのへんははっきりしない。ジュネの心中ではこのメッセージの真偽、自分自身の中に目覚
めている宗教的感情の真偽、について揺れ動く状況が示される。聴覚は神のメッセージにも
っとも開かれた感覚であったことを忘れてはいけない。ルネッサンスから古典期に描かれた
『受胎告知』のシーンを思い出してみればよいだろう。しばしば天の使いは、靈的なもので
ある故不可視であるが、そのメッセージは聴覚を通して届くのである。実際ジュネはこう独白
している。

Qu'endends-je, juste Ciel, et par quelle merveille,
Pour me toucher le coeur, me frappes-tu l'oreille? (A.2, Scn 4)

また、スキュデリーが *Apologie* で援用する「科学的」感覚論でも、聴覚は五感のうちでも
っとも人間の悟性に直結したものである。

L'ouy est sans doute celuy de tous les sens qui approche le plus, du propre siege de l'entendement &
de la raison, qui est le cerveau; si bien qu'il corrompt aussi plus facilement l'ame, si ce qu'on reçoit par
luy n'est pas bon. (p.6)

一方、天の声を聞くジュネにはこの事件以前すでに、十分な準備があったことも示されている。また、劇中劇が始まってからの、アドリアンのマスクの下でジュネが生きる感情の発展のダイナミズムについても、別論文¹⁰⁾述べたように非常に興味深いものが見られる。ルーセが広めることになるいわゆる「バロック」的解釈でいうところの「仮面」と実体の問題は、仮面の実体への優位性というパラドクスの魅力を喧伝するものであった。ロトルーの『聖ジュネ伝』が忘却を免れたのはこのパラドクスに対する後世の感受性によるところが多い。が、ロトルーの作品をもう一度、歴史的文脈におきなおした場合、同時に見えてくるのはむしろ神の恩寵に導かれた実体、一人の地上の役者の心の葛藤と展開、という護教的であると同時に役者の復権をめざしたメッセージでもあるだろう。

NOTES

¹⁾ Fumaroli (Marc), "La Querelle de la moralité du théâtre avant Nicole et Bossuet", RHLF, 1970, Nov-Dec, pp.1007-1030

²⁾ «Furono Comici Divoti, Beati, e Santi, quelli, che acerbamente piansero, e si convertirono; & io solo Comico peccatore fui serbato uccello palustre à cantar le Loro felici Conversioni; accioche non solo à me solo ma eziandio ad ogn'altro Comico porgessero occasione d'esser imitati così nell'Eremo come nel Theatro.»

³⁾ CHE QUESTA VITA NOSTRA / nel Theatro del Mondo sia / fatta recitante.

⁴⁾ Andreini (Giovanni Battista), *Lo Specchio* : Compositione sacra e poetica, nella quale si rappresenta al vivo l'immagine della Comedia, quanto vaga e deforma sia, alhor che da comici virtuosi o viziosi rappresentata viene, -Parigi : N.Callemont, 1625.

⁵⁾ Rivet (André), *Instruction chrestienne, touchant les spectacles publics / Des Comoedies & Tragoedies* : où est / decidée la question, s'ilz doivent / estre permis par le Magistrat, & / si les enfans de Dieu y peuvent assister en bonne / conscience? / Avec le jugement de l'Antiquité sur le mesme subject. -La Haye 1639.

⁶⁾ Georges de Scudéry, *L'Apologie du Théâtre*, Paris, 1639

⁷⁾ Attribué à Beaulieu (Mlle. De), *La Première atteinte contre ceux qui accusent les Comedies*. / Par une demoiselle Françoisise. Jean Richer, 1603 « Il nous reprend d'assister aux Comedies: Nous serions dignes d'un reproche eternal, si elles estoient telles qu'il les represente: & nos Pasteurs nous banniroient des Sacrements, comme indignes de porter le glorieux tiltre de Chrestiens, s'il y avoit quelque reste de celles qui sont condamnées tant par les Papes que les Empereurs: s'ils ont retenu le nom de Scene & de Théâtre, & autres mots, ils en ont rejetté le vice.» p.6

⁸⁾ «En effet, la chaleur Poétique est bien dangereuse, quand elle n'a pas plus de force, que celle du Soleil de

Mars, c'est à dire, qu'elle esmeut & ne resoud point:» p.7.

⁹⁾ *Comédies des comédiens et théâtre autoréflexif*, Lille: Atelier National de Reproduction de Thèses, 1989
(Microfiche).

¹⁰⁾ 前掲論文、第3部

悲劇 *Phèdre* の神々

浜野 トキ

目次

始めに

- 1) ラシーヌの作品に於ける神(神) — *Phèdre* の神々と主要人物
- 2) 神々の「擬人化」 personnification⁽¹⁾ とドラマへの積極的な介入—その言語
 - A) ヴェニユスの憎しみと太陽神の凝視—フェードル
 - B) 守護神ネプチューヌ、ヴェニユス、ジュノンの寛容、太陽神の不在—テゼー
 - C) 女神ディアヌとジュノンに見捨てられたイポリットとアリシー
- 3) アモラルな神々の世界
- 4) 何故神々の擬人化か—独自の演劇空間
- 5) 結論

始めに

ラシーヌは悲劇 *Phèdre* が初演された 1677 年 1 月 1 日から 3 カ月後にその「序文」のなかでこう書いている。フェードルは「その宿命によって、神々の怒り (la colère des Dieux) によって道ならぬ恋の情念におちいったのであって、誰よりも彼女自身が、これを忌わしく恐ろしいものと思っている。... 彼女がついに問いつめられてその秘密を明かすとき、それを語る彼女の示す心の激しい動揺は、彼女の罪が、自らの意思のなせる業というよりは、むしろ神々の下した罰であることをはっきり物語っている。」⁽²⁾ ラシーヌはさらに、人間の弱さに触れ、「ごく些細な過失までも厳しく罰せられているし、罪深い思いを抱くことすらも罪そのもと同様に、恐ろしいものと見なされている... 悪徳は常にその醜悪さを悟らせ、憎ませるように描かれている。... これまで私が書いた悲劇のなかでこれほど美德の価値を明らかに示したものはない。」として、悲劇 *Phèdre* は、演劇の楽しみばかりでなく、有益な道徳的教訓

に富むものだと強調している。ラシーヌが「序文」のなかでこのように演劇の道徳的効用に触れたのは今回が初めてである。*Bérénice* の「序文」の中では演劇の「楽しみ」だけをあれほど強調した彼が、何故 *Phèdre* の「序文」で作品の道徳性をこのように強調したのであろうか。

演劇の道徳的効用を説くことはかなり現実的な問題であった。かつてモリエールの *Tartuffe*(1664)や *Dom Juan*(1665)が当時の宗教界や大衆から反道徳的、反宗教的であるとして、如何に大きな反撃を受けたか。したがって、ラシーヌがポール・ロワイヤルの隠士ニコルの書いた「想像の異端」などに反論し、これを契機としてポール・ロワイヤルの恩師たちと1666年に決別したことは、劇作家の社会的役割を主張したものとはいえ、かなり大胆な決断であったはずである。しかし、10年後、彼が悲劇 *Phèdre* を書くときは社会情勢や思想にも大きな変化が見られた。と言うのも、国王ルイ 14 世と言えども、道徳問題に大きな発言力を持つローマ法王以下カトリック宗教界の意向を無視することが出来ず、国家と宗教が一体となって更に専制的な絶対王政が確立されていったからである。

1676年、すでにポール・ロワイヤルとある程度和解が出来ていたラシーヌは、*Phèdre* の第4章を書き上げたとき、最終章の完成を待たずに、反ジャンセニストでイエズス会派の先鋭的な論客であるブール師(Père Bouhours)⁽³⁾に宛てて原稿のコピーとともに書簡を送り「差し当たり4章だけをお目にかけますが、第5章が出来次第お送りします。この作品のフランス語やその他に誤りの箇所があったら指摘して頂きたい。またこの原稿をラパン師(Père Rapin)⁽⁴⁾にもお廻しください見て頂きたい。」⁽⁵⁾と書いて意見を求めた。ラパン師はブール師同様反ジャンセニストでイエズス会派の理論家の重鎮である。ラシーヌとしては、これら強力な宗教界の論客から作品について道徳上の非難が無いようにとあらかじめお墨付が欲しかったのであろう。当時すでに高名な劇作家であったラシーヌが、こうして宗教界の諸権威に作品の意見を求めたことは意外でもあるが、「序文」にもある通りラシーヌとしては *Phèdre* について、宗教界にも倫理的な助言を求め、演劇に好意的なルイ 14 世を始めとする宮廷人、上流社会を喜ばせるばかりでなく、幅広く聖職者、知識人などにも受け入れられる作品を書きたかったのだ。

本稿では「序文」に指摘されている神々の怒り、人間の弱さ、罪、それに神々が下す罰とは何であるか、神々がどのようにして人物の行動に関わっていったか、また演劇の道徳的効用とは如何なるものかについて、テキストに現れてくる異教の神々の足跡を辿りつつ考えて行きたいと思う。

(以下作品名は原綴で、人物名は片仮名に、また、神々の名は最初だけ原綴で、その後はフランス語読みの片仮名とする。なお、詩句の訳は必要に応じて付ける。)

1) ラシーヌの作品に於ける神(神)—Phèdreの神々と主要人物

ラシーヌの作品では、Dieu, Dieux の語が如何に頻繁に人物たちの口から出ることか。だが、神(神)Dieu, Dieux のイメージは極めて曖昧である。ラシーヌは遠いギリシャ神話、ローマ神話、古典悲劇、ローマの史実などから題材を取り、悲劇はそれらを舞台としている。その神(神)は17世紀のフランス社会の通念であるキリスト教の Dieu le Père「父なる神」ではなく、異教の神(神)である。それは人間の力を超えた、不可解な不滅の力であり、ときには la Fortune、le Ciel、le destin とも呼ばれる。これら神々は、恩寵を与えるものではなく、人物に愛されながらも、彼らを裏切り、不幸にし、彼らを罪あるものとして断罪することをためらわない。したがって、神々はしばしば人物たちによって cruel, perfide といった形容詞を付けて呼ばれる。クローデルがラシーヌの作品について言った言葉を借りれば「人間の渦中に介入する不可解で両義性を持ち、疑わし超人的で、超自然の力」⁽⁶⁾である。特に Phèdre のいわゆる「宿命」は「単に人物に内在するものではなく、人物に対して外在する打ち克ち難い力」⁽⁷⁾であり、この不気味な力と人物たちの激しい対立が作品の中軸となっており、この力の存在無くしては作品は成立し得ない。

処女作 *La Thébaïde* ではオイディプスの母であり妻であり、憎しみ合う二人の息子の母でもあるジョカストは、まず太陽神に救いを求め、次いで神々に呼びかけて「知らずに犯した罪」を罰する神々の残酷さに抗議する。しかしここでは神々は神託という形でしか現れない。*Andromaque* ではエルミオーヌやオレストが Amour 愛の神に呼びかけるが、この作品では殆どすべての人物が恋のために滅びてゆく。ローマものでは神はローマを守る女神となって喚起されるがその存在感はきわめてうすい。

しかし、エウリピデスを出典とする *Iphigénie*(1674) で初めて Diane, Neptune, Jupiter の名が出てきて、これら神々がドラマに介入する。純潔と狩猟の女神ディアーンの名において神託が発せられ、イフィジエニーを神の生贄として捧げなければ風が出ず、ギリシャ軍がトロイ戦に向けて出港することができない。海神ネプチューヌの眠りにすべてが懸かっている。そして最後に女神ディアーンは無垢の娘エリフィルを犠牲にすることによって幕を閉じる。ジュピテルの名は一度出てくるが、ドラマには何の介入もしない。アガメムノンが「神々の怒りが、いかなる罪を咎めて、生贄を求めるのか理解できない、これに従うことはできない」として「神々の怒り」の根拠を問いかけている点は注目すべきである。

Phèdre では神々は多彩である。神々の呼称は、これまでの作品より更に明確に個別化される。この作品は、主としてエウリピデス、次いでセネカなどから出典を仰いでいるが、神々

の呼称はもっぱらローマ神であり、ギリシャの神々ではない。それは作者が当時のフランス社会に周知されている親しみやすいローマ神の呼称を取ったためであろうが、その音韻にも関係があるかもしれない。

神々の王であり、天界を支配し、人間社会の秩序を守るべきジュピテル、その妻であり、結婚を司る Junon、愛欲と美の女神である Vénus、海神ネプチューヌ、月の女神で純潔の象徴、狩猟の女神といわれるディアヌ、芸術、知恵、産業の女神 Minerve、太陽神 le Soleil、大地母神 la terre がある。しかしこの作品でドラマに介入するのは、ヴェニユス、ネプチューヌ、太陽神であり、その他の神々は傍観者にすぎない。また、4人の主要人物、テゼー、フェードル、イポリット、アリシーはすべて神々を祖先に持つ demi-dieu 半神である。アテネの王テゼーはジュピテルの後裔であり、イポリットはテゼーとアマゾーンの女王との息子である。フェードルはミノスとパジファエの娘であり、先祖にジュピテル、祖父に太陽神を持つ。アリシーは大地母神の子であるエレクトー王の血を引くが、アテネの王位をめぐって6人の兄弟はテゼーと戦い、敗れて皆殺しにされ、彼女ひとりが戦禍を免れて、とらわれの身として生きている。

2) 神々の擬人化とドラマへの積極的な介入—その言語

このように、神々を祖先に持つ人物たちではあるが、神々は決して舞台に現れず、すべて人物の言葉を通じて喚起され、観衆の目には見えない「透明な存在」である。20世紀の批評家のあいだでは、*Phèdre* における神々と人間との関係についての見方は様々である。ピカールは異国の神々が宗教として信じられていない17世紀のフランス社会では、神々は人間の情念の比喩的象徴に過ぎないとして、神々の人物への関与を否定している。「悲劇 *Phèdre* は自由のドラマである。フェードルの地獄的な歩みは全く心理的な理由によって説明されるもので、超自然なものは何もない。…フェードルは自分は天の復讐の犠牲者だと信じているが、彼女は自由の要求は無限にあることを知っている。」⁽⁸⁾ フマロリの見解もピカールのそれに近く、*Phèdre* の神々は「事件の方向を変える力も、人物の心に影響を与える力もない。恋、嫉妬、怒り、傲慢さと自尊心が人物を行動させ、苦しませるに充分である。」⁽⁹⁾ と主張し、異教徒の神々はキリスト教の神ほどの力は無いとしている。これに対してシエレールは神々のドラマへの介入を次のように強調する。「*Phèdre* はラシーヌの悲劇の中で、神々が明確に、個別に呼称され、重要な役割を果たす最初で最後の悲劇である。その行動は、人物たちの意思から生ずる行為と同様有効である。実際のところ、神々が人物になったのである。彼らは、ドラマの面で、さらに悲劇の面で、人間同様に存在する。神々の演劇化(théâtralisation)を完全

に実現させたのはこの悲劇のなみなみならぬ独創性のひとつである。」⁽¹⁰⁾また、バトラーの見方もシエレールのそれに近く、「ラシーヌの神々は端役でもなく、象徴でもなく、実在する支配力である。」⁽¹¹⁾と主張する。またヴィアラは「*Phèdre* では神々は行動する。」⁽¹²⁾と述べている。

このように、神々を人間の情念の比喩的象徴と見て、*Phèdre* は全く心理的なドラマだとするピカールなどの説と、神々を擬人化してドラマに具体的に介入するものと見るシエレールなどの説とで解釈は対立する。しかし、二つの対立する解釈を、言葉の魔力によって、表裏一体として内包しているのが悲劇 *Phèdre* なのである。事実 *Phèdre* は巧妙な両義的な表現に満ちている。人物は彼らの心理的必然性に従って行動しているかのように表現され、だからこそ弱さから犯した罪にたいして神々がこれを罰したというのが「序文」の趣旨と解釈される。しかし、同時にラシーヌが「序文」のなかで、「神々の怒りによって、フェードルが道ならぬ情念に陥った。」と述べているように、神々のドラマへの介入は作者の意図でもあった、と見るべきではないだろうか。事実人物の言語の本義を辿って行けば、神々は単に情念の比喩的象徴だけではなく、ドラマに介入するその行動が明確に読み取れるような仕組みになっている。触覚的に、視覚的に、聴覚的に、人物の口から神々の存在が確認され、それが抗い難い力となって人物を支配している。したがって、本稿では後者の説、神々の擬人化説に従ってその軌跡をたどって見たいと思う。以下必要に応じて神々の行動を暗示する文例を挙げてゆくが、特に下線の部分に注目して頂きたい。

A) ヴェニユスの憎しみと太陽神の凝視—フェードル

ヴェニユスの名はフェードルが舞台に現れる前にすでに愛欲の女神としてテラメーヌの口から出る。「ヴェニユスの神はどんな心をも屈伏させずにはおきません」と。しかし純潔を尊ぶイポリットはヴェニユスを愛欲の女神として蔑んでいた。

しかし、重要な点は、ヴェニユスがフェードルの行動に闖入して、義子イポリットを恋させることである。それはフェードルの口から「ヴェニユスに追い詰められた一族の避けがたい攻め苦」として語られる。何故ヴェニユスはフェードルを憎み、イポリットへの恋を唆したのか。セネカによれば、⁽¹³⁾ヴェニユスは軍神マルスとの道ならぬ恋にふけたが、それをフェードルの祖先である太陽神が見て、火の神 *Vulcain* に告げた。それをヴェニユスが怒り、太陽神の子孫であるパジファエトとフェードルを追いかけて復讐しようとする。しかし、ラシーヌはヴェニユスの不倫には直接触れず、ヴェニユスの呪いを動機づけの無いものとし、

単に太陽神の子孫であるがためにパジファエとフェードルに付きまとい、不幸に陥れようとする。

O haine de Vénus! O fatale colère!(v.249)

Puisque Vénus le veut, de ce sang déplorable(v.257-8)

Je péris la dernière et la plus misérable.

ヴェニユスの意思に従って、わたしは死ぬのだ、哀れな一族の最後の、
しかももっともみじめな女として。

Je reconnus Vénus et ses feux redoutables,(v.277-8)

D'un sang qu'elle poursuit tourments inévitables.

まぎれもない、ヴェニユスと、その恐るべき恋のほむら。
女神に追いつめられる一族の、避けがたい責め苦。

こうして、ヴェニユスにそそのかされ、「道ならぬ恋」に苦しむ弱いフェードルをじっと凝視し、フェードルを後悔の念で苦しめるのが祖父の太陽神である。太陽神は一見ドラマに介入しないように見えるが、天にいて、宇宙の目として、すべてを観察し、何者も、何事も太陽神の目から逃れることは出来ない。太陽神はヴェニユスにそそのかされたフェードルの恋を見ても、孫娘の不幸に救いの手を差し延べることはせず、ただ凝視して、名誉を忘れて生きることを許さず、激しい自責の念を起こさるのみである。この神は、ヴェニユスと同様に、フェードルを苦しめるためにのみ存在するかのようだ。ヴェニユスはフェードルに恋をそそのかし、太陽神がそれを責める。そしてフェードルはこの相反する二神のそれぞれの追求によって引き裂かれる。それでもフェードルは絶えず彼女が愛し尊敬する太陽神に呼びかける。

Noble et brillant auteur d'une triste famille,(v.169-172)

Toi, dont ma mère osait se vanter d'être fille,

Qui peut-être rougis du trouble où tu me vois.

Soleil, je te viens pour la dernière fois.

惨めな一族の、気高く輝かしい創り主よ、

あなたの娘と生まれたことを、私の母は誇りにしていましたが、
今あなたは、取り乱した私の姿を見て、恥じて顔を赤められるでしょう。
太陽神よ、私は最後のお別れにまいったのでございます。

罪深い自分に、太陽神も恥じて顔を赤らめるだろうと、フェードルは自らを苛む。恋から逃れるために女神ヴェニユスのために神殿を建てるが、祈って崇めているのはヴェニユスではなく、イポリットの名前。彼を追放してほっとしたのも束の間、夫とともにトレゼーヌに来て再びイポリットに会う。

Ce n'est plus une ardeur dans mes veines cachée:(v.305-6)

C'est Vénus tout entière à sa proie attachée. ⁽¹⁴⁾

今ほもう五体の血にひそむ情火などではない。
ヴェニユスが全身でこの餌食に襲いかかったのだ。

これは単なる比喩を超えて、触覚的に、なまなましくフェードルの身体に全身で襲いかかるヴェニユスである。餌食となったフェードルを捕らえて離さない血なまぐさい女神の肌触り。どうしてフェードルはヴェニユスに打ち勝つことが出来ようか。

フェードルはこれは一族の宿命的な情火であり、か弱い人間を誘惑することに残忍な栄光を見いだす神々だとして、この魔物を取り除いてくれと叫ぶ。

彼女はヴェニユスが彼女を苦しめる敵であることを知っている。しかし、恋に盲目的になった彼女はそれに勝てぬとさとり、女神にたいし共にイポリットに復讐するように祈る。彼が恋をするようにと。

Déesse, venge-toi: nos causes sont pareilles.(v.822-3)

Qu'il aime...

しかし、彼女が祈るのは「Qu'il aime.」 「彼が恋をするように」であって、「Qu'il m'aime」 「彼がわたしを愛するように」ではない。ヴェニユスは最も残酷なやりかたでこれに答え、イポリットにアリシーを愛させるようにする。ちょうどネプチューヌが最も残酷なやりかたでテゼーの祈りに応えたように。しかもフェードルが、アリシーへのイポリットの愛を知ったのは、彼女がイポリットの罪を晴らそうと、夫テゼーのところに駆けつけたとき、夫の口から

なにげなく聞かされたのだ。それは衝撃でしかない。フェードルは今や情念と後悔以上に嫉妬に悩ませられる。すべてを見抜く太陽神は、イポリットとアリシーの愛が、フェードルの邪な情念に較べてどのように純粋なものであるかを彼女に識別させて、その苦しみを一層深くする。あのふたりの恋の清らかさは天もご承認され、ふたりは何の後悔もなく恋路をたどっているはず、来る日も来る日も、ふたりにとっては澄み渡った穏やかな日ばかり、それにひきかえこのわたしは..ああ、何処に隠れようか。

Le ciel de leurs soupirs approuvait l'innocence; (v.1238-1242)

Ils suivaient sans remords leur penchant amoureux;

Tous les jours se levaient clairs et sereins pour eux.

Et moi, triste rebut de la nature entière,

je me cachais au jour, je fuyais la lumière...

イポリットとアリシーの愛に較べてなんと恥ずかしい、罪深いこの自分。

Misérable! et je vis? et je soutiens la vue(v.1273-1278)

De ce sacré soleil dont je suis descendue?

J'ai pour aïeul le père et la maître des Dieux;

Le ciel, tout l'univers est plein de mes aïeux.

Où me cacher? Fuyons dans la nuit infernale.

Mais que dis-je? mon père y tient l'urne fatale;

....

Minos juge aux enfers tous les pâles humains.(v.1280)

...

Lorsqu'il verra sa fille à ses yeux présentée,(v.1282)

.....

Je crois voir de ta main tomber l'urne terrible;(v.1286)

こうして聖なる太陽神の子孫であるこのわたしはその凝視のもとに震えている。何処へ逃げようか。天も全宇宙も、わたしの先祖で満ちている。わたしは祖先に太陽神を持つがために天国に逃れることはできない。それでは地獄へ? でもそこにも亡者を裁く父ミノスが裁きの壺を持っている。その父さえ恥ずかしい娘を見て驚きのあまりその壺を落とすだろう、と、フェードルは残酷な神に滅ぼされようとしている自分を見つめる。

ヴェニユスはフェードルにとって愛欲の女神だけではなく、死の神でもある。そして、ヴェニユスの手先となってフェードルに罪ありとするすべての行為を実行した者はまさに乳母エノンヌであった。

Le ciel mit dans mon sein une flamme funeste;(v:1625-6)

La détestable Oenone a conduit tout le reste.

神がわたしの胸に、呪わしい恋の炎を燃え上がらせました。

あとのすべては、あの呪わしいエノンヌが仕組んだのです。

B) 守護神ネプチューヌ、ヴェニユス、ジュノンの寛容、太陽神の不在—テゼー

アテネの王テゼーは半年の留守の後トレゼーヌに帰ってきた。そして、息子イポリットに罪ありとするエノーヌの讒言を軽率にもうのみにし、それに怒り、息子を責める。そして、フェードルの愛の告白に口を噤むイポリットを罰するようにと海神ネプチューヌに祈願する。太陽神の子孫でないテゼーにたいしてヴェニユスは何の干渉も復讐もしない。むしろ愛欲の実行者として歓迎したのかも知れない。またフェードルに言わせれば、「あまたの美女に愛を捧げるテゼー」(volage adorateur de mille objets divers(v.636)) にたいして、結婚の女神であるジュノンも何の罰も与えず、すべてを許しているようだ。テゼーの行動に対す海神ネプチューヌの介入は大きい。この神はすでに前作 *Iphigénie* に出てきたが、*Phèdre* では、それよりもはるかに重要な役割を果たす。海神ネプチューヌの波浪高い海の動きとテゼーの疑惑、怒り、復讐といった起伏、振幅の大きな感情との間に共通点が見られる。この海神はテゼーの友であり、守護神でもある。かつてテゼーがネプチューヌの岸辺から悪名高い殺戮者を掃討して助けてやったので、テゼーはネプチューヌに対して功労があり、いつかはテゼーの願い事を聞いてやることを約束した。テゼーは軽率にもエノンヌの讒言を聞き入れて怒り、その復讐として、すぐにネプチューヌにイポリットへの罰を懇願する。

Et toi, Neptune, et toi, si jadis mon courage(v.1065-68)

D'infâmes assassins nettoya ton rivage,

Souviens-toi que pour prix de mes efforts heureux,

Tu promis d'exaucer le premier de mes voeux.

おお、わが神ネプチューヌよ、かつてわたしの武勇は

あなたの岸辺から、悪名高い殺戮者どもを掃討しましたが
どうか思い出してください。あのとき首尾よく終わった仕事の報いとして
あなたはわたしの第一の願いを聞き届けると約束したもうたのです。

そして、テゼーは、独自の中でこの海神が自分に約束したのだから、その罰から逃れられないとイポリットに強調する。

Neptune, par le fleuve aux Dieux mêmes terrible, (v.1158-60)

M'a donné la parole, et va l'exécuter.

Un dieu vengeur te suit, tu ne peux l'éviter.

ネプチューヌは、神々さえも恐れる川にかけて
わしに約束した、そして今、それを実行しようとしている。
復讐の神がお前を迫っているぞ、逃れることはできないのだ。

神々は情念の比喩的象徴に過ぎないと主張したピカールだがテゼーとネプチューヌの関係について次のように述べている。「ラシーヌの劇で、神が人間に奉仕し、味方として現れるのは初めてである。... 実際はテゼーを痛めつける為なのである。ネプチューヌの友情はその憎しみと同様に効果的である。それでテゼーは彼自身の不幸を招いたことに恐怖感を持つだろう。」⁽¹⁵⁾このように、ネプチューヌがドラマに介入する事になるが、それはテゼーの祈りをそのまま受け取った結果、イポリットにたいする「怒り」なのか、テゼーにたいするネプチューヌの憎しみなのか。テゼーの前で繰り広げられるイポリットの惨死の様子はテラメーヌによって約百行にわたる長い台詞で語られるが、その一語一語は死の咎となってテゼーの心に打ち込まれたはずである。ここではテラメーヌの語りから 2 点、すなわち、テラメーヌが実際に見た怪獣と、間接話法 *on dit que...* で伝えられるネプチューヌの出現について述べることにする。

トレゼーヌの城門を出てミケナイへの道をイポリットはもの思いにふけりながら戦車に乗り馬の手綱を牽いて海に沿って進む。その時突然恐ろしい叫びが波の底から響き、怒り狂った怪獣(monstre) が踊りだした。

L'onde approche, se brise, et vomit à nos yeux, (v.1515-6)

Parmi des flots d'écume, un monstre furieux.

大波は近づき、砕け、われらの眼前に、
渦巻く泡もろともに、怒り狂った怪獣を吐き出した。

この怪獣には恐ろしい角が生え、全身黄ばんだ鱗に覆われ、下半身はうねりにうねって、のたうつ大蛇のようだ。天でさえこの凶暴な怪獣をおそれ、地はおののき、大気は毒される。

Le ciel avec horreur voit ce mostre sauvage;(v.1522-3)

La terre s'en émeut, l'air en est infecté;

テラメーヌは実際この怪獣を見ており、これは *Phèdre* に出てくる唯一の実在する悪の神である。イポリットは雄々しくも怪物に立ち向かい、怪獣の横腹に深い痛手を負わせた。だが日頃イポリットに従順な馬も怯えきって彼の叱咤の声も聞かず猛り狂う。ネプチューヌの送ったこの怪獣のためにイポリットは形無きまでに傷つき敢え無く最後を迎えるが、この時約束を果たしたとばかりに、ネプチューヌが現れる。

On dit qu'on a vu même, en ce désordre affreux,(v.1539-41)⁽¹⁶⁾

Un dieu qui d'aiguillons pressoit leur flanc poudreux,

A travers des rochers la peur les précipite;

この恐ろしい混乱のただなかに

砂塵にまみれた馬の腹を突きに突いて駆り立てる神の姿が見えたとか。

恐怖のあまり見境もなくなった馬は、岩を飛び越えて突っ走る。

このネプチューヌの出現は、「本当らしさ」の原則を守るために«On dit que...»という間接話法でしか語られないが、この混乱のさなかでそれほどまでしてネプチューヌはテゼーへの約束を果たしたことを誇示したかったのだろうか。いや、ラシーヌはそれほどまでしてネプチューヌの出現を示したかったのだろうか。しかし、すでにネプチューヌへの祈りを後悔し始めていたテゼーはネプチューヌのあまりに早い約束の実行を責め、自分の軽率さに初めて深い後悔の念に苛まれる。テゼーのネプチューヌへの恨みの深さ、おのれの行為への痛恨の深さ! そして、ついに吐き出した神々へのこの糾弾!

Inexorable Dieux! qui m'avez trop servi!(v.1572-3)

A quels mortels regrets ma vie est réservée!

仮借なき神々よ、わたしにつくしてくれすぎた!

この後、どれほど悔恨にうちひしがれて生きることか。

「神々の恩寵などは命取りに過ぎない。神々が何をしてくたとしても、その不吉な恩恵は彼らがわたしから取り上げた息子を取り戻してはくれないだろう。」と。

Je hais jusques aux soins dont m'honorent les Dieux;(v.1612-1616)

Et je m'en vais pleurer leurs faveurs meurtrières

Sans plus les fatiguer d'inutiles prières.

Quoi qu'ils fissent pour moi, leur funeste bonté

Ne me saurait payer de ce qu'ils m'ont ôté.

この身が神々の加護を受けていることまでもいとわしくなる。

これから先は、神々の命取りの恩寵を嘆くばかりだ。

もう決して、役にも立たない祈りで、神々をわずらわすまい。

神々がわしのために何をしてくださったとて、この不吉な恩恵は
わしから奪ったものをあがなうことはできないだろう。

テゼーのこの激しい神々への糾弾は、20 世紀の批評家を刺激する。ビュトールはネプチューヌの行為とテゼーの神々へ憎悪について次のように見ている。「神々の存在と力がかくまで強く発揮されたことはなかったし、人物の神々にたいする憎しみがかくまで完全に表現されたこともなかった。」⁽¹⁷⁾

C) 女神ディアースとジュノンに見捨てられたイポリットとアリシー

イポリットの守護神は純潔と狩猟の女神ディアースと結婚の女神ジュノンである。彼はアリシーを愛し、結婚を考える以上、ディアースだけでなく、結婚の女神ジュノンも必要であった。父テゼーから国外追放の命を受けた後、イポリットはアリシーと会う。そして、フェードルの罪は遅かれ早かれ裁きを受けるだろうから、自分の身の潔白を証明するのは神々の手に委ねよう、と言う。そしてふたりの結婚の場所は「トレゼーヌの城門にほど近い墓所のなかにあり、先祖の王たちの古い墳墓に囲まれて、偽りの誓いを寄せつけない、尊い神殿があるところ。あそこで永遠の愛を誓う宣誓の式をあげましょう。」とアリシーに言う。

Des dieux les plus sacrés j'attesterai le nom.(v.1403-5)

Et la chaste Diane, et l'auguste Junon.

Et tous les Dieux enfin, témoins de mes tendresses.

わたしはこの上なく尊い神々の御名にかけて誓うつもりです。
けがれなきデアーナの女神も、威厳にみちたジュノンの女神も。
その他あらゆる神々が、わたしの愛の証人として、

イポリットはこのように尊敬する守護神デアーナとジュノンの名を口にしますが、それはただの一度だけである。しかし彼の考えと行いはつねにこれら女神の心に叶ったものであり、彼らの救いを信じきっているし、アリシーも勿論結婚を望んでいるのでイポリットと同じ考えである。この寺院で二人は結婚式を挙げて、デアーナもジュノンもその他の神々も愛の証人として立会い、末永く二人を見守ってくれるものと信じていた。デアーナとジュノンはこのように若者二人から敬愛され、彼らを護ってくれるはずであった。しかし、イポリットが怪獣に襲われたとき、二女神は救いには現れず、無関心という冷酷な態度を採った。それに馬は狩猟の道具であり、イポリットは狩猟の女神でもあるデアーナを尊敬していたのに、怪獣が現れ、馬が暴れ出したとき、何故デアーナが彼を救ってくれなかったのか。デアーナもジュノンも、若いふたりを見捨てたのである。シェレルは言う。「ここは海岸である。若い二人は海の恐ろしい怪獣に出会うような行程を採らずに、悲劇的でない解決策を採ることも出来たはずである。テゼーのネプチューヌへの祈願を知っていたイポリットは海からくる危険を知っていたので、すぐ結婚しないで、遠く内陸に逃げることも出来たはずである。しかし、かつて *Bérénice* で、ティチヌスが国を捨ててベレニスと地の果てまで落ちのびることが出来なかったように、この見通しは悲劇の約束ごとのうえでは受入れられなかった。」⁽¹⁸⁾イポリットの死は、清純で無垢な若者が不法にも悪意のある運命によって迫害されたというイメージを与えるが、ラシーヌがこのように残酷に人物を葬ったのは初めてではなかったろうか。エウリピデスの *Hippolyte* では、イポリットが死ぬとき女神 *Artémis*(ギリシャ女神、ローマ女神デアーナのこと) が現れて、慰めてくれる。「不憫な者よ、お前はなんと残酷な運命の犠牲者となったことだろう。思えばあまりに気高いお前の心が、お前を滅ぼすことになったのだ。」と。⁽¹⁹⁾しかし、ラシーヌのイポリットにはデアーナもジュノンも慰めに来てはくれなかった。

3) アモラルな神々の世界

このように、異教の神々は *Iphigénie* 以降ドラマに介入するが、*Phèdre* では執拗に、しかも脅迫的に存在し、人物の生命を脅かす。バトラーが言うように「ラシーヌは二面性のあるギリシャの神々から、救済よりも殺人、創造力よりも破壊力といったネガチフな面しか取らなかった。」⁽²⁰⁾ *Phèdre* の神々にはひとかけらの恩寵も無い。神々は人間同様結婚もするが、人間同様不倫もする。エノンヌがフェードルにいうこの慰めの言葉。

Les Dieux même, les Dieux, de l'Olympe habitants(v.1304-6)

Qui d'un bruit si terrible épouvantent les crimes,

Ont brûlé quelquefois des feux illégitimes.

神々でさえ、

あの恐ろしい雷鳴で人間の罪を威すオリュンポスの神々でさえ

ときをりは道ならぬ恋に胸を焦がしたではありませんか。

不倫をする神はヴェニウスだけではない。天界の王ジュピテルも、曙の神 *Aurore* も同様である。⁽²¹⁾

神々は一見人間の情念の象徴のように見えるが、実際はそれ以上であるばかりでなく、その撞着、冷酷、悪意などで人物に不幸をもたらす。彼らはそれぞれ情念、監視、復讐、純潔、結婚などの価値観を代表し、矛盾する命令を一方向的に発信するが、神々同志の連携はない。ヴェニウスはフェードルに情念に走るようにそそのかし、太陽神はその厳しい凝視によって、フェードルが名誉を忘れていきることを許さない。ヴェニウスはネプチューヌ同様殺人者である。神々には後悔の念は無い。*Phèdre* では神々は怪物の様相をおびている。

こうした状況のなかで人物に自由はあるのか。彼らは神々を愛し、その意思に従い、苦しいときは助けを求め、ときには神々を責める、といった束の間の自由はあるが、それ以上の自由はない。聡明なアリシーはテゼーにたいして極めてシニカルな警告をしている。「決して神々の残酷さを忘れないでください、情け容赦の無い神々は、あなたを憎み、怒りに駆られて、生贄をお受けになることもあります。天のくださる賜物といえ、人間の罪に対する罰だけのことが多いのです。」と。

Craignez, Siegneur, craignez que le ciel rigoureux (v.1435-8)

Ne vous haïsse assez pour exaucer vos vœux.

Souvent dans sa colère, il reçoit nos victimes;

Ses présents sont souvent la peine de nos crimes.

バトラーの批評はさらに手厳しいが正当である。「*Phèdre* の神は犠牲者に義務を尊重させておいて、その義務の違反を彼らに強いる。あらゆる道徳に無縁でありながら、道徳の守護神として振る舞う。神は致命的な畏、秩序を銜う混沌、尊敬と敬愛を強要する恐るべき混沌に過ぎない。」⁽²²⁾ 神々の世界はアモラルである。

4) 何故神々の擬人化か—独自の演劇空間

これまで、神々の擬人化、ドラマへの介入を中心に見てきたが、それは神々についての言語の問題と切り離しては考えられない。神々の呼称はわれわれの想像を刺激し、遠い世界へと詩的な幻想を導くことは注目すべきである。*Phèdre* が演じられる舞台が「天井のある宮殿」という極めて限られた空間であるだけに、人物を通じて神々とその所在が喚起されるとき、無限の宇宙、その轟きを感じさせるし、時には広い海の世界、暗い地獄の世界をイメージさせる極めて詩的なものである。神話は詩に貢献する。アリシーの祖先である大地母神は限りなく広く、すべてを吸い込む果てしない大地を彷彿させる。あのクローデルが「これこそ演劇人の詩である」⁽²³⁾と激賞したこの一句。

... la terre humectée (v,425-6)

But à regret le sang des neveux d'Erechthée.

しめった大地は

いやいやながら、エレクテーの子孫の血を吸った。

アリシーの兄弟がテゼーとの戦で皆殺しになったとき、大地母神が子孫である若者の血を恨みをこめて吸い込まなければならなかった無言の悲しみ。

しかし、*Phèdre* の言語で最も特徴的なのは、神々を擬人化し、あたかも人物の背後に神々が存在し、彼らを操っているような感覚を与えることである。舞台の上で観客に見えないだけに、一層想像力を駆り立て、不気味なイメージを作り出す。もちろんラシーヌはこの言葉にあらゆる *figures* を駆使して、両義的な文体として、「本当らしさ」に注意を払っている。しかし、その言語の本義を見てゆけば、神々を名指しして、その行動を具体的に解釈できる表現を用いている箇所が多いことは以上の諸例を見ても明らかである。だが、何故ラシーヌ

がこうしたテクニックを用いたのであろうか。第一に、*Phèdre* の出典となったエウリピデスの *Hippolyte* の舞台に、女神 Aphrodite(ローマ女神のヴェニユス) と Artémis(ローマ女神のディアナ) が登場することである。これは遠いギリシャの話ではあるが、17 世紀中期前後のフランスでもこのように芝居の舞台に神々が登場することは稀ではなかった。例えば、コルネイユの音楽悲劇 *Andromède*(1650) がブルボン王立劇場で上演されたとき⁽²⁴⁾、大がかりな機械仕掛けの装置でジュピテル、ジュノン、ヴェニユス、ネプチューヌなどの神々が次々と登場し、この芝居は大成功であった。しかし、ナイトなどが指摘しているように⁽²⁵⁾、ラシーヌがとりわけ意識したのは、当時一般に大いに人気のあったリュリー、キノーのオペラではなかったろうか。ペローは、エウリピデスを出典とするリュルリー、キノーのオペラ *Alceste*(1674) の「擁護論」を書いたが⁽²⁶⁾、ラシーヌはペローの態度を悲劇にたいする挑戦と考えたのか、それに憤激して、*Iphigénie* の「序文」(1675)のなかでペローの用いたラテン語訳の誤りを辛辣に批判している。さらに、同年、熱狂的な成功を取めたリュリー、キノー作のオペラ *Atys* では多くの神々が舞台に登場し、なかでも女神 Cybèle が祭司アチスを愛し、結果的に彼を自殺に追いやるという結果になっていて、「オペラは悲劇と拮抗しうるものとなった」⁽²⁷⁾とさえ言われた。このように、熱狂的なオペラへの人気を前にして、ラシーヌは自らの悲劇に強い危機感を抱いたと思うのは不自然であらうか。とはいえ、ラシーヌとしては、悲劇独自の「本当らしさ」と「節度」の原則を無視することは出来ないし、まして機械仕掛けの装置によって神々を舞台に登場させることはできない。そこで、言語の演劇である悲劇の許容するぎりぎり範囲で、人物の言葉を通じて神々をリアルに外在させ、実際に舞台に登場しているかのような幻想を与えようとしたのではないだろうか。しかし、ラシーヌの真の意図はそれではない。異教の神々の影に、悲劇独特の「宿命」の存在を色濃く生かし、超人間の意思と存在の重みを徹底的に強化し、そこに独自の詩的、演劇的空間を構築しようとしたのではなかったろうか。神々が残酷であればあるほど、悲劇性は深化し、人物は運命に打ちのめされ、その言語は激化する。*Iphigénie* 以来試みられた神々のドラマへの介入という大胆な方法は *Phèdre* に至って頂点に達した。そして、ラシーヌ自身、それにあらゆる情念を注ぎ込み、燃焼させて、その演劇空間を極限にまで押し進めて行ったのではなかったか。神々の締めつけが強くなるほど、人物は神々と衝突し、彼らの悲鳴にも似た祈りと訴えと抵抗と糾弾が増幅する。これほどアリストテレスの主張する「恐怖」と「憐憫」の原則にかなう作品があらうか。神々と人物との対立は徹底化し、これ以上押し進めれば、悲劇的美学の均衡が破壊されるまでに極限に達した。これが悲劇 *Phèdre* ではなかったろうか。

5) 結論

このように、悲劇 *Phèdre* の神々の足跡を辿って行けば、「序文」のなかに強調されている「人間の罪」、「神々の怒り」とその「罰」も正当な根拠が無いように思われる。人物はいわば神々の弱い犠牲者であり、その弱さゆえに断罪されというこの作品の道徳的な教訓は果して有効であったろうか。

1677年1月1日、*Phèdre* はブルゴーニュ座で初演された。当初はブラドンとの競作問題などがあり、批評はかんばしいものではなかったが、3カ月後、その出版にあたり、ラシーヌが「序文」を書いた時点で、彼の作品の優位に大体評価が決まっていた。一般大衆は、*Phèdre* を遠い異教の国の出来事として捉えていたようである。多くの批評は、詩句の美しさに驚嘆し、また、その残酷な内容も、神話の出来事として捉えられ、それが却って自国の良き国王、良き宗教、良き道徳の引き立て役を果たしたので、その点道徳的な効果があったとも言えよう。また、恋する者の嘆きへの共感、若いイポリットとアリシーにたいする迫害への同情などが多い。特にテラメヌの長い語りには涙する者もいた。宗教界から目立った批判も受けることもなかった。⁽²⁸⁾

神々の役割についても注目すべき批評はほとんどなかったが、同年4月に書かれたシュブリニーの批評をここに挙げてみよう。彼は、エウリピデスやセネカの時代と17世紀フランスの時代の見解の相違に触れ次のようにのべている。「エウリピデスやセネカのフェードルで許されることも、ラシーヌやブラドンのフェードルでは非難されること、それはフェードルがわれにもあらず、破滅の淵に追いやられるということである。古代人の宗教の原則に従へば彼女は天によって罪を犯させられる。彼女の心を虐げるのは神であり、それは彼女を恋の炎で燃え上がらせる絶対的な力である。彼女は自分を支配する衝動に抵抗する力も自由もないと信ずることが掟となっている。... この恋は古代人にとっては、われわれにとってほど恐ろしいものではなかったし、われわれとしては、ヴェニユスの怒りについて語られていることは殆ど理解できない。われわれは常に自由であり、罪を犯すことは恥ずべきことだと知っている。... 観客にとって近親相姦は恐ろしい。ブラドンはそれを避けている、何故なら彼のフェードルは結婚していないから。」⁽²⁹⁾このようにシュブリニーは、フェードルを古代人の神話の人物として捉えていて、17世紀の人間の自由意思を強調している。しかし、これはラシーヌの作品の主題を批判しているとも考えられる。

しかし、いまこの作品を読めば、ルイ14世とローマ法王の道徳観がすべてに浸透していた一枚岩の強力な体制下にもかかわらず、楽観論を許さない、明らかに反体制的な色彩の濃い作品となっている。アラン・ヴィアラは、その時代は宗教的保守主義への移行の始まりであ

った、として次のように述べている。「今日 *Phèdre* を読めば、この作品は、最も鋭敏な精神の持ち主が当時がいま見た専制的な絶対王政下の危機と恐怖にたいする警鐘のように聞こえる。」⁽³⁰⁾ またアダンは残酷な神々に触れ、17世紀と20世紀の *Phèdre* にたいする解釈の相違について述べている。「そこには、確かに反時代的な世界観があり、おそらくパスカルだけがそれを理解できたであろう。と言うのも、(17世紀の) 悲劇の観客は、神の摂理、理性と正義の神を信じていたからだ。それは彼らのイメージで作りに上げられた神、彼らの美德を正しく評価してくれる神である。ラシーヌが *Phèdre* を書いたとき、彼自身このような神を信じているとの幻想を抱いたとしてもそれはありえない事ではない。しかし、彼の悲劇の背後に現われるのはいまひとつの別の顔である。だからこそ、今日、この傑作の真の意義がわれわれにより一層明らかになってくるのである—われわれが彼の世紀の楽観主義からはるかに遠く、悪の存在とその実態をより強く意識する今日において。」⁽³¹⁾ アダンの述べているように、*Phèdre* には二つの顔がある。ひとつは、17世紀の体制に順応しようとする顔であり、道徳的効用を述べたてている「序文」はそれを強調している。それはラシーヌの建前の顔である。しかし、その背後に見えるいまひとつの顔は恐ろしく不条理な世界の実態を目の前に突きつけているものであり、それが現代人に訴えるのである。*Phèdre* は17世紀の絶対王政を支持する一面を持つ反面、それを裏切る面も持っている。言い換えれば、作品が作者を裏切ったのである。アモラルな神々を駆使して独自の詩的、演劇的空間を構築しようとした劇作家ラシーヌのなかにあるデモンと作品の道徳的効果を強調するラシーヌのデモンとの妥協をはかることは難しい。

(注)

1) 「神々の擬人化」はシェレールが *Phèdre* と *Iphigénie* を比較して述べた次の文章からヒントを得た。「Toutefois la tragédie d'*Iphigénie* n'assume pas encore totalement la personnification des divinités.» *Racine et/ou la Cérémonie*: Jacques Scherer:p.136:PUF:1982.

2) *Phèdre* の序文と詩句の訳はちくま書房「ラシーヌ戯曲全集」中の二宮フサ氏の訳と岩波文庫「フェードル アンドロマック」の渡辺守章氏の訳から拝借または参考にさせていただきました。

3) Alain Viala: *Racine: la Stratégie du Caméléon*: p.182: Seghers: 1990. Bouhours は 1675 に *Remarques nouvelles sur la langue française* を出版.

4) Rapin: *Réflexions sur la Poétique d'Aristote*: 1674.

5) 手紙の内容 Raymond Picard: *Oeuvres complètes de Racine*: tome 11: p.462: Pléiade: 1966.

- 6) Paul Claudel: *Oeuvres en Prose*: p.466: Pléiade: 1925.
- 7) 渡辺守章: 「古典主義とその対部」 p.219 フランス文学講座「演劇」大修館
- 8) Raymond Picard: *Oeuvres complètes de Racine*; tome 1: p.741: Pléiade: 1950.
- 9) Marc Fumaroli: «Entre Athènes et Cnossos: les Dieux païens dans Phèdre» p. 184: *Revue d'Histoire Littéraire de la France*: numero mars-avril: 1993.
- 10) Jacques Scherer: *Racine et/ou la Cérémonie*: p.137.
- 11) Philip Butler: *Classicisme et Baroque dans l'Oeuvre de Racine*: p.261: Nizet: 1959
- 12) Alain Viala: *Racine: la Stratégie du Caméléon*: p. 177.
- 13) Paul Mesnard: *Les Grands Ecrivains de la France*: tome 3: p.324: note 1
- 14) エウリピデスの *Hippolyte* では nourrice に言わせて、「car, Cypris est irrésistible ,lors qu'elle se déchaîne toute.»: Garnier: p.185 となっている。また Knight はこれを補足して次のように述べている。「Ici Horace et Ovide aident Racine à traduire un adjectif proprement intraduisible d'Euripide.» R.C.Knight: *Racine et la Grèce*: p.361: Nizet: 1974.
- 15) Raymond Picard: *Oeuvres complètes de Racine*: tome 1: p.1152: notes.
- 16) この間接話法はすでに *Iphigénie* に見られる。

« Le soldat étonné dit que dans une nue(1585-9)
Jusque sur le bûcher Diane est descendue,
Et croit que s'élevant au travers de ses feux,
Elle portait au ciel notre encens et nos vœux.»
- 17) Michel Butor: *Répertoire I*: P.54: Les Editions de Minuit: 1960
- 18) Jacques Scherer: *Racine et/ou la Cérémonie*: p. 143.
- 19) *Hippolyte*: Euripide: Théâtre complet 1V:: p.212: Garnier Flammarion: 1966.
- 20) Philip Butler: *Classicisme et Baroque dans l'Oeuvre de Racine*: p.263.
- 21) Paul Mesnard: *Les Grands Ecrivains de la France*: tome 3: p.378: note 3.
- 22) Philip Butler: *Classicisme et Baroque dans l'Oeuvre de Racine*: p.264.
- 23) Paul Claudel: *Oeuvres en Prose*: p.458:
- 24) S.W. Deierkauf-Holsboer: *L'Histoire de la Mise en Scène dans le Théâtre français à Paris de 1600 à 1673*: p.151. Nizet: 1960
- 25) R,C,Knight: *Racine et la Grèce*: p.364.
- 26) *Critique de l'opéra ou Examen de la tragédie lyrique intitulée Alceste ou le triomphe d'Alcide*
- 27) 「エイコス」 1V: p.91.

28) *1677年7月11日、Sceaux城で、初めて国王の前で Phèdre が上演されたが、国王から褒め言葉があった。これによって作品は国王をはじめ宮廷人の心をつかみ、その成功が揺るぎ無いものとなった。Alain Viala:*Racine:la Stratégie du Caméléon*:p.195.

* ラシーヌは 1677年3月 *Phèdre* 出版後、5月にカトリーヌ・ド・ロマネと結婚する。その直後、ボワローは *Phèdre* の一冊を携えてポール・ロワイヤル修道院長アルノーを訪ね、それを読んでもらった。アルノーは「フェードルはわれわれに大きな教訓を与えたのだからその性格については何も非難すべきことはない。... しかし、何故イポリットに恋をさせか」と尋ねた。Louis Racine:«Mémoires sur la Vie et les Ouvrages de Jean Racine», *Oeuvres complètes de Racine*:tome 1: p.51-52.Raymond Picard.

29) Raymond Picard: *Corpus Racinianum*:p.84-85: *Dissertation sur les tragédies de Phèdre et d'Hippolyte*

30) Alain Viala:*Racine:la Stratégie du Caméléon*:p.185.

31) Antoine Adam:*Histoire de la Littérature française au XVIIe siècle*;tome IV : p.372.del Duca:1968.

セルトリウス

悲劇

コルネイユ 作
小林 卓 訳

読者に

この悲劇に芝居でこの種の詩を成功させる優美な飾りを求めてはならない。ここには甘美な愛も、湧きいづる情熱も、荘重な写実も、悲壮な語りも見つかりはしないだろう。しかしながら、この詩が不興を起すものでないこと、著名な人物の威信や、彼らの利害の重大さ、そして何人かの登場人物の目新しさが優美さの欠如を補ったと言い得る。題材は単純であり、たかさんのよく知られた出来事について、いささかの変更も許されないのであるが、規則に詰め込む必要不可欠な理由から時間や場所を圧縮することを強いられた。題材からは女性が得られないので、二人の女性を導入するという創意に依ることを余儀なくされた。もともと二人の婦人とも私が参照した歴史的事実と十分に両立するものである。お一方はこの時代に生きていた。ポンペの初めの妻でありシルラの娘エミリとの結婚によってシルラと同盟するために、ポンペによって放逐された。この離婚はポンペの生涯を叙述する人達の報告に必ず入れられているが、誰一人としてこの不幸な婦人がどうなったか述べていない。彼らは皆アンティスティと呼んでいるが、ただヒスパニアのジロンヌの司教だけはアリスティという名を与えており、耳に聞こえがよいという理由からこの方を選んだ。著述家が彼女の生涯について黙しているのを存分に利用して彼女に逃亡させたが、彼女を陵辱した敵のもとに留めるよりは、こうする以外為しようがなかったという方が一層真実らしいと思った。この逃亡にはローマの重臣達の手紙によって実をもたらしたただそれだけ真実らしさが加わった。これらの手紙は彼女の手を通してセルトリウスに、ついでペルペンナを通してポンペの手に入ったが私が述べたように廃棄された。もう一人の婦人は我が精神が生み出した純粹な観念である。とはいえ、歴史の中にくらかの

痕跡を留めている。歴史に依れば、シルラの党に抵抗する首領とするためにリュジタニ人はアフリカからセルトリウスを呼び寄せた。だが、彼らが共和制にあったとも、王政にあったとも歴史は伝えていない。従って彼らに女王を推戴させるに支障をきたすものは何もない。そして、女王をヴィリアツスより高貴な血筋から出生させることはできなかったので、ヒスパニアがローマ人と対抗した最大の偉人、セルトリウスがやって来る前に、各地でローマ人に対抗した最後のヒスパニア人の名を女王に与えた。ヴィリアツスは実は王ではなかった。でも、その権威のすべてを持っていた。ローマが彼を倒すために送った奉行や執政官はしばしば敗北を喫し、彼と和睦を結ぶほどあたかも君主や天晴れな敵に対する如く信頼を置いた。彼の死は⁽¹⁾私が扱っている時代の六十八年前に起こった。従って、彼は私が舞台に立たせた女王の祖父が曾祖父に当たるだろう。先に引用したヒスパニアの司教の言を信用して錯誤に陥ってしまったのだが、彼は私が女王に言わせたようにブルツスではなく執政官セルウィリウスに滅ぼされた。この誤りはこれについて語っている唯一の詩句の一語を変えることでたやすく直せる。次のように修復すればよい。

セルウィリウスの優勢な運勢 v.439⁽²⁾

この詩で多く登場したシルラがセルトリウスより六年前に死んだことは承知している。しかし、それを厳密に取るなら時の単一を守るために時間を圧縮することが許容される。そして形式的に不可能でないならば、六年間で起こったことを六日間、あるいは六時間でなす事ができる。上のことを念頭に置くなら、私がここで述べたことにいささかも抵触することなくシルラがセルトリウスの前に死んだことを妨げるものはない。なぜならアルカスがシルラが独裁を放棄した知らせを伝えるためにローマを出発した後、シルラが死んだかもしれないからである。セルトリウスが暗殺されたのと同時にシルラは

独裁を辞したのである。更に加えるならば、時の順序について細心の注意を払わなければならないとしても、登場人物がよく知られており、解決すべき利害をともに持っている場合には、彼らの生涯の長短についてそんなに精密に捕らわれる必要はないということである。シルラはセルトリウスが殺されたときには既に死んでいた。しかし、シルラは奇跡に頼らず生きていることもできる。そして、観客は通常歴史の表面を生かじりしているだけであるから、真実らしさを越えないこうした延長に立腹することは稀である。とはいえ、私はこの気儘さを何の区別をつけることなく一般的な規則にしたいわけではない。シルラの死はヒスパニアのセルトリウスの事件に殆ど影響を及ぼさなかった。そしてセルトリウスにとって殆ど重要性がなかったのでブリュタルクでこの英雄の伝記を読みながら、他の資料から教えられなければ、二人のいずれが先に死んだのか決めることは困難である。ポンペの事柄のように、国々を覆したり、党派を破壊したり、事件に別の側面を与えたりすることは、別問題である。もし厚顔にもセザルの事件の後にポンペの事件を延ばしたりしたら、観客すべての反逆を著作者は受けることになる。加えて、ポンペと他のローマの首領達とセルトリウスの間で続いた戦争にいささか色合いをつけ説明する必要があった。なぜなら、国家がその潜主の自発的な辞任と死によって回復されたように見えた後、何故戦闘が執拗に続いたのか理解するのが困難だからである。疑いなくシルラがローマに生き返らせた絶対君主の精神は彼とともに死にはしなかった。ポンペと多くの者たちは内にその地位を奪回しようとして、セルトリウスが彼らの強力な障碍になることを恐れていた。ひとつにはセルトリウスが祖国に持つ変わらぬ愛から、ひとつには彼の高い名声、そして国家の大変動が支配者の消失という無秩序をもたらした場合、彼の功績がセルトリウスに優先権を与える可能性があるからである。

おそらくこれが戦争の真の動機だろうが、若くして頭角を現して以来直ちに種蒔かれた野心に由来する見えざる嫉妬心の蠢動の故にポンペを貶めないために、不正行為をシルラの暴力的支配に帰するために彼の寿命を延ばす方が得策と考えた。このことは更にポンペにアリストティに向けさせた強い愛の効果を抑止させるに役立った。シルラについて恐るべきことが何もなかったら、アリストティとの再婚を防ぎようはなかっただろう。シルラの憎らしい高い名声はこの悲劇全体の核心をなす政治的な議論に重みをつ

けているのである。

この同じポンペはセルトリウスの約束を信じて敵方の首領が全権を握っている城砦に会談をしに来たとき、将軍として軽率の誇りを免れないように見える。しかし、これは貴族と貴族、ローマ人とローマ人の間に成立する信頼であり、かくも偉大な人間の側に何らかの騙し合いなどあり得ないという一種の確信をポンペに与えているのである。私は批評家にポンペは自身の安全に十分な配慮を配らなかつたと言わせようとするのではない。彼にこうしたお忍びをさせなければ場所の単一を守ることが不可能だったのであり、お忍びをさせた私よりも規則の不都合さに帰すべきである。もし諸君がポンペの妻に持っていた意図を知らないの、未だ情熱を注いでいた妻に会いたいという熱意と、妻が他の夫を選ぶのではないかという不安から、ポンペの行動を理解しようとしなければ、人々がこの会談に覚えた喜び、宮廷内の生まれからも才能からも第一級の人々が作品全体と同様賞賛したことから非難を免除させて頂けるだろう。諸君は何らアリストテレスに否認されるわけではない、彼はそれらが好んで受け入れられようであり、詩が得られる利益がその優雅に匹敵すると期待できるなら、理なきことがらを時には舞台にあげることを甘受したのである。

登場人物

セルトリウス、ヒスパニアにおけるマリウス党の将軍
 ペルペンナ、セルトリウスの副官
 オフィド、セルトリウス軍の弁論家
 ポンペ、シルラ党の将軍
 アリストティ、ポンペの妻
 ヴィリアト、リュジタニ⁽³⁾（現在はポルトガル）の女王
 タミル、ヴィリアトのお付きの女官
 セルスス、ポンペ党の弁論家
 アルカス、アリストティの兄弟であるアリストティウスの解放奴隷

舞台はセルトリウスに征服されたアラゴンの都市、ネルトブリジ。今はカラタユ⁽⁴⁾。

第一幕

第一場

ペルペンナ、オフィド

ペルペンナ

なんなのだ、この胸騒ぎは！我が願いがこんなに叶わないのは、どんな因縁があつてなのか？本意に逆らつてもなそうとする裏切りは、その戦慄によってあらゆる望みを断ち切り、道理に刃向かう。罪悪で得られる地位についての喜ばしい夢はわしの快樂だった。だが、身の毛のよだつ光景を思うと、いざ実行というとき、我が輩の腕は麻痺れるのだ。無駄なことだ、我が勇猛心を鼓舞する野心なぞ、汚れた行為を名誉という空々しい輝きで飾るに過ぎない。詮無いことだった、卑劣な業に身を落とすために、あまたの後悔という枷を我が心から投げ捨てようとしたのだが。この心という奴は、自ら突然粉々に砕け散つても、後悔心をなんとか繋ぎ止めている鎖をとり戻すものなのだ。こうして、セルトリウスは運よく、奴の心臓を突き刺そうとしていた腕を止めてしまうのだ。

オフィド

殿の野心の成就を邪魔するのは、お心に巣くうどんな取るに足りない細心きわまりない邪魔者なのでしょう？最高の地位を望む限り、少しのけちな血を流すに躊躇うことがありましようか？かの偉大な格言をお忘れになりましたか？『内乱を支配するものは罪だ。』罪が臆面もなく跋扈跳梁するところでは、小心な潔白など侮蔑すべきものでしかありません。名誉も美德も笑うべき名前に過ぎない。マリウス⁽⁵⁾もカルボンも細心さなど持ち合わせていなかった。シルラも又そう...

ペルペンナ

シルラもマリウスも決して犠牲者の血を惜しみはしなかった。狂気に走つた奴らが勝利に酔いしれるごとに、奴らは蛮行を恣にした。数々の虐殺、追放⁽⁶⁾がローマを葛藤、対立の渦に投げ込んだ。だが、血で染まった対立は支配者を生み出した。殺しはやりたい放題だったが、裏切りはなかったのだ。奴らの極めつきの狂気の沙汰といえども、同じ党派の人間の血を流すまでには至らなかつた。どちらの党派にしても、その地位に取つて代わるために、敢えて主君を殺す者はいなかつた。

オフィド

では、断念すると言うことですか、殿より力量の小さい首領の旗印の下に甘んじるとは！屈服せねばならないならば、もう戦争は止めましょう。大地すべてが従順につけている首枷を我らもつけましょう。何故、多くの危険を？何故、多くの戦いを。我々が平伏しようとするなら、シルラは講和を持ちかけてくるだろう。一人の人間に支配されるのはローマ人として面目ないことだ。だが、潜主には潜主を対抗させよう。ローマで生きるに優ることはない。

ペルペンナ

君は言つてることが一体分かっているのか？少なくとも、ここには自由がある。ローマで抹殺された我らが共和制のもっとも貴重なものがここには咲いている。この避難所には著名な追放者が難を逃れ、元老院の主立った逃散した議員が集まっている。その者どもによってセルトリウスはこの地方を治め、貢ぎ物を課し、領主達に権力を揮い、我らローマ人の残党を独立不羈な者に保っているのだ。しかし、どんな党も命令を下す者が必要であるし、至る所でセルトリウスに付きまとう思わぬ幸運、将軍がヒスパニアの民衆で得た名声...

オフィド

幸運から得たその名声が殿の昇進を妨げ、我々から名誉を奪っている。殿の軍が将軍の軍に合流した日の記憶がどんなに薄れようとも、殿の忸怩たる思いは消えないだろう。

ペルペンナ

ひりひりする過去をほじくり回さないでくれ。指揮権は当然予のものであつた。力においても序列においても、あれに勝っていたのだから。それがしがいなくては、奴はその弱さから倒されていただろう。ところがだ、奴が姿を見せると忽ちの内に我が陣営の者達は奴のところ走り去つたのだ。予の兵士が予の幟を持ち去り奴の壕に走り行く始末だ。この恥辱を晴らそうと、わしも憤激に我を忘れ連中の後を追い、同じく奴の旗幟のもとに入ってしまった。それ以来、苦々しい嫉妬の情は密かに我が心を蝕んで離さず、抉るような痛みは日増しにある感情の影響の下で募るばかりなのだ。その感情とは野心より一層強く心を振り回すものだ。予はヴィリアトを神のごとく愛している。リュジタニア人の女王、名の聞こえた支配者は予との結婚によって、奴に奪われたわしの部下に揮っていた最高

の権力を女王の部下の上に取り戻してくれるだろう。ところが、何たることだ！女王自らが、(かの名声に惑わされて)、奴の名望がたてる麗しい評判に愛着しているのだ。女王の魅力には一瞥もくれないで、奴は自ら求めもしない愛情を予から盗んでいるのだ。それがしにことごとく逆らう奴の運勢とはこんなにも勝手放題なのだ。そして、わしのお宝を取り上げる度に、奴の名聞が一切をとりはからい、奴はなに知らぬ顔で済ますのだ。奴は愛することができるし、恋の炎を密かに燃やしている。だが、この点についてはわしの胸の内をあれに打ち明けようと思う。手に入れたい王冠さえ譲ってくれるなら、わしは憎しみを捨て去り、欲求がかなえられたなら満足するだろう。そして、我々の配慮によって組織され、我々の手で教育され、我々の規律の下でローマ人になった蛮族の間で同等の地位を保証してくれるならもう奪われた地位に恋々とする事もないだろう。

オフィド

こんな重大な謀り事をしているとき、愛だの恋だのと言っていられますか？愛の成り行きが殿にとって、それほど甘美であるなら、ヴィリアトは、セルトリユスが死んでも、殿のものになりますまい。

ペルペンナ

その通り、だが、その死後が気懸かりなのだ。セルトリユスの地位と同様に幸運まで手に入れられようか？奴を信任し支持した者達は、果たして奴同様に予に従ってくれようか？そして、凶らずも途切れた命の復讐にポンペの傘下に馳せ参じはしないだろうか？

オフィド

それは気を病み過ぎるというもの、それに、遅すぎる。今夜の宴会で將軍の命を断つことを決めた。和平のため軍は地方に散らばっている。そして、殿は我らの同志に命令権を有している。こんな陰謀にあつて絶好の機会が訪れている。だが、これほどの優勢な状況は明日には終わる。殿がこの襲撃を止めるつもりなら、一切の痕跡を残さないようご注意ください。セルトリユスを滅ぼすか、さもなくば同志を滅ぼすか。恐るべきものを怖れなさい。殿のように後悔の念に駆られている者が我らの中にいるかも知れない。殿が引き延ばしたら、... おや、潜主が見えられた。殿を虜にした美女を奪い返しなさい。こちらとしては、この会見で殿がなにも得られな

いほど幸運なことを神に願おう。

第二場

セルトリユス、ペルペンナ

セルトリユス

今し方わしに不意打ちを喰らわせた知らせを聞きたまえ。間もなくポンペが当地にやってくるというのだ。我々の仲違いについて私と話したいというのだ。身の安全については、私の言葉だけを信用している。

ペルペンナ

大物の間では言葉だけで十分。殿の様なお方の約束はあまたの人質に匹敵します。それに驚きはしませんが、それにしても、怪訝なのはポンペが、この会談で中立の立場を取ろうともせず、殿に従いながらも、大殿という呼び名を称していることです。それは、偉人シルラの名声をあまりに値切ることと言わねばなりません。

セルトリユス

我々より勢力があると言っても、ヒスパニアに於いてではない。ここでは、かの殿の軍を敗北せしめ、あぶなかしい状態に逼塞せしめている。かの大殿は心の痛手に苦しみながら、一つか、二つの領土に甘んじている有様だ。自分の運勢にうんざりとして、春が来て和平が終わるや、予が兵を動かすことを怖れている。わしが始終良い成り行きに恵まれているのは、そなたとわしの連合のお陰だ。わしの力はそなたに負っている。わしの感謝の念を期待したまえ。ポンペに戻ろう。どんな動機からかの殿がここまで、我々の所に来られることになったのか知りたい。かの殿は我々と共に大した荣誉を分け持てないのだし、攻撃に打ってでも、守りにつくのも難儀なのだから、有利・不利に関わらず講和を結ぶことでかの名声を曇らす役を降りたいだろうし、その上ミトリダトとの戦が上首尾に行くかもしれないと言う期待もあろう。大殿はローマにいることを熱望しているのだ。殿の仕える主人から秩序と権力を受け取るために。

ペルペンナ

ポンペ殿が主人に強いられて追放し、ここに難を避けて来たアリスティがその消えやらぬ愛のほてりから、他の口実をつけて別れの挨拶をするために、ポンペ殿をここに呼び寄せたものとばかり思っておりました。殿の親しい潜主は、

殿にアリスティと暇乞いすることさえ許さなかったほど邪悪なのですから。

セルトリウス

そうかも知れない。二人の間柄は睦まじいものだった。だが、ポンペはここに来て、意外な変わり様に出会うかもしれない。アリスティはあまりの侮辱に我慢がならず、愛は憎しみに変わり果て、我らの所に避難を求めるといふよりも、一層栄えある伴侶を探している様子。ご本人がそうも語ったし、それに、ローマにまだ残っている大物達の援助を仲介しようと申し出もした。その中には、奥方の親戚や仲間も含まれていた。そして、わしが奥方と結婚するなら、一切をわしのために差し出すというのだ。奥方がわしに渡した連中の手紙がそう約束している。わしはどうするのがいいのか、ゆっくりと考えてくれ。貴公の判断に委ねたいものだ。

ペルペンナ

あ々！これは、これは、殿。一瞬とも躊躇っけいられましようか？アリスティとの婚姻に拷問のような隠れた強い嫌悪がなければ、ローマを持参金に提供するというのですから、いささかもあれこれと迷うときではありません。

セルトリウス

ペルペンナ、打ち明けなければならぬ。わしが怖れていること、考えていることについて。わしには別に愛する人が居るのだ。予の年で、恋の擒になるとはあまりの不面目、だから予を魅了した女人にも隠してきた。ところが、こういうわしにでも、愛する女人はいるものだ。いや、もっとはっきりと言おう、ヴィリアト女王が予との婚姻を望んでいる。女王の野心からなる婚姻が女王の民と我々を結合する手始めになり、続いてたくさんの結婚が競うようになされ、お互いに結ばれあつた我らの二つの民は血も利益もしっかりと混ざり合つて、二つの民族から一つの国が産まれるという算段なのだ。この地で、我らの大なる計画を支援するために部下の財産も血も惜しむことなく、変わらず我らに仕えた当然の報いとして女王は要求するのだ。女王が私に言ったというのではない、誰かが女王の代わりに代弁したのでもない。ただ、毎日のように、その確かな徴を認めるのだ。女王の考えがわしに疑いないものになった以上、わしがそうしたいと思う限りでしか知らぬ振りはできない。だから、アリスティを娶ったら、女王を怒らせ、そしてその優秀な部下達が主人が蔑ろ

にされた復讐として、女王の憤怒を晴らすために、その刃を我等に執念深く向けてきはしないだろうか。我等に取り返せない不利な情勢になることに較べれば、アリスティが約束したもののなぞものの数ではない。状況を打開しようという欲に眩んで、その支援にすがらば、我等は却って弱体化するだろう。

あそこに我が心を揺り動かして止まない者が見えた。予はアリスティを少しも嫌ってはいない。女王がわしの心をこんなにも支配していなければ、お互いの幸福のためにはどんなことでもしただろう。

ペルペンナ

殿の心痛である恐れを思えば、一刻も婚姻を遅らすべきではありませんまい。ヴィリアトは確かに驚きあわてふためくでしょう。だが、憤りも力がなければ何になるでしょう？女王の嫉妬、その空しい恫喝にもかかわらず、殿はやはりこの地方を支配されておられるではありませんか？女王の部下がいかにか激昂したといえども殿の軍まで指揮できましようか？連中のもっとも高貴な者達、又最も勇敢な者達の子息を殿はオスカ⁽⁷⁾に人質として捕らえているではありませんか？連中に命令するのはすべてローマ人であり、兵卒の中にはこの地の者も混じつてはおりますが、歴戦に揉まれて連中とローマ人には結びつきが生まれ、連中さえローマの規律を愛し他のものを望まないほどなのです。一体、何故かくも連中を恐れるのでしょうか？何故、拒むなどと...？

セルトリウス

貴公こそ、何故そんなにしらを切るのかね？君がヴィリアトを愛しているという噂を聞いた。君の愛は理性の中に籠もってはいるが、輝き出ている。理屈の論議は無用だ。言い給え、女王を愛していると。わしはもう愛してはいない。話したらよからう。わしは貴公に多くの義理があるのだから、感謝の念からも一瞬たりとも貴公の愛を疑うなど恥と言つていい。

ペルペンナ

殿が我が心から引き出そうとしている告白ほど優美なものはなく、そこで敢えて...

セルトリウス

それで十分、わしが貴公に代わつて話そう。

ペルペンナ

いや！殿、それは余りのご沙汰．．．その上、

セルトリユス⁽⁸⁾

問答無用。

わしの恋の願いは既にアリストティに向いている。かのお方と結婚しよう、女王が同じ日に、君の恋に報いる気があるならばの話だが。というのは、貴公がどう言おうと、女王の憎しみを買ってはならない。このことがあるからこそ、かの名うてのローマのご婦人を避けていたのだ。アリストティが見えられた。奥方の心を向かわせるようわしのやりたいようにさせてくれ。その間、貴公は手紙を読んでいるがよい。

第三場

セルトリユス、アリストティ

アリストティ

どうかご立腹なさらないで下さい。苦境に立たされ、非力なために殿にうるさくまとわりついているのですから。私の結婚についてではなく、その後の成り行きについて再三考える必要があるのです。新たな困難が出現してもまたも援助の手を私の願いに応じて差し伸べることが殿にはお出来になります。かつては私の夫であった不実な者が殿との会見のためにこの城塞にまでやって来るそうです。かの潜主の命令と夫の定まらない恋は、私がここに難を避けて守った誉れを奪い去ろうとしています。一方は成り行きを見越し、もう一方は密会が明るみになることを憂慮している始末。そして、二人ともそろって私の逃亡を非難するのに政治上の理屈をこねくり回すのです。夫が余所では心痛なくして見るに忍びないものを、力尽くで、あるいは一途な懇願に頼って再び手に入れようとするなら、どうか少しの不安もなく私をお守りくださるようお願い申し上げます。

セルトリユス

奥方、かの殿にはそれだけの理由がありました。不本意に別れさせられたからこそ、この美貌はますますその真価を発揮するというもの。仮にもそなたが敵意を持つ者に出会ったとしても、ここでは誰に対しても安心していられます。あれほど優しいところを見せた不実者にしても、そなたと話すとなん、そなたの前に屈するでしょう。熱愛した者を憎むことは難しいこと、消し炭ほど直ちに燃えあがるものです。

アリストティ

あの裏切り者は、エミリの利益のために、私と別れ私をイタリア中の笑い者にしたのです。私の心がどれほど傷ついたかご承知でしょう。でも、夫が無理矢理に強いた侮辱を取り消し、エミリを追い払い、私を元の地位に戻すならば、それでも赦さないという訳ではありません。私が自由に夫に忠実でいられる限り、夫が一切を私に返すなら、私のすべては夫のものなのです。

セルトリユス

それでは、空しかった、わしがあらぬ空想にひたつたのは、空しかった、わしが思いきって、奥方、そなたの心の分け前に幾分かでも我が想いを託そうとしたのは。ポンペは今なおそなたの心を支配しているたった一人の人間だ。どれほど憤りに動かされても、そなたが他の男に差し出すのはただの婚姻の結びつきに過ぎない。ポンペの拒絶によって、予に求婚の些少の権利が生まれようと、かの殿のものであるそなたの胸中は決して他の者のものにはならない。

アリストティ

自分の義務を知り、しかも私との結婚が殿の力を増すとしたら、私の心情がなんだと言うのです？我が潜主に挑戦し、私の運命を高めるのに尽力するよりも、私の心から愛の甘く優しいいちゃつきを求めの方をお好みになるほど品くだつてはまさかおりますまい。うっちゃっておくのです、殿、愛だ恋だという艶話は小心な連中に委せましょう。我々が同盟するのは、ローマが間もなく失うことになる自由をより一層強く支えるために過ぎないのです。殿の政略に私の復讐も加えて、国家が陥っている苦難から救い出すのです。結婚とはただこうした遠大な計画を達成するためのものです。私の計画が大げさなことは承知しています。潜主が私に命じた過酷な逃亡生活にあっても、ポンペのお払い箱にはまだ何かしら価値があるのです。私の考えはとて貴く、とて誇らかなので最も偉大なローマ人でなければ相応しくないのです。

セルトリユス

その呼び名はそれがしにはふさわしくない、それがしは．．．

アリストティ

殿のなされたことが、殿がどんな方かを世界中に知らしめたのです。たとえこの呼び名が殿には過ぎたものに見えようと、少なくとも私の

不貞な夫は一段下の者です。あれはシルラの党に仕え、殿は自分の党を指揮しておられます。あなたは一方の旗頭であり、かなたは他方の臣下です。そして、私との誓いを破った離婚によって、なおのこと私以上にシルラによって抑えつけられているのです。大殿との結婚によって私が最高の地位に昇るのに対して、エミリとの結婚はあれを奴隷の地位に落とすのです。殿、失礼にも取り乱しました。あまりの幸運の余り、殿とのお話に不覚にも熱が入りました。私の幸運はまだ不確かなものです。ただ不安に憑かれながら運の開けるのを願っているのです。大殿が私の願いを聞き届けて下さるまでは、あまりに高い要求をしたことを始終苦にするでしょう。殿の一言によって私は安堵するか、窮するのです。

セルトリウス

奥方、つまりは、あなたを心安らかにさせることが請け合えましょうか？奥方のお話を聞いても、奥方が何を求めてられるのかははっきりとしないのですから。あなたとの華麗な婚姻がもたらす利益については承知しています。身の保障のためにも名声ある人物は尊重しております。彼らの助けによって我らの力は増し、じきに潜主制を倒してしまうでしょう。しかし、このような期待も裏切りの目に遭う、それはポンペがそなたのこころをがっちり握っているからであり、ここで広げられた大なる利益も、それがしにすべてを約束はすれ、何一つ与えないものに過ぎないからです。

アリストイ

私という人間それ自身を選んだから結婚しようとなさるなら、申しあげましょう。『どうか、そうなさいます。ポンペが何を望もうと、もう遅すぎます』。ただこの結婚には愛は入っておらず、政治の大義の純然たる結果であるのですから、百万の兵を持参金としたとしても、結婚がなくとももっと多くのものを殿に進呈しただろうと釈明するのをお忍び頂きとうございます。

私がポンペに無理にエミリを追い払わせても、シルラの支配しているイタリアに向かって進軍できるでしょうか？そのもっともな怒りに身を任せられるでしょうか？到底できもしないことです。私がポンペの心を捕らえている限り、ポンペは殿の所へ来るしかないので。こうした次第で、私との結婚によって殿はあまたの真のローマ人を味方にして万全の安泰を手に入れましょう。しかし、私が婚姻の繋がりを断ち切つ

てポンペに我が愛を返すのなら、この新たな離婚によってこうしたローマ人たち、さらにポンペ、その友人たち、潜主の主力をなす軍隊、少なくとも最も勇敢な兵士たちが彼らの将軍の後を追うことでしょう。あなた方は共通の旗印のもとにローマに進軍するでしょう。その時こそ、シルラよ、おまえは私を恐れ、震えるだろう、おまえが私から剥奪したものを私がおまえから奪い取れるならすぐにおまえの高慢な鼻がへし折れるのを目にするだろう。ポンペをそなたの妻の婿にするために、あれに偽りを言わせ、くだらない人間、恥知らずにしてしまった。でも、夫が私のためにその心に幾分かの余地を残しておいたら、夫は誓い、勇気、名誉を取り戻し、おまえの束縛を解いて私の懐に戻ってくる。そして、我々共通の憎しみのもとにおまえを滅ぼす。殿、大切な時間を無駄遣いしました。殿の利害はこれまで述べた通りです。どちらを選ぶか、殿次第です。殿の愛が待ちきれずにその少ない収穫で満足しようとするなら、もう一度申しあげましょう。私はすぐにでも結婚する準備が出来ていると。殿のお考えに任せます。なかならず、お忘れにならないでください。私の名誉の故に、ここでは夫が必要なのです。いつ交換されるかもしれない戦争の戦利品に身を落とすことは耐えられないのです。そして、私の身分・地位から相手の方は偉大な人でなければなりません。大殿とポンペのほかには私にふさわしい方はいないので。

セルトリウス

殿にお会いなさり、その考えを伺えばよい。

アリストイ

お暇します、殿。私はここで一番利害の的となっております。私の余力の限りを尽くして、用意しに行きましょう。

セルトリウス⁽⁹⁾

わしは、ポンペ殿を丁寧を迎えるよう命令を与えよう。神々よ、私の考えを打ち明けるのを忍び給え。政略のために愛するとは残酷な運命だ。心はここにはないのに、利害の故に結婚するとは、かの奥方の利害くらい変わった不幸もないものだ。

第二幕

第一場

ヴィリアト、タミル

タミル

ヴィリアト

タミル、話さねばなりません。事態が迫っているのですから。ローマはこの城壁にまで私の主人となる女人を送ってきました。アリスティは亡命生活の苦しみのあげく、私に勝ろうとしています。私の心の内を明かすために、私の妙な目つきにあらん限りものを言わせても無駄でした。当地の王たちの求愛を抛って、お一人だけを選んだという自尊心に訴えても甲斐はありませんでした。私が胸の内を知らせようとしているただ一人の殿方は、敢えて知らぬ振りを装っているのか、全く気がつかないのか、もうこれ以上詮索するのは私の廉恥心が許しませんし、むしろ拒まれていと取った方が私の自尊心は満足するのです。その恥を雪いでもらいたい。あの方に言って頂きたいのです。あの愛すべき英雄に...そなたはかの殿をよく知っている。私の王座はどうすれば強い支えを得られるか、当地の王の求愛を退けているのは、かの方以外一体誰のためか？ヴィリアトにふさわしいのはセルトリウス一人しかおりません。あの方は私の限らない愛を注ぐに値する方です。殿と結婚して私の王座を強固にすると言う栄えある意図を、殿に伝えなさい。でも、そなたの練達したやり口に教えを垂れるのは間違っているかもしれません。そなたが熱心に王女に仕えているのを承知しているのですから。

タミル

女王、かの英雄にあつてはすべてが輝やしく偉大です。しかし、素直に申し上げれば、あなた様の愛には驚かされました。あの年頃の殿方が若い方にこれほど強い魅力を及ぼし、黄色い皺の寄った額が五感を魅了する秘密を隠していたとはとても意外と申さねばなりません。

ヴィリアト

私の愛が重んじるのは感覚ではないのだよ。感情の血気にはやる騒々しさを厭い、我が偉大さに奉仕する恋は坪を越えた熱意を軽んじる。私がセルトリウスに見出すのは全土を敵に回しても一人の追放者を護るような戦争の秀でた術であり、月桂樹に覆われた頭、恐れなき勇者をも震撼させる風貌、勝利を分け持つ武勇なのです。勇気を愛する者は年齢に目を遣らず、優れた特徴は必ず眩い魔力を持っており、一切をなせる人は、どの歳にあつても愛するに値するのです。

でも、この地方の王達、その求愛があなた様を苛立てておりますが、その殿方には勇氣も力も秀でたところもないのでしょうか？あなたの党には赫々たる武勲によって名声を上げた方が一人もおりませんのでしょうか？テウルドゥタン⁽¹⁰⁾の戦士、セルティベル⁽¹¹⁾の戦士は、ご先祖の王杖を守るにたいした頼りにならなかったのでしょうか？

ヴィリアト

あのような王に対抗するには、当地の王達の支援があれば十分です。でも、ローマ人に対抗するには、私の配下の王達では無力なのです。ローマに抵抗するには、今やローマしかないようです。ローマに挑むために、ローマは一人の殿方を遣わしました。この地方のために戦われるかの殿が運命の行方を握っており、神々と誼みを通じているのです。殿のご厚誼によって我らの領土が護られ、また、領主達に誉れが分け与えられて以来、このような絶大な支援と比べては、我らの王達も同盟者という名目を持った単なる家臣に過ぎなくなってしまいました。そして、この束縛を解こうとしたことが益々その軛を強く頑なにしたのです。

マンドニウスはどうなりました、そして、インディビリス⁽¹²⁾は？ともどもの王位をなお一層貶め、たった一度の負け戦で権力と栄光で鼻高かったのがへし折られたではありませんか？私が生を受けた大なるヴィリアツスもより幸運ではあつたといえ、似たような不運に出会いました。三人の指揮官を倒し、十の戦に勝ち、百以上の砦の襲撃も撃退した。でも、この驚くべき幸運も、執政官ブリュツスの優勢な運命の前に突如雲散霧消した。かの大王は敗れ、命を落としました。そして、もし捕らわれの人々を解放するためにローマがかの貴人を追放してよこさなかったならばその王位はいつまでも屈辱にまみれたままだったでしょうに。

我らの運命が殿の勇氣に委ねられ、幸運がいつも我が軍を訪れるようになり、十年に及ぶ戦争はこの領土を専制君主の侵攻から安泰なものとした。十年経った今は、我々を覆うのはピレネの山の影くらいしか残されていない。我らの王達は、あの英雄がいなかったならば、互いに嫉妬しあいことの申し分ない成り行きを絶えず妨害したろう。あの連中は、仲間から支配者を選ぶことは決して出来ない。

タミル

とはいえ、ローマ人の支配に甘んじるでしょうか？

ヴィリアト

殿は支配者という名称をとらない、領主達を対等に扱う。タミル、ともかく、殿は彼らの指揮官であり、領主達は殿の下で戦い、殿の命令の下で団結した。すべての王は名前だけで、実際はそうではないのだが、位がもたらす空しい誇りの故に実のない偽りの対等に甘んじている。

タミル

あなた様に有利な理屈を聞かされては、もう何も申し上げますまい。あなたと同様、殿の年齢に触れはしません。ただ、かの英雄は長年にわたってあまりにも勝ち続け、これから先勝利の期間は限られているように思えます。英雄が死ねば...

ヴィリアト

妬み深い神をうっちゃって、殿の輝かしい人生の光栄ある余生を享受しましょう。殿の死はその亡霊の眩しい輝きと高い名声によって私を守るでしょう。この二つの大きな支えに固められて、私の王位には恐れる敵はいないでしょう。それらはあまたの王のなす以上のことを私のためにするのです。このことについては、またの機会に話し合ひましょう。殿がやって来られました。

第二場

セルトリユス、ヴィリアト、タミル

セルトリユス

私が図らずも抱く大胆なまくろみを聞かれたら、なんとと言われるでしょうか？奥方の心中を覗き見ようとは、あなたの名誉を損なうのではありますまいか？

ヴィリアト

私の心は開け広げですので、どなたでも読めます。私の心中を知るには、私が言葉にするよりも、ただご覧なさるだけで多分十分でしょう。

セルトリユス

それにしても、もう少しよく事態を明かして欲しいものです。あなたの領主達はすべて競って、あなたとの結婚を求めています。我らの幸運は女王の親切心の賜物なのですから、そのご好意に縋って懇願する次第です。我々も関わる重大な婿選びにおいて、もし心変わりのしや

すい、忠節心の欠く、また我が党派の利害を熱心に守ろうとしない領主をお選びになったなら、お考えください。我々が将来どのような窮地に陥るか、私が今出来ることをなお長きにわたって出来るものかどうか、私の武勇もいつかは色褪せ...

ヴィリアト

殿は、私も驚くような心配をなさるのですね。私の領土すべては殿にしっかりと支配されました。私が夫を選ぶようなことがありましたら、夫がどんな目論見を立てるにせよ、殿に依存することになりましょう。しかし、そうした笑止な心配を払うために、殿ご自身がお選びになってはいかがでしょうか。素直にお話してください、この領主達すべての中で、誰が安心できる人物なのか、誰になら王という偉大な名をさずけられるのか？

セルトリユス

私は女王に気に入るような配偶者を選びたいものです。あなたが領主達と交際する際のよそよそしい態度を拝見しますと、どなたにもご関心がないようで...

ヴィリアト

それはおそらく、誰も私の気に入らないからでしょう。彼らの高い地位に相応した誇り高い華麗な装いも、偉大なローマ人が姿を見せたるとたん消え失せてしまうのです。

セルトリユス

それでは、配偶者としてローマ人を推薦したとすれば？

ヴィリアト

殿からの贈り物を拒めましょうか？

セルトリユス

今のお言葉に甘えて、古きローマの一員と認められるに値するローマ人を敢えて推薦致します。かの殿は生まれもよく、勇気に溢れ、栄光に覆われ、多くの武勲を重ね、ヒスパニア全土から尊敬されております。物惜しみせず、勇猛果敢、愛想が良く、心は寛く、つまりはペルペンナ、奥方がかの殿に勝るのは...

ヴィリアト

こんなにも長所をあげては、てっきり殿の名前が出てくるものと思っておりました。殿が連

ねた輝かしい讃辞からは、もうこれ以上望むことは許されないことです。ただ、回りくどさにはいささか辟易しました。殿は女王をご自分の部下に与えようとなさるのです！ローマ人がこうして愛する人を選ぶのなら、最低の弁舌家にも王女が必要となりましょう。

セルトリュス

女王...

ヴィリアト

配偶者の選択について腹藏なく話しましょう。殿は私にはあまりに分の過ぎた方なのでしょう。私は殿には言うに足りないものなのでしょう。それは私を差し上げることで、差し上げるとは耳に痛い言葉です。でも、このような愛は私の部類には似つかわしいのです。そして、私が何をなすべきかよく承知していることを誰にも知って欲しいのです。私を理解して貰うために、それを高らかに言いましょう。私はローマ人を受け入れました。もっともそのローマ人が支配するとしてです。また、支配するより服従することに長けていない限りは、我らの王達を侮るべきものとも思いません。彼らの力について殿と較べるとしたなら、彼らの弱点はともかく王という名称を持っていることです。従って、誰よりも殿を選んだ高慢な自尊心は、殿を別にして誰よりも力の劣る者を選ぶでしょう。なぜなら、私の出生の名誉を満たすには名も力も王でなければならぬでしょう。このような方がもういない限り、名はなくとも力がある、さもなければ力はなくとも名があるという方を選ぶのが自分の本分を果たすことだと考えたのです。

セルトリュス

奥方の出である名門の先祖に返すべきものを返そうとするその偉大な心構えには賞賛の念を禁じ得ません。その誇りがより卑小なものに落ちたならば、そなたに残されたものは何もなくなるでしょう。王の威厳を全うするために、奥方の高い生まれと連れ合う相手を求めているのですから、ペルペンナは我々の中ではただ一人の相手です。その血筋は輝かしい位にいささかの陰も落としません。殿は我らの王族の出であり、エトルリアの王族の出身でもあります。より低い出生の私としては、いささかの名声で自惚れ、我が恋心で王位を汚そうとは思いません。私を買いかぶる余り、ペルペンナを不当に扱うのはお止めください。私は女王の家臣の名を頂

きたいだけなのです。この栄えある名は私を歓びで満たし、女王に仕えようと思えばこそ、勝利を呼び込むのです。天が私に下された恵まれない生まれにもかかわらず...

ヴィリアト

そう言われるなら、もっと身を低くさない。さもなければ、どうか、打ち明けてくださいませ。私を受け入れないのは何が殿を拘束しているのか、私を自由にご利用ください。わが王位が殿に払ってる敬意と我が身に加えられる侮りとを和合していただきたいのです。殿を尊んで止まないことを知りつつも、それを一層よく利用なさろうとしないのはどのような粉飾手管を凝らしても隠しようのないことです。もう私を侮辱するほど尊敬の極みにあげるのはお止めください。殿が望まれたのですから、私の家来におなりなさい。そして、私には女王としてそなたの願いを思いの儘にさせることです。そなたの熱い恋を私に向けなさい、私がそう望んでいるからです。あなたのペルペンナについては、その高貴な生まれにもかかわらず、そなたへの服従から抜け出られないでおりますが、たとえ、王とともに神々の血を引いていたとしても、我が伴侶となる榮譽を約束してはなりません。ローマは高貴さに威厳をおいておりません。あなたの偉大なマリウスは卑しい生まれでした。それでもローマ人が七回も主人と選んだただ一人の人間なのです。こうして、各々をその流儀に従って評するなら、ヒスパニアの血にさえ欠けることのない愛顧を与えましょう。あなた方ローマ人の間でも、生まれには大した注意を払っておりません。ローマでは勇気が高い地位を占めるのですから、殿、他のローマ人同様女王の名が嫌いなら、私をローマの女性と見なしなさい。我らに与えられた市民権は王冠を被った額にも同じく権利を持っています。この権利を与えられて、あなた方と同じ身となった私は、私の臣下の一人に十分匹敵すると思うのです。あるローマのご婦人が殿の拒否の原因だとすると、私はその方にいささかも劣らず、加えて女王なのです。たぶんあまりに知れわたった惨めさへの同情が...

セルトリュス

よくわかりました、女王、あなたに一切を明言するために、私は白状しよう、アリストイが...

ヴィリアト

アリスティは我々に一切を述べました。あの方が何を望んでいるか、あなたにどんな手紙を書き送ったか、無駄な時間はありません、殿のお考えをお聴かせください。

セルトリウス

あの方の関心は唯大義名分にあります。あなたと私とでは、ヒスパニアを潜主から解放する手だてが違っているのですから、どうか、共通の利益を探しましょう。勇気ある者は何をすべきかご判断ください。

アリスティの助けを拒むのは、女王、あなたとあなたの国々を裏切ることになりましょう。と言ってアリスティの申し込みを承諾するのは、奥方の差し出された婚姻の申し出を蔑し、我らの共通の画策を嫉む運命がこの大なる王国を悪しき手の中に投げ込むならば、その同じ助けが我らの滅亡になるかも知れないのです。奥方がリュジタニとこの強いローマの救援を合体していたならそれがしはシルラを亡き者とみなしただろう。ところが、奥方はとうとう配偶者に頼ることになった。それがしが奥方の保証として与えられるのはただペルペンナしかない。かの殿のしたことをご覧なさい、予は殿に大変な借りがある。殿の恋のため、もっともな願い、...

ヴィリアト

殿があのお方にそれほど借りを持っているのに、われには何の借りもない、殿の借りを私の財であの方に払わねばならないのでしょうか？殿の軍を私の王冠で護って以来、殿の征服に私の加わる余地はなかったのでしょうか？殿のためにしたのは、いつまでも殿に仕えるため、私の助けを差し伸べたのは自分を囚われの身にするためだったのでしょうか？お間違えないよう。ペルペンナと結婚しても、私は最高の権力を手放したりはしません。ペルペンナを焚きつけて、殿を上官に留めてはおかないでしょう。さらに申せば、誰と結婚しようとも、私は王冠を誇らかに被るつもりです。我々が別れることになったら何もかも失うのではないかと、大殿のことを考えているのです。殿一人が、海から山々までヒスパニアを統一できるお方、私の提案は、そのただ一つの手段なのです。かの親しき同郷の方が殿のために何をしたにせよ、潜主制に反対して殿の味方をしたにせよ、命長らえていることで十分に報われているはず。かの党派の敗北に打ちのめされて、もし殿と合流しなければかのお方は滅びていたでしょう。噂では、

かの殿の軍はかの方の意に反して、殿の軍に降ったというではありませんか。

ローマは絶大な支援を提供しようとしています。少なくとも、殿へ届けられた手紙によれば。でも、追放された人達を助けるためにです。我々が完全な勝利を得ようとしているときに、その榮譽を分かち合う必要がありますでしょうか？もう一度の戦役で、我らの騎兵隊は独力で、シルラの軍旗をピレネの向こうに押し返しましょう。それでいながら、最後にやってきた者が、ここに自分たちの帝国を築くのだと言おうとしている！このような名譽を与えるのはお互いに惜しもうではありませんか。何もかもできるときに、我ら以外に借りを作る必要はないのです。...

セルトリウス

この上なく確かな見込みでも、力があり余ると言うことはないのです。これ以上ない幸運も突如離れ去っては不意打ちを喰らわすことがあります。過大な信頼を裏切るのが運命は好きなのです。そして、遠大な計画では何一つおろそかにしてはなりません。天がローマ人と共々手にしようとしている名譽を他のローマ人と分け合うのは望まないからと言って、ローマの奴隷になる、我々を隷従の徒とする危険に曝してよいものでしょうか？我らが彼らの援助なく世界を解放したなら、むろん、我らの栄光は並び立つもののないものでしょう。しかしたくさんの勝利も何かの不運で無に帰したら、どんなに激しく身を責めねばならないでしょう？加えて、ご考慮頂きたい、ペルペンナはあなたを愛している、ペルペンナは王位に値する、あるいはそう思っている、ペルペンナはここで大層なことをやってのけた、最善の政治をやっても不満の徒は消えないのはいつの時代にも見られることです、奥方の無視に逆なでされて、ペルペンナがもしやして、...

ヴィリアト

殿、はっきりと言いなさい。私は殿を主君としたのですから、私は自分の意見がどうあろうと、従わねばなりません。一切の理屈の行き着くところはそうなのです。私が服従に馴れるために、その大切な英雄をお入れなさい。もし殿がペルペンナを恐れているなら、あなたの助けを貸してしまったこともいつまでも空しく悔やむのではないかと少なくとも同じくらい心配することです。

セルトリュス

奥方のお考えでは、．．

ヴィリアト

これだけ言えば殿には十分なはずです。私について言われていること、評判は分かっています。行きなさい、かの殿にお譲りなさい、推測などなさらぬよう．．

セルトリュス

私は他の人のために話してるのです、とはいえ、嗚呼、もし、奥方がご存じなら．．

ヴィリアト

殿、私が何を知らなければならないのですか？今の溜息はどんな秘密を隠しているのですか？

セルトリュス

溜息を二度も繰り返すなんて．．

ヴィリアト

止めないで、続けなさい、私は殿が思ってる以上に殿に従うつもりです。

第三場

ヴィリアト、タミル

タミル

殿の薄情なこと、私はとてもいたたまれません、奥方様．．

ヴィリアト

外見に騙されてはなりません、心の底では私を愛してるのですから。

タミル

まあ！それでは恋敵のために、よそよそしくなさっておられるとは．．

ヴィリアト

私に相手になって欲しいのです、それだけのことです。

タミル

奥方は物わかりがよすぎて、私には何のことやら．．

ヴィリアト

その恋敵と話しましょう、あそこに見えまし

た。

第四場

ヴィリアト、ペルペンナ、オフィド、タミル

ヴィリアト

ペルペンナ、私を愛しているとか、セルトリュスが言っておりました。その言葉を信じます。私はかの殿に全幅の信頼を置いているのですから。ですから、あなたの愛を認めましょう。ただ私の鬱いだ気分を晴らしてください、殿が女王にふさわしい理由は何なのでしょう？どんな資格で女王の気に入る、どのような魔力が働いて、いつか殿の愛が王冠で報われることになるのでしょうか？

ペルペンナ

心の籠もった愛、欠かすことのないお仕え、深い尊敬の念、身を粉にしての献身、いくばくかの結果が私の愛を証拠づけるなら．．

ヴィリアト

よろしい、王冠に身を献げるおつもりで？

ペルペンナ

私の全ての心遣い、私の一切の血、私の情愛、私の命を。

ヴィリアト

嫉妬しながら、王冠に仕えるなどと出来ることでしょうか？

ペルペンナ

嫉妬などと、女王．．

ヴィリアト

嫉妬と聞いても殿の胸は平気でした。王冠は愛のものではなく、国家に属するものです。私は野心家であり、女王としての自尊心から、他の女主人が私の目前で私自身の王位に上がり私の国々で私の優位に就くのを見守るのを見ていられません。セルトリュスはここを支配し、我が国全土に法を布き、私もそれには従って参りました。悔やむことは何もありません。セルトリュスはよく支配しました、かの殿を嘉された天に感謝します。私が嫉妬しているものが何か打ち明けますと、それはセルトリュスの妻の傍らで私がどんな地位を保てるかと言うことなのです。アリスティはセルトリュスの妻となろうとし、あの方が提供なさるもの、あるいは人々が

アリスティのためにすることは、アリスティの成功を疑わないものにしてあります。この放浪人、逃亡しては行く先々の地方を混乱させる者から我らの地方を解き放ちなさい。目障りな名うての美女を他の地方の誉れとそつとなさい。たくさんの国が美貌の君を匿うでしょう。

ペルペンナ

女王がどんな命令を下されようと、私には造作のないこと。ただ、セルトリユスがアリスティを娶らないとしても、別の婚姻の可能性が奥方には同じく困惑の種になるのでは。つまりは同じことです、他の女人にせよ、アリスティにせよ。...

ヴィリアト

止めましょう、ペルペンナ、この話は。今と、未来について準備をしましょう。状況に応じて、これには応じられるでしょう。時は偉大な師匠であり、それは多くのことを支配します。ともかく、私は嫉妬深く、あなたはその訳を言い当てました。私に仕えるおつもり？

ペルペンナ

つもりかですって？飛んで行きます。私の日々を捧げたくてたまらないのです。この取るに足りない奉公により私にいささかの好意ある眼差しが向けられ、こころが柔和に。...

ヴィリアト

お止めなさい。殿は急な願いをあまりに遠くまで運びなされる。確かに、そう言うたぐいの奉公は私の喜びとなるものです。でも、どんな報いが与えられるかは、どうか私にお任せのほどを。私は恩知らずではありませんし、私がどれほどのものを負ったかも知っております。これだけ言えば、初めてにしては十分です。失礼。

第五場

ペルペンナ、オフィド

オフィド

殿、担がれていることがお分かりになったでしょう。女王の心は全く別です。セルトリユスがそう言っていました。そして、殿の傍らで公然と恋敵を演じているのです。その間、女王は。...

ペルペンナ

まあ、そう悪くとな。女王に奉仕する手段

を開いてくれたのだから、わしはもう嬉しさのあまりあらん限りのことをするつもりだ。

オフィド

すると殿は、あの嫉み深い心が殿の意に反するためにのみ、殿を利用しようとしていること、生まれ出た恋心を断ち切って、かの恋敵を再び自分のところに戻そうとしていることが、お分かりにならないのですか？

ペルペンナ

構うものか、女王に仕えようではないか、その愛に適うのだ。力と復讐心はお互いに作用しあうものだ。何日間かは、我らに有利な希望にかけようではないか、仮にその結果がまずくてもだ。

オフィド

だが、殿。...

ペルペンナ

余計な話は慎もう。女王に仕えることを考えるのだ。もう議論はなしだ。ただ女王への奉仕だけがわしの心を占めている。城壁から、ポンペ一行が見える。そう言う知らせがあったのは知っていよう。迎えに行こう。セルトリユスがわしにこの務めを申し渡したのな。

第三幕

第一場

セルトリユス、ポンペ、供奉

セルトリユス

大殿、一体誰が休戦のお陰で私の栄光がこれほどまでに高まると思っただろうか？戦争は名声に多いな喝采をもたらすが、和平の内側でも大きく育つものだったのだ。実に、今でも我が目を疑っている。この城塞で偉大なポンペに出会えるとは、差し支えなければ、わしに身に過ぎた名誉を与えたのはどのような幸運なのか知りたいもので。

ポンペ

理由は二つある。ところで、殿、人払いを。遠慮なくものを言いたいので。

我らの党派の間にある敵愾心も、名誉の持つすべての権利を無にするわけではない。真の価値は最も激しい憎しみにも勝るものであるから、

美点は猛々しい敵からも尊敬の念を貢ぎ物として勝ち取る。それこそが槍も投げ槍も持たず、我が騎兵隊において無敵の軍を指図する怒れる眼差しを捨て置いて、これほど天下に聞こえた英雄にお近づきになりたいという熱意が、予がここであますことなく思い知った武勇に捧げようとするものなのです。

予は若く恐れを知らぬ武将だ。教え切れないほど勝利し、我が幸運は予の勇猛心を奮い立たせてしかるべきものだろう。だが、(率直な物言いは偉大な心にこそふさわしい) 余所で勝ち取った偉大な輝かしい勝利によって教えられた以上のことを、殿との戦いに敵わなかったことから予は学んだ。殿のされたこと、包囲、攻撃、時を得た撤退、巧みな野営、各々にその役を適切に割り当てることを目にして予は何をなさねばならないか肝に銘じた。殿の模範は熱意を持って取り入れれば予のためにもなる。殿を連れて国に帰れば、それはすばらしい贈り物となる。予は喜んでローマに行けるだろう、休戦によって、その暇が出来たのだから。これほど重要な和平を結ぶほんのわずかな望みさえ持てたら！幸運⁽¹³⁾なシルラの側で、殿のために何も出来ないというのか？また、殿の傍らで、万人のために何もできないのだろうか？

セルトリユス

殿が真のローマ精神をお持ちならば、必ずや私のために難儀を省いて下されるでしょう。まず、この込み入った事柄に入る前に、殿の丁寧なご挨拶に答えることをお許し頂きたい。殿が最高の地位に昇っても得られないような高い敬意を払われても私には何ら加わるものはない。殿の若年の武勲が勝ち取った勝利、我らの法が許す年齢の以前に手にした凱旋、願いが許される以前に得た威儀、それを見れば世界が殿にどれほどの尊敬を払っているか知れよう。この際領土の安定、国土の優位にいささかでも力を用いようとするなら、私の経験もそのためには役に立つこともある。戦争の技術には時には年齢が必要だからだ。時は大した働きをする。私の行動から殿が何らかの教えを引き出そうとされるなら、私の例はいつか殿の例に譲るだろう。わしが殿に教えたことを、殿が他の人々に教えることになるのだ。将来、私が死んだとき、私の用に仕えていたものは殿から学ぶことになり、殿が私からしたように。

幸運なシルラについては申すことは何もない。かの帝国を弱める方法は示した通り。山脈を渡るような教訓を付け加えることが出来るとすれ

ば、わしは殿の有名な退却を見習おう。奴と直接談判するために、チブル川⁽¹⁴⁾の岸で、短剣を持ってローマ人民のために奴と決闘する。

ポンペ

高踏な教訓は難しすぎます。また、殿には無用の労苦ともなりましょう。殿がそれを私に説明しようとされるなら、それをうまくやっつてのける技術まで教えて頂かなくては。

セルトリユス

だから、殿が正真正銘のローマ精神をお持ちなら、私の苦労を省くことが出来る。それは、すでに申し上げた。

ポンペ

同じ話を繰り返されるのは、独立不羈な精神には煩わしい。私としては、殿を尊敬するあまり、苦情を並べる話題からは断固として避けるよう強いられているのですから、込み入った話の意味をくみ取ろうとは思わない。

セルトリユス

このような模糊とした話を好まないことは承知です。お付きの者を払ったときそのように言われた。ところで、殿、我らしかいないのですから、それがしも遠慮なく言わせていただきたい。もしシルラがいなかった場合と同じ率直さを殿と分かち合いたい。

全土の支配者達を鉄鎖にかけようとする戦争の指導者を一体まっぴきローマ人と呼べましようか？この名は殿とシルラがいなかったならば、我らにふさわしいものであった。シルラのために、殿のために我らはローマ人の名を失った。殿こそ勇者達を軛にかけたのですぞ。王よりも秀でていたものが、今や奴隷にも劣る身。殿のあげた最高の手柄がもたらした栄光はかの者たちの大きな苦しみを増すばかり。彼らの逆境は殿の眩い手柄の結果なのだ。それでも、殿は真のローマ人と称するおつもりか？殿はこの名を先祖から受け継いだ。だが、その名が殿の誇りなら、その名に一層ふさわしい者となつてはどうか？

ポンペ

予は、いつの日か国家を立て直すことに全力を傾倒している限り十分その名にふさわしいと思っている。だが、殿は心を行為で判断されておられる。しばしば、双方は違うように見えるものだが。

二つの党派が国家を分裂しているとき、人は最善な方を、あるいは最悪な方をやみくもに選ぶものだ。ふとしたことあるいはやむない事情が、人をあちらこちらに追いたてる。正しい党派など知れないので、主人を選ぶのは我らの勝手気儘という次第だ。だが選んだ以上、もう抜けられない。予はマリウスの時代にシルラに仕えた。抗争を呼んだ凶運が少しでも続く限り、予はシルラに仕えるだろう。予にはかの殿の心中が読めないの、運のいいシルラがどんな策を練っているのか知らない。あまりにも行き過ぎることがあるなら、私さえ非難することもある。予は心を一体とすることなく、シルラに行動を貸している。予はかの幸運に身を委ねているが、我が願いは自由に向けられている。このことが予が地位に留まる理由なのだ。もし予がいなければ、その地位は不正と放恣に蹂躪されるだろう。シルラが死に、危険な権力が義務を知る連中の手に握られたら、その時予の目的は果たされ、殿も同様となる。

セルトリウス

しかし、それまでの間、殿は他人のように装って仕えることになる。我ら人間は一切を目に入る表面で判断するものだから、中身を見抜くのは神の業だ。我らは殿のやり方を心配しているのだ。ローマで一人の人間の支配に人民を馴れさせるのではなからうか、又、他人の権力の下でその人物のために活動するうち、殿の剛勇も空しくなるのではなからうか。

私は殿を尊敬しているから、殿が自由を栄光としていること、殿が密かに自由に願いを託していることを信じることはたやすい。だが、疑り深い精神で思い見れば、ローマ人が主人の支配を受け入れるよう力を貸してのではないかとも思えるのだ。いつかローマの支配者となれるかも知れないと言う希望に喜びを見出し、人民を圧迫し、殿もその一翼を担っている武力をもって、人民を輒に馴れさせようとしているのだ。人民が隷従の地位に甘んじるかどうか不安なので、シルラの陰に隠れて、ローマ人の動向を伺っているのではあるまいか？

ポンペ

そのような話の誤りは時が正すだろう。ところで、ここで目にするものは正当なのだろうか？ 今度は私が遠慮なく話すことをお認め頂きたい。殿の例が私には教訓にもなり、お許しにもなった。予も目に入ったことで判断し、内を見通すのは神に任せよう。当地でも一人の人間

の支配下に生きているのではなからうか？ 殿は、シルラがローマでしているように支配しているではないか？ 独裁者という名であれ、將軍という名であれ、構わない、それらの権力が同じであれば名称が違うからと言って物事が変わるわけではない。殿はシルラと同じように、支配している。支配者に憎まれるのが危険だということなら、殿に従わないのも安全とは言えまい。

私としては、いつか殿のようなご身分になったら、殿のようにおそらく振る舞うことであろう。それまでは、...

セルトリウス

その時まで、疑いなさるがよい。そして、わしをシルラにぴったりと似せて貰いたくはない。わしがここで支配を揮っているのは、元老院の命令によるものだ。わしの命令によって殺された者はいない。わが敵は公共の福利の敵ばかりだ。わしは彼らに正当な戦争を仕掛け、一人たりとも追放していない。わしの最高の権力は、誰にも開かれた避難所なのだ。もしそれがしに従っているとしても、それはわしへの親しみがあある限りにおいてだ。

ポンペ

殿の支配はそれだけに一層危ういのですぞ。人民に殿の徳を慕わせ、隷従させつつも人気をとる秘密を心得ており、殿の鎖に繋がれながらも自発的に服従していると思こんでいる、そして、愛情によって支配する権力を倒そうとするばかりに、却って自由は遅々として日の目を見ないことになる。

疑い深き心はこう思うものです。このような不愉快な事柄を調べ回るのは止しましょう、又、殿の開かれた避難所に逃げてきた追放人の集まりが元老院と言えるのかどうかも詮索はしない。それから、もう一つ、私がローマに喜びを持って帰る手だてではないのでしょうか？ かくも偉大な人物を同郷の者に返すことが出来れば、その嬉しさは極めつきのものとなろうものを。祖国の城壁を再見するくらい喜ばしいものはない。予の声を借りて殿に願っているもの、それはローマですぞ。

セルトリウス

貴公の主君の居るところ、その主君の乱心が国法となる所が？ 奴のなした追放で墓場に充ちた囲い場をもうローマなどと呼べはしない。それらの壁はかつては美しい運命が飾っていたが、今は牢獄の壁、更には墓場の壁に成り下がった。

余所で、創建期の力を持って生き返るために、ローマは偽のローマ人ときっぱりと手を切ったのだ。そして、それがしの周りに本当のローマ人の支えを得て、ローマはもはやローマにはあらず、予のいるところこそあるのだ。ともかく、お互い一致できることについて語ろう。名誉を持ってわれらに喜ばしい知らせを授けられる手段はただ一つしかない。我らが連合して、潜主を倒すことだ。ローマはこの画策に諸手をあげて賛同してくるだろう。こうして、祖国への愛を示そうではないか、祖国への愛は武勇の徒にあっては、偶像崇拜と言えるほど熱烈だ。そして、毎年貴公の腕と我が手が流すローマ人の血の洪水を儉約しようではないか。

ポンペ

その計画は、殿にとって栄光に輝くものだが、私には一片のこだわりもない行為とお思いですか？他では指揮を執る予が、殿に仕えられるでしょうか？

セルトリユス

それがしは指揮権に執る者ではない。それはわしが預かるだけとしよう。そして殿にお渡ししよう。何も私という人間が殿の臣下になろうというのではない。わしにはそうなるには高い誇りがある。ただ、この同盟で殿の副官という呼び方を頂ければよい。

ポンペ

そのような副官の頭は単に形だけの者に過ぎない。副官という名を持ちながら亡いはずの権威を保持しており、連中はただその影を譲ったに過ぎない。連中の気に入る次第のことをするのが後をついて行くとか、服従することになるのだ。もっとよく、もっと確実なやり方がある。シルラは、殿が望めば、独裁を放棄する。もしこの地に敵が居ないことが分かっていたら、既に自身で独裁を辞していただろう。武器を降ろしなさい、結果は予が請け合う。シルラの約束を取りつけて、こう申しているのだ。殿がローマ人なら、この機会を逃してはならない。

セルトリユス

そうした錯覚に目眩まされたりはせぬ。わしは暴君という者をよく知っている、そのやり方もだ。潜主が何を約束しようと、その本性は変わらない。殿を無理矢理に味方にするまでは、奴は殿を不逞の輩と見なしていた。...

ポンペ

私には、その言葉は死ぬほどつらい。率直に言おう、それは私を悲しみにくれさせたただ一つの事柄だった。予はアリスティを愛していた。シルラは私からかの女性を奪い去った。自らを叱責しては、我が心はまだ震え戦っている。シルラは私にたくさんの失ったものについてしきりに思い起こさせる。私はアリスティのために、殿に感謝を捧げる。殿、その偉大な心の気配りのお陰で、アリスティは当地で名誉ある保護を忝なくしている。

セルトリユス

不遇にある勇氣ある人を堂々と護るのは、寛容な者にとって些細な務めに過ぎない。従って、更なることをするつもりだ。奥方に伴侶を与えたい。

ポンペ

伴侶ですって！おう、なんとということを目にしたのか？それで、誰と？殿。

セルトリユス

それがし、

ポンペ

貴殿が！

殿、アリスティの心はあげて幼少以来私のものだ。こんな薄情でもってシルラの真似をしてはならない。私の傷心はもういたたまれないほど大きい、加えて最愛の者が他人の腕に抱かれる苦痛を見るとは。

セルトリユス

すべてはまだ殿のものだ。お出でなさい、奥方、わしがそなたの心にどんな強権を揮ったかを見せるために、そして、できることなら、全人類にそなたがわしと結婚するために、そなたに無理強いをしたかを示すために。

ポンペ

アリスティ！ああ、天よ！

セルトリユス

殿を奥方と残そう。奥方の心は殿に未だ忠実である。殿のものをお取りなさい、でなければ、もう嘆くではない。殿が拒んだ故、わしが利を得るからといって。

第二場

ポンペ、アリストイ

ポンペ

今、耳にしたのは本当なのか、奥方？そんなことがあり得ようか。...

アリストイ

本当です、殿。私の心はとても感じやすいのです。私が愛されているか、憎まれているかによって、私の方も愛したり、憎んだりします。私の憎しみ、私の愛を決めるのは名誉なのです。でも、名誉が私の愛の女王だからといって、憎しみについては必ずしもそうではありません。私には憎しみを思うようにはできないのです。私も時に憎しみに捕らわれますが、願うほどでなく、憎むべき程度にも達しません。

ポンペ

私に対しては、その憎しみはこの上なく大きい。憐憫の情によって酌量されなかったし、寛大な心で和らげようともなさらなかった。

アリストイ

憎しみ続けるのがどんなにつらいか、あなたはお分かりにならないのね？私の愛は、ただ消えなければならないから消えています、我にもなくあなたの愛を求めて再び生まれようとしているのです。あなたを目の前にして、私の怒りは揺らめき躓き、勢いを失い、あなたと話すにつれて失われていきます。まだ、殿は私を愛していただけるのでしょうか？

ポンペ

そなたを愛してるかですって？私は生きているのか、私はポンペなのかとお尋ねください。そなたの愛は私の命であり、私の命はそなたのものです。

アリストイ

執念深い怨恨の情よ、怨恨が生んだ陰気な子供達よ、我が栄光の敵よ、陰鬱な恨みがましい感情よ、我が心より立ち去れ、もうおまえ達の言葉を信じはしないぞ。われにどれほどの侮辱を与えたとしても、もう覚えてはいない。再婚などない、セルトリウスもない、われは偉大なポンペのもの。ポンペがまだわれを愛しているのだから、ポンペがその心をわれに返してくれるのだから、再び、かの殿を愛する。もうセルトリウスはない。殿、お答えください、とうとう私に返された胸の内を語ってください。セル

トリウスはない。まあ、なんということでしょう！私が何を言おうと、殿は口を閉じたまま。エミリもいない。

我が心に戻ってこい、執念深い怨念よ、名誉が生む誇り高い子供達よ、尊い憤怒よ、汝らこそわれは信じよう。ポンペの裏切りは私の憎しみがぐらつくのをもはや許しはしないだろう。ポンペは憎しみを頑ななものにした。来なさい、セルトリウス、ポンペは沈黙によって拒み、私の一切を殿に返したのです。この偉大な証人を盛大な結婚式に招待しましょう。余所に向けられたかの心は何ら気詰まりなこともないでしょう。結婚式に平気で参列しよう、この鈍さがシルラの所では寛大と言われるのです。

ポンペ

シルラがそちにした不法な行いは予をも痛ましめる。しかし、結局はそちを愛しているのだし、これ以上のことはできない。そなたは、かつて我が想いを寄せた相手であったのだから、苦情を言い、憎しみを吐いても構わない。でも誰のものになってもいけない。いつまでも我が妻で留まっていた欲しい。墓に行くまで、我が魂を自分のものにして貰いたい。シルラは一時の間しか生きない、もう老いぼれ、衰弱している。かの男の支配はまだ終わっていないとしても、遠からず終わるだろう。絶大な権力がシルラの負担になり、それを辞する用意をしている。セルトリウスにしたように、そなたにこのことをよく分かって貰いたいのだ。だから、奥方、他人の腕に飛び込んではいならない。嘆き、憎むがいい、しかし、その身を与えてはならない。もし予との結婚を望むなら、そなたの身は自由にしておきなさい。

アリストイ

では何でしょうか？殿は他人の腕に抱かれなかったとでも？

ポンペ

その通り、秘密を明かさねばならないので申すが、エミリは不承不承シルラに従ったのだ。あの潜主は別の男からエミリをもぎ取ったが、その心中にある聖なる絆まで切り取れはしなかった。エミリのお腹には愛の果実が宿っていたのだ。それは間もなく我が家で生まれようとしていた。このような次第で、シルラが予に命じた結婚は奴の眼を騙すだけのものだった。他方、愛するグラブリオンにすべてを捧げ、エミリは我が妻と見えながら、ただその名を取ったに過

ぎなかった。

アリストイ

そのただの名のみが私のような女にとってはすべてなのです。エミリが持つて偉大な名を私にお返しください。私は殿の優しさ、細やかな心配りを愛してました。でも、私はそのような愛着を越えているのです。我が命が絶ち切られても、ポンペの妻として先祖の間に戻るなら、また我が墓に刻まれた偉大な称号が私の身分を未来のものに示すなら、一切は歎びとなりましょう。それこそ我が栄光であり、歎びなのです。一瞬でもそれを失うことは、烈しい痛みなのです。私からそれをもぎ取ったシルラに復讐をなさい、あるいは誰かが私のために殿とシルラに復讐するか、婚姻によってそれに匹敵する尊称を私に授けるか、シルラが私を貶めた分だけ、私に名誉回復をもたらす殿を見つけることをお忍び下さい。殿以外の方を愛するからではありません。私の栄光の仇を討つために、伴侶が必要なのです。世に知られた輝かしい夫、その名前は...

ポンペ

愛するに飽きてはならないが、愛されるには飽きなさい。多分、我らは願ってる時に近づいていよう。その時は分け隔てたものを繋ぐことができよう。さらに大きな勇気を、もっと余裕を持ちなさい。シルラが死ぬか、その権力を手放すかを我慢強く待ちなさい...

アリストイ

シルラが死に、あるいは後悔するのを待つんですって！殿が忝なくも私に名誉を返されるとは！あの潜主が望むままに権力を握ったあげくそれを手放すまで、殿の心は氷のように冷たく、潜主は罰を受けず、私の恋敵が私の居場所を占領しているのを見ていると言うのですね？

ポンペ

シルラが全権を握ってる限り、私に何ができようか？

アリストイ

あなたの妻の逃亡にどこへでも付いて行くこと、あなたの軍団とともに妻も連れていくこと、我らの仲違いを平和に収めること。ヒスパニア以外、至る所で勝利した軍隊の先頭になぜ立とうとなさらないのですか？セルトリユスと殿が合流したら、潜主に何ができるでしょう？その

憤怒も無為ではありませんか？

ポンペ

僅かな間そう見えることが、自由になることではない、主人を変えることが鎖を断ち切ることでもない。セルトリユスはそなたにとって素晴らしい支えである。だが、私がそうすることは、セルトリユスの下に身をおくことだ。我らの軍旗を合わせることは、セルトリユスの支配を増大させることにしかならない。セルトリユスと組んだベルペンナを見ればよく分かつ。予にも主人がいる。しかし、ここまで届く命令は非常に遠くからやって来るので、それを受け取るときには反故同然になっている。予がいささかなりとも下手に出ているのは、真の権力を手にしたいためで、実のない表向きことに過ぎない。奉公するのもう僅かな間に過ぎまい。シルラがこれほど都合のいい変り方をしようとしているとき、いつの日にかローマに全面的な自由を取り返すために権威に執している予に向かってローマから立ち去れと命じ、ローマを他の一人の人間の支配にまかせて再び鎖に縛りつけることができようか？そんなことはないはずだ。予が信じるようにそなたが私を愛してる限り、そなたの愛と、予の栄光は調和できるし、時の変わりに慎重に備え、そなたの復讐をやり遂げて予は滅びないでいられるはずだ。

アリストイ

殿が私を愛したことがあったなら、それを未だ覚えておられるなら、私の栄光を私に返すのが筋というものではありませんか。もうこの話し合いを終える時が迫っています。殿、私を求めているのか、いないのか？仰ってください、殿の返事が私の運命を決めるのですから。私は今なお与えられた夫のものなののでしょうか？セルトリユスのものなののでしょうか？もう話し合いは尽くしました。私に殿との絆を戻すか、さもなくば、完全な自由をお与えください...

ポンペ

わかりました、奥方、セルトリユスとの婚姻を無に帰するには、征服者としてそれを破らなければならないから和平は破棄しなければならない。奥方は我が身を護るすべを知らなすぎるので、それを教えるにはそなたを征服しなければならない。

アリストイ

セルトリユスは勝つ術も、その戦利品を保つ

術も知ってます。

ポンペ

そなたを戦利品として維持するためには、多くの死者を出すだろう。この戦利品はどんな妥協にも応じようとしなないのだから、予が死なない限り、何物もその安全を脅かすことはできない。そうだ、神々に誓って言おう、セルトリュスがそなたを手に入れようとしたら、予が死なない限り何物も奴の滅亡を止められるものはない。おそらくは、我ら二人とも互いに刺し合って、そなたが我らに何を強いたか、そなたに教えることになるう。

アリストイ

私はさほど重要な者ではありません。他の思いが復讐の熱意を消してしまうでしょう。権勢を強めたいという野心から、殿は他に関心を向け、よりよい運命を開こうとなさるでしょう。シルラに奉公し、そのエミリを愛し、イタリア中に尊敬の念を広め、ローマにいつかその自由を返そうとする意思は、その矛先をどこか別の方向に変えることでしょう。とりわけ、権勢を握った者に与えられる好き放題に夫や妻を取り替える特権は、世界の果てにまで誇示してその例をあまたの地方に示す値打ちがあります。

ポンペ

それはあまりの言い草、奥方、予は再び誓おう...

アリストイ

殿、真実に侮辱が入り込むものでしょうか？

ポンペ

予がそなたの夫であることを忘れていなさる。

アリストイ

その呼び名が殿の気に入るなら、私は殿のものです。私の手をお取りください。

ポンペ

それを私のものになさってください、奥方。

アリストイ

ローマに別の妻をお持ちなのにはですか？再婚によって私の名誉を汚したのにはですか？この一瞬が過ぎ、殿が失せた後、殿が破った約束を私が守るようなら、殿が誓いをたてた神々よ、我を罰するがいい。

ポンペ

一体何をなさるおつもりで？

アリストイ

殿が教えられたことを。

ポンペ

これほどの愛を消すとは！

アリストイ

殿自身そうなさった。

ポンペ

勝利すれば愛も再生する。

アリストイ

私の憎しみが微々たるものであっても、勝利は憎しみを成長させる。

ポンペ

私を憎むことができるので？

アリストイ

それが私の願いのすべてです。

ポンペ

では、暫くお暇を。

アリストイ

さらば、とこしえに。

第4幕

第1場

セルトリュス、タミル

セルトリュス

女王に拝謁が叶うかね？

タミル

女王がやって来るまでの間、殿とお話しよう命じられました。もう暫く一人でいたいよううで。

セルトリュス

女王の気持ちがどちらの方に傾いているか教えてはくれぬか？ペルペンナの望みはどのくらいあるだろうか？

タミル

打ち明けたお話はあまり私になさらない方で。敢えてうがちますと、殿の手から差し出されたものなら、女王のつれなさを解消するに造作はないでしょう。殿は女王に全権を持っておいでです。

セルトリユス

いや、わしのやれることは僅かなものだ。わしの不幸な運命が女王を動かして、我が求婚を受け入れようものならば、いやもつとはっきりと言おう、わしには過ぎたことであり、僅かな報いでもあり、あいだはないのだ。

タミル

わが恋を焚きつけることで、大いに殿の気に入ってると思っています。

セルトリユス

わしの気に入る？

タミル

そうです、でも、殿、なぜそのように驚くのです？女王を蔑ろにしていたお心が何に怯えておられるのです？

セルトリユス

女王にお会いした途端我が胸を強く打ちつけた高鳴る恋心を蔑ろなどと呼んではならない。

タミル

殿の想いに似た強い打撃はありません。もしそれが他の女人への気遣のためでしかないのなら、そのように打ちのめされたお方が礼儀正しい振舞いに及ぶよりも、僅かながらも顔を赤らめたいものです。

セルトリユス

漏れ出た溜息が一瞬にしてふいにしてしまうようなものは何も洩れはしなかった。新しい欲求に過敏な女王は私の理屈はよく聞いたが、溜息は聞かなかった。

タミル

殿、ローマ人が、英雄が溜息を吐くときには、それが何を意味するのか我々にはよく分からないものです。殿がもっと明瞭に仰ったなら、私が殿の意を伝え申し上げましょう。この地方では、ローマ人は野蛮と名づけておりますが、たった一つの溜息が時には愛の告白となるのです。しかし、栄光こそ殿の情熱の一切ですので、このような繊細な徴には頓着されないので。ロ

ーマの偉大な武将にとってはあまりにも無価値な欲求。．．

セルトリユス

ローマ人だからといって、わしはやはり人間なのですぞ。わしは恋している、おそらく今までの誰よりも激しく。この年にかかわらず、わしの心は燃え立っている。わしは自分を抑えられると思っていた。だがどのようにしようと、全力で奮い立とうと、自分の弱さを知るばかりだ。政治の仲間、友情で結ばれた仲間は、わしを憐れむべき状況に投げ入れたが、それを思い起こすと耐えがたい苦しみだ。私の定まらない人生は女王に期待するかすかな望みにかかっている。もし、にもかかわらず。．．

タミル

女王は親切な方です。でも、その心は激しく猛り立っています。殿が包み隠さず申すよう命じられるなら、殿は希望を持てます、でも恐れなければなりません。ぐずぐずしてはなりません。何事もおろそかにしないように。女王のお心はまだしっかりとしたものではないはずです。お見えになりました。私の意見をよくお守りください。特に、女王が私を疑ったりしないよう十分ご注意を。

第二場

セルトリユス、ヴィリアト、タミル

ヴィリアト

アリスティの計画は挫け、ポンペはかの聞こえた美貌のお方を逃したとか、そうなのですか、殿？

セルトリユス

まことにそうなのです、奥方。アリスティを棄てたと言っても、心中では愛しています。そして、アリスティがわしと結婚するようなことがあると、明日にも和平を破ると言いました。

ヴィリアト

脅されても、殿は泰然としておられるようで？

セルトリユス

実は、わしをもっとも困惑させるのはその事ではないのです。ところで、そなた、ペルペンナについてどのような決心をなさいました？

ヴィリアト

絶対の権力に滞りなく従うこと。ぼかげた申し込みに殿の心が揺れても、ポンペのお払い箱を厄介払いしようとなさるなら、ただ殿の決断次第で、明日にでも二組の婚姻が我らの絆を固めることになりましょう。

セルトリュス

女王は明日にでも...

ヴィリアト

今にでも、先延ばすのは服従とはなりません。緩みのない服従とは、一刻の遅れも許さないことに自尊をおくものです。

セルトリュス

私の願いとあれば女王の意に添わないこともあるのをお許しを。

ヴィリアト

逆らえない命令ならば、どんな屑でも受け入れましょう。我が意のままにできる方の願いは命令と同じです。その上、ペルペンナは私を熱烈に愛している。かの血は多くの婚姻、多くの王族に由来しており、その保持している大きな権力は、殿の気に入ったがために存続しているに過ぎない形だけの王位すべてを合わせたものに匹敵する。

セルトリュス

女王の決定のおかげで、わしはもう死にさえすればよい。女王自身の口からこの命令を受けたのだ。わしが今や受け入れなければならない変えようのない命令だ。ローマ人を愛するからには、女王はその殿が指揮権を握ることを求めている。ペルペンナはわしが死なない限り指揮権を掌中にできないのであるから、女王の王位を満たすためには、我が命が必要な訳だ。奴と結婚するとは、女王、陣営において、あなたの胸中において、我が場所を奴に譲ることなのです。このような幸福に恵まれたからには、ペルペンナが軍において、あなたのお心において席を占めることは、それはあまりにも当然なことといわねばならない。それがしは不平を漏らすことなく従いましょう、そして我が命がすぐに...

ヴィリアト

この命令で殿から王位が奪われる前に、友と言うより恋敵から来るような気まぐれな変わり

様について殿に苦情を申しあげてもよろしいでしょうか？殿は私がペルペンナに示した好意をあまりに性急に、あまりに真剣なものにお取りになった！私が用意している結婚は殿には苦痛なのでは！あたかも殿は私を愛していたかのように、お話をされた！

セルトリュス

愛という言葉に耳にしては、女王の足下で死ぬことをお許しください。私の幸福をあなた様のために喜んで捧げます。ただ貴女様が他人の腕に抱かれるのを見ることはできません。それがしが聞きはぐれた愛がそれがしをどんな窮地に追い込んだか十分お分かりでしょう。

これほどの美貌なら許されることとはいえ、愛されるに値しない歳で愛するのは恥だと思っておりました。我が白髪を見てはその想いを禁じていたのです。そして、長らく、女王の無視に甘んじていました。しかし、女王の心に他の考えのあることを後で知ったのです。その考えの上に、たちまち私の願いが建てられました。そなたの選択が愛によって導かれていないことを知って、女王の王達よりも自分に多くの希望があると思ったのです。私は告白しようとしていました。アリストティの申し込みもなかったのです。それがしの情熱が緩んだのではありません。公の幸福のためにすべてを投げ出す偉大な精神がいることを少しも疑っておりませんでした。ペルペンナの愛とこの考えが結びつきました。その後のこと、私のこころにない理屈はご存じでしょう。それがしは信じ込んでいたのです。この愛を断念する苦しみもいくつかの溜息を洩らすにとどまる。雅量のある友人、寛大な首領との評判を得れば慰められよう。しかし、運命の一撃を前にして、私の苦悩は自分の力以上のことを約束してしまったことを明かしたのです。従って、女王、それがしは降参します。我が命を思うようにしてください。再び、それをあなたに捧げます。ペルペンナを愛しておられますか？

ヴィリアト

殿に服従することは心得ておりますが、愛するとか、憎むとかについては心得がございません。先ほど殿が私の心中に分け持っているものと言われたのは、私の誇りに由来するもので、情熱に由来するものではありません。そのようなものはペルペンナに持っておりませんし、かつて殿に持ったこともございません。私が欲しいのは愛する方ではなく、配偶者なのです。そ

れも武勇に秀でた武将、私が生まれつき保ってきた王位を高く掲げ、ヒスパニアの有力な支えとなり、我との間に真の王を残すようなお方なのです。

そのお方こそ殿に見出したのです、私を袖にしてかの恋に憑かれた男のために好意を払うという迂闊さえなければ、そして、われが殿をあまたの王よりも高くおいたとき、殿の棄てた女がその恋敵の連れ合いに値するという愚かな行為さえなかったなら。でもそれは忘れましょう、殿を許します。私を愛しておいでで？

セルトリュス

女王を娶るなどと言う身の程知らずなことができましようか？

ヴィリアト

娶りなさい、同意します、殿、明日にも、ペルペンナに代わって私と式をあげるのです。

セルトリュス

ただ自己満足に耽るだけで他に何も知らない、自分の幸福に充たされて女王の威厳に配慮を払ったりしない遊び心に満ちた恋の方がなんと喜ばしいことか！それがしが女王に言ったかも知れないことを忘れてくださったのだから、私も又、女王の国を強大にする、女王の偉大な計画は支配することであることを忘れてもよろしいでしょうか？

ヴィリアト

殿、あなたを赦すとは、殿と私を遠ざけることなのですか？

セルトリュス

お願いです、女王！今こそ目の眩むようなお赦しのとき！

ヴィリアト

その目の眩む輝やかしさを、ヴィリアトは求めているのです。

セルトリュス

事を急いではずべてをし損じますぞ、ペルペンナは情熱に駆られて謀反に奔るでしょう。もう少し時を与えてペルペンナを宥め、他の美女を奴が愛するのを待ちなさい。アリストティの友人達が、何度も何度も約束を与えていつまでも引き延ばし、助けてくれる。連中を興奮させている希望を一切断つたら、連中を絶望させ、ポンペに一息つかせることになります。ポンペの

揺らめく心は疑いから疑いと彷徨い、アリストティを我らの側に確保できるのです。これらの支持を失ったら、ローマに復讐できるでしょうか？ローマを悩める内乱から解放できるでしょうか？また、その利益を何の躊躇いもなく捨て去ったなら...

ヴィリアト

構うものですか、私にとっては、ローマが苦しもうと苦しまいと何だというのですか？私がローマの悪行の汚名を消し去ったとき、私には報いとしてローマの友人の名が与えられるでしょう。殿は執政官として私を支配することになり、御自身で私を他の王達と同列に扱うのではありませんか？殿が私を愛されるなら、我らの広い海、山々が、我らのヒスパニアが殿の野望に限りをつけるはずです。我らはここで十分に華美な運命を求めることができ、アヴァンタン⁽¹⁵⁾の麓に余計な栄光を求めに行く必要はないはずです。ル・タジュ⁽¹⁶⁾を解放しましょう、チブル⁽¹⁷⁾は放っておきましょう。全世界が自由なら、自由は何物でもありません。でも、世界中が軛に縛られ、鎖に喘いでいるとき自由は素晴らしいものです。この特権を奴隷のローヌ⁽¹⁸⁾、囚われのローマの眼にひけらかしてやりましょう、そして、打ちのめされた民族から、運命が勇敢なものに与える尊敬が消し去るのは気持ちのよいものです。偉大なペルペンナについては、いかに恐るべきものであるとしても、かの殿を牛耳やすくする手筈は私にお任せください。私は偉大な心が過ちを犯さないようにするすべを心得ております。

セルトリュス

そうしてどんな果実を摘むお考えかな？わしも奥方同様知っている。そして、この不意の命令が我らの頭上にどんな嵐を巻き起こすかも分かっている。反逆の徒を作るのは止めましょう、我らのよき運命と仲違いするのも。ローマはそうでなくとも、女王との結婚に同意する前に多くの難儀を突きつけてくる。ローマが我らに栄光と自由を負わない限り、その頑固さを壊めることは決してできない。

ヴィリアト

更に言いましょう、殿、結婚に同意するどころか、殿に憎しみを持つでしょう。鎮まらない怒り、頑くかな自尊心、それ故に、殿をここに留めたいのです。私がローマでなすべきことがあるでしょうか？なぜ、お願いですから...

セルトリュス

だが、我らローマ人は、奥方、皆祖国が好きなのです。ローマ人が労苦をものともしないのはただ一つの喜び、早く勝利して祖国を再び目にするにすることにあるのです。

ヴィリアト

皆のものをル・タジュのほとりに縛りつけるには、ローマを隷従の中に放っておけばよいのです。ただ一つの選択、潜主か王しか選べない限り、あの輩は喜んで、殿と私の支配の下で生きます。

セルトリュス

彼らはどちらにも似たような嫌悪を覚える、女王の夫に従いはしまい。

ヴィリアト

潜主も王も持たない政府のある好きな地方に行くがいい。我らヒスパニア人は殿の兵術に教えられて、ローマ人がいなくても、残されたことはやってのけます。

シルラを滅ぼすのは私の本意ではない。私の誇らかな願いに比べれば、ローマは色褪せて見える。私の求める結婚は離婚が当たり前の都市では沸き立つようなものではない。我が王位の高みからは、一年だけ支配者でその後は何物でもないところなぞ魅力がない。しまいには申し上げるが、私は殿のためにローマ以上のことをした。ローマは殿を追放した、私は殿を庇護した。ローマが殿から奪おうとした命を私は護った。王冠をお取りください、それに仕えるのです。前代未聞のことを試みるのは素晴らしい。たとえその結果から、その意志が裏切られたとしても、私は偉大なローマ人を偉大な王にしたいのです。殿、ここで滅びるとしても、私と共に滅びるのです。愛する者に仕えながら死ぬのは光栄の至りです。

セルトリュス

即座に物事を進め、無用にも、不平不満の徒をつくるとは！一層長く幸福でいるためには幸福になるのはもっと後でよいではありませんか。一つか二つの勝利が何かの巧妙さと組合わさっても...

ヴィリアト

ご存じのように、私は愛に急かされているではありません。殿、ともかく、はっきりと言

わねばなりません。私はこのような用心深さに飽きてきたのです。私は女王です、王冠を被る者です。かような者が何か言うとき、あれこれと詮議するのは好みません。私は自分について考えようと思います、殿はご自身について考えなさればよい。

セルトリュス

あなたが不当な怒りに耳を貸したとしたら...

ヴィリアト

怒りなどありません、殿。私の不安は私の運命がどうなるか定まらないところから来るのです。私がどう運命を決すべきか、明日殿は私に教えてください。その間、殿を相談する相手と一緒にさせましょう。

第三場

セルトリュス、ペルペンナ、オフィド

ペルペンナ (オフィドに)

この野郎！誰が女王を隠せるものか？

オフィド (ペルペンナに)

かの殿が心に悩めることを持っているようで、我らが近づくと、すっかり狼狽の体で。

セルトリュス

ポンペについてここではなんと噂されているかな？門から遠く離れたところで会ったのだろうか？

ペルペンナ

城壁の近くでは、護衛を従えておりましたので、ポンペを遠ざけるのは御免被りました。ところで、殿の助けを大いに必要としているのです。かの表情にはすこぶる高い自尊心が現れ...

セルトリュス

我らは何の約束もしていない、それはわしの罪ではない。貴公も知るように...

ペルペンナ

このような話し合いでは...

セルトリュス

わしは武器を棄てるべきだとは思わなかった。

まだ、その時ではない。

ペルペンナ

どうか、お続けください。まだ友情が倦むときではありません。

セルトリユス

貴公の利益がわしのと同じく、わしを止めたのだ。もしわしが不利な状況にあるとしたら、貴公もよい状況にあるとは言えないだろう。

ペルペンナ

実に、殿の支持がなければ、私は大変惨めな者でありましょう。でも、殿については何ら心配の種はありません。

セルトリユス

わしが人のうらやむ一番目の人間になろうとも、次には、運命は貴公の上に恵みを与えよう。潜主はわしの次には、他の誰よりも貴公を恐れている。わしの首が飛べば、貴公のも危うくなる。我ら二人にとっては一年以上待つのがよいだろう。

ペルペンナ

何故そんなお話を、殿、首とか、潜主とか？

セルトリユス

シルラについて言っているのだ。貴公は奴を知るべきだ。

ペルペンナ

私は女王が生み出した恋について語っていたのです。

セルトリユス

我らの心は同じように宙に浮いていたのだ。わしの関心はあげて和平が破れはしないかということにあった、わしは貴公に町中でどんな噂が流れているのか尋ねたのだ。ポンペとわしの話し合いは実りがなかった。おまえは知っているのか、オフィド？

オフィド

何も包み隠さず申しますと、かの供奉の者たちは素行が悪く、人々の間に無謀な不満が起きはしないかと案じております。シルラはその独裁を離れたと言われております。殿一人が平和の到来を拒み、終わることのない戦争をしようとしているとも。既に、我らの兵士の心もポンペに傾いて、ポンペについて語るに喜びの表情

が出る有様です。もしこのデマが兵営の中にまで広まったら、危険な毒をまき散らすことになりましょう。

セルトリユス

間違いが広まる前に、その流れを断ち切ろう。我らの配慮でその奸計をつぶしてしまおう。もっと大きな危険からも、天はそれがしを護ったのだ。

ペルペンナ

提案を受け入れてもよいのではないのでしょうか、殿？その提案は恥ずべきものと、あるいは信用できないものとお考えなのでは？

セルトリユス

シルラは実際その独裁を手放すかもしれない。同じく、意のままに執政官を任ずることもできる。紫の衣を纏った奴隷はシルラの指図に従って行動する。シルラの恐ろしい指図を恐れることがなくなった暁には、卑劣な臣下達の命令によって滅びることになるのだ。わしの言うことをよく聞け、貴公たち二人やわしのようなものにとって、信頼を寄せすぎると危険なことではない。シルラは政略から兵士達には決して罰しないと言う策をとった。しかし、シンナ⁽¹⁹⁾、カルボン⁽²⁰⁾、マリウスの息子⁽²¹⁾については、首を要求しすべてを殺害した。それがしについては、陣営の者たちは噂を聞いてわしから離れていっている、我が身一つしか残っていない始末だ。シルラが生きてる間、執政官職を手にしようと出発するより早く、どこか名も知れぬ土地で自害するだろう。貴公は、...

ペルペンナ

私の想いは受け入れられないのでしょうか？あの方を愛するのは、恋するのは無益なのではないでしょうか？

セルトリユス

女王が消えたことを見れば、わしが話すよりも一目瞭然だろう。

ペルペンナ

その意味は明らかです、殿、終わりまでお話を。ご存じのことは何も隠されないよう、殿は私に徒な望みを与えられたのでしょうか？

セルトリユス

違う、わしは女王をそなたに譲った。貴公との約束も守る。わしは奥方を愛している。わし

の想いにかかわらず、貴公に譲るのだ。この譲渡が女王の賛同を得られないのではないのか、我らの上に容赦のない憎しみを引きつけはしまいか、心配でならない。貴公にはどう言えいいのか？ヒスパニアには他にもたくさんの女王がいる。わしが貴公のためにしていることを、貴公がわしにしてくれたならば、より幸ある運命が貴公を訪れるのではあるまいか。ヴァセアン⁽²²⁾の女王、イレルジェット⁽²³⁾の女王は、貴公の想いを一層満足させるだろう。奥方も熱心に貴公のために尽力されるだろう。

ペルペンナ

殿は奥方を私にくださると約束された、そして、今度は私から奪い取ろうとなさる！

セルトリュス

わしの約束、女王を貴公に譲ると言っても、女王の野心が私個人と結びついているのだから何になるというのだ？この結びつきの理由は知っていよう。先ほど内々に話したとおりで。もう一度、同じく内密の話をしよう。貴公の愛情を少し抑えるのだ。わしは自分の愛を制したし、今でもそうする用意は出来ている。我が党の利益を優先すると、頑固な女王を苛立たせることになる。女王は配偶者の選択に運命を賭けているし、その援助は十年以上我らの同士よりも我らを支えてくれたではないか？

ペルペンナ

我々にとって女王は邪魔な存在とっておられるので？

セルトリュス

いや、女王は我らを少しも破滅できない。ただ貴公がわしを約束に縛りつけるなら、明日から我らを敵と扱うだろう。連中の陣営はあまりに近くにあり、ここでは不満が渦巻いている。この状況で何を恐れるべきか、どんな即効薬を用いられるか、女王を腹立たせればどんな結果になるか考えるがいい。

ペルペンナ

自分にうち勝つのは私の領分であり、理性の命ずるところでもある。ただこんなに遠大な計略に我が胸は震え．．．

セルトリュス

無理な抑制はいらない、たとえ我が命を賭けようと、愛してしようと、約束は守る。

ペルペンナ

殿の約束もヴィリアトの承認がなければ空約束では．．．

セルトリュス

奥方の方については、貴公に希望を持たせるようなことは何も言うことができない。

ペルペンナ

それでは自分を抑えなければならない、その決心はついている。そうだ、自分の欲求すべてにわたって、私は紛れなく力を揮っている。殿の例に従い、この日、それらの主人となるつもりだ。あまりに大きく育つままにしておいた愛にかかわらず、殿は女王に言うがいい．．．

セルトリュス

それでは、言ってよいのかね？

ペルペンナ

殿、まだ何も言ってはならない、明日、よく考えてみる。しかしながら、女王は怒り猛って、今夜にも陰謀を巡らすかもしれない。殿は言いたいことを女王に言えばよい。私は、殿が私のために決めたことに従うことにしよう。

セルトリュス

殿を賞賛するとともに、憐憫も感じる。

ペルペンナ

私の心は打ちひしがれております！

セルトリュス

女王の傷心を分け合おうと思う。しばらくの暇乞いを、女王の悲しみを慰めるためにしばし中へ入ろう。宴会の時に貴公の部屋に行こう。

第四場

ペルペンナ、オフィド

オフィド

あの親しい主人は殿のために数々の驚異をやったのける。殿の恋心は例のない好意で迎えられる。女王の名一つだけで、本意がなく、殿からすべてを奪い取った。女王はセルトリュスが口を開くやすぐに退出した。女王の殿への愛に値するには、殿はどんな奉公をすれば望みを持てるのか？そして、何時になったら女王に目障りなあゝの有名な美女をここから追い出せるのか？女王は恩知らずではない、女王が自らに

服従させるために発する掟はたいしたことを約束しない。でも、どんな褒美が与えられるかは女王に任せるがいい、そして躊躇うことなく、女王の命令を実行するよう走り回るので。殿は何も仰りませんか？どうか、私に明かしてください、宴会がどのように執り行われるよう決心されたのか。殿は忠誠心を隠しておいでなのか？そして、殿の欲するところ、...

ペルペンナ

それについて決めるため、私の部屋に行こう。

第五幕

第一場

アリストティ、ヴィリアト

アリストティ

そう、奥方。私もあなたと同様ローマの敵なのです。女王は偉大を好み、私は恥辱を憎む。私は復讐を求め、あなたは権力を求めている。お互いに胸を開いてあなたの権力と私の復讐を一致させなければ、あなたは私を滅ぼし、私はあなたを弱める。私はポンペを奪われた、ポンペ、忠実に私を守ろうとしなかった恩知らずに挑戦するために、私はポンペより抜け出た、あるいは匹敵する配偶者を探している。あなたの恋敵になろうとは少しも思っていない。そもそもローマ人に女王が求婚の手を差し伸べるなど、また、ローマ魂に溢れた英雄が女王と結婚してその名に背くなど、前もって知れようはずがなかった。私は、セルトリウスの生まれとあなたの威信を思えば、ともに反発しあい、二人の誇りが互いを別れさすだろうと思っていた。そのうち、セルトリウスが結婚に同意し、この日の選択に逆らっても無用だという事を耳にした。というのは、明日、セルトリウスが王冠の輝きに飾られなければ、女王は自分の国と党との縁を切ろうとしているからです。

私は我が方の力を増すことだけを目的としているので、どこでもシルラの敵を作ろうとしているとき、このような分裂をもたらすシルラのすべての仲間よりシルラの助けになることをするなんて、たいそう腹立たしくなりません。お話をさってください、あなたが私がどんな希望を持っているか思ったにせよ、あなたがセルトリウスとの結婚を望むなら、私は我が願いを取り下げます。他の残っている、より正当でよ

り喜ばしい願いがあるために、セルトリウスがあなたのものになるのを苦痛なく忍ぶことができるでしょう。私の心は奪い取られたという怨みを常にポンペのためなら棄てるつもりです。ポンペは愛の故に私を裏切るのに困難を感じましたので、私は復讐を誓ったものの、ポンペを憎むことはできませんでした。私が何も隠さなかったように、包み隠さずお話しください。

ヴィリアト

ヴィリアトもまたあなたに率直にならねばなりません。それにしても、あなたに隠し事などできないほど、よく事情をご存じだ。私はわざわざセルトリウスをアフリカから呼びました、横暴な権力から私の国々を護るためにです。私の隣国が征服されるのを見て、私はセルトリウスがいなくては、我が王達なぞシルラには役立たずの支えに過ぎないと思ったのです。1艘の船であの偉大な英雄は上陸しました。そして私の部下とともに、戦争を始めたのです。私は駐屯地も船着き場も殿の手に渡し、王杖と財宝を預けました。それ以来勝利を知ったのです、勝利は日に日に殿の力と栄光を増していきました。我が王達も桎梏に繋がれ、ローマ人の迫害に曝されるのに倦み、あらゆる地方からセルトリウスのもとに馳せ参じたのです。遂には我が幸運の軍を率先してローマ人をピレネ山麓にまで追いつめたのです。セルトリウスが我が眼にする地位に上がってからは、私にふさわしい大殿としか思えなくなりました。殿の栄光は私の成果でもあると思い、他の女人がその栄光を奪うくらいなら私は死にましよう。私の臣下達は支配の術を知る血筋のよい君主を与えるのに十分値します。その者どもは、ローマの世界の潜主に抵抗でき、我らのヒスパニアを勝利の月桂樹で飾り立てて、いつの日にかポー川⁽²⁴⁾がその侵攻を恐れ、チブル川の岸辺さえ震えるようになるのです。

アリストティ

あなたの計画は雄大だ、しかし、セルトリウスは何を望んでいるのだろうか、...

ヴィリアト

あなたが私に言い聞かせようとしている理屈を、セルトリウスから聞きました。私に願いを持たせた栄えある結婚について沈黙し、遅らせる方がよいだろう。今日、かの偉人に提案された和平はローマへの道に門を開くことになりまう。殿がローマに戻るのには、私にとってセルト

リュスを失うことなのです。私は結婚によって殿をローマから追いたしたいのです。私の考えを明かすのが危険であるとしても、確実に滅びるよりも危険の方がましです。あなた方すべての追放者が離ればなれになっても、彼らの助けがなくても、我らはよき運命の支持を得られるでしょう。私の人民はローマの規律によって戦争に馴れましたが、支配欲に動かされるローマ人の心は決して受け入れないでしょう。戦い、打ち負かし、勝利するのが唯一の関心なのはローマ人なのです。セルトリウスが先頭に立ち軍を進める限り、彼らは恐れることなく征服から征服へと歩を進めるでしょう、このような偉大な例に相応に従うならば、．．．ところで、あの見知らぬローマ人は我らに何を求めているのか？

第二場

アリストティ、ヴィリアト、アルカス

アリストティ

女王、アルカスです、私の兄弟の解放奴隷、あれがここにやってくるとは何かがある。話さない、アルカス、

アルカス

この手紙を読めば、私よりもよく事の成り行きを説明するでしょう、私もまだ信じられないくらいです。

アリストティ（読む）

親愛なる妹御よ

汝の喜びのために至急知らせ申そう、我らの苦難、そちの苦痛が間もなく本当に終わろうとしている。シルラは自分のなしたことについて説明しようとして、飾り鉞⁽²⁵⁾も飾り斧⁽²⁶⁾も持たずに、公然と市中に姿を見させている。

シルラは元老院の中でその権力を辞した。ポンペがそなたにいささかでも情を残しているのなら、ポンペの再婚はたった今破れた。エミリは産褥の中で死んだ。シルラ自身、多くの憎悪を鎮めるために、大変親しかった愛がもとの形式に戻ること、汝が結婚によってはじめの絆に戻ることに、そして、ローマに自由を戻すことに同意した。

クインツス アリスチウス

私に過酷な運命を課すのに天も飽きたのだ。こんな幸運はおまえと同様、私にも信じがたい。

ポンペの陣営に走り行きなさい、そして、言うのです、アルカス、．．．

アルカス

大殿はもう知っておられます。そして、ローマへとって返しました。シルラから重大な政変についての手紙を殿に渡すよう指図を受けて来たところ、ここから二千哩⁽²⁷⁾のところで大殿に会うことができました。

アリストティ

どんな愛を、どんな歓びを殿はお示しになられたのか？なんといい、何をなされたか？

アルカス

奥方の経験から大殿の性急さはお分かりなさいましょう。ところが、愛の感激の故、あなた様の方へ呼び戻され、陣営には戻れなくなったのです。この大きな出来事のため陣営の必要とする命令は陣営に戻るまで止められることになりました。大殿は私のすぐ後に来ます。私を先に行かし、奥方がよもや思いもしなかった出来事を告げるようにしたのです。

アリストティ

あなたも同じくお喜びになる理由があります。奥方には恐れも、恋敵もなくなったのですから。

ヴィリアト

あなたについては何もなくなりました、それは疑いないことです。しかし、私にはもう一人の敵、もっと恐るべき敵が残っているのです。ローマ、かの英雄が自分よりも愛するもの、確かに王位よりも好むもの、もしこの愛に反して、．．．

第三場

ヴィリアト、アリストティ、タミル、アルカス

タミル

女王様！

ヴィリアト

どうしたのだね、タミル、何故そんなしおれた顔をしているの？おまえの涙は何を語っているのだろうか？

タミル

女王は破滅しました、女王を護ったあの腕も、．．．

ヴィリアト
セルトリユスが？

タミル
あの偉大なセルトリユス。．．

ヴィリアト
最後までおっしゃい。

タミル
女王、セルトリユスはもう生きてはおりません。

ヴィリアト
もう生きてはいないですって？なんということ！おまえは誰に聞いたのだね、タミル？

タミル
殿を殺した者たちが、誇り顔にそう言っております。あの残虐なものたちが、猛り狂って、不実な者の命令によって殿の運命を絶ったのです。殿の血に染まって皆町中を走り回り、兵士達と愚かな人民を立ち上がらせ、連中によって将軍にペルペンナが推戴されたことは運命の一撃がどこから来たのかたでもう明白に示すだけです。

ヴィリアト
ペルペンナは私に一切を明かしてくれた、張本人も、その理由も。この殺害によって私を意のままにしようとする。征服しようとしているのは、私の王位、私の身。私の正しい選択がセルトリユスを滅ぼすことになった。奥方、殿が死に、この緊急事態の最中で、私から溜息や涙が出ると思ってはくださるな。それは痛ましく深い傷に対する素早く高貴な傲岸が侮蔑するまやかしなのです。涙する者は苦痛を和らげ、溜息する者は苦痛を散らします。王位にふさわしい魂にはもっと誇りが要りようなのです。私の苦痛は殿の復讐の計らいに専心して。．．

アリストティ
奥方は危険の最中にあって盲目になっておられます。逃げることを考えるのです。

タミル
もう時間はありません、オフィドが宮殿の門を不実者のために守り固め、女王の牢獄にしてしまい、ペルペンナのために女王を責任を持って監禁しているのです。ペルペンナが来ます。

正しい怒りもお隠しなさい、よい時がやって来るまで、どうか囚われの身であることをお忘れなく。

ヴィリアト
私は自分のなんたるかを知っています。そして、常に変わることはないでしょう。たとえ私に天しかなくとも、私が私の助けになるのです。

第四場
ペルペンナ、アリストティ、ヴィリアト、タミル、アルカス

ペルペンナ
セルトリユスは死んだ。女王、セルトリユスの配偶者が昇る高い地位に嫉妬することはない、また、セルトリユスの生前のように、あなた自身の国で他の女性が第一の地位を占めることを心配することもない。もしアリストティの望みがあなたに不安を投げかけても、あなたをアリストティからも、他の女からも守ってあげます。この襲撃の成功はあなたを現在も将来も守ることでしょう。あれは偉大な戦士だった。しかし、その生まれも年齢も奥方にふさわしい伴侶とはいえなかった。こうした欠陥にかかわらず、奥方の気に入ったのは、あなたを圧倒した威信だった。将軍という名があなたにセルトリユスを愛するに値する者にしたのだ。あなたの王達や私よりもセルトリユスは好まれた。あなたは尊称や職務に眩惑された。私は自らあなたに二つながら提供しに来た。あなたの高貴な心が女王によりふさわしいと見なす美点に加えて、支配権を握り王族の出であるローマ人（年のことはさておいて）は女王に選ばれる資格がある。とりわけ、その愛によって女王を侮辱から雪ぎ、その剛勇によって女王を貶める婚姻から解放したのだから。

アリストティ
自分の部屋でおまえの主君を血祭りに上げた後、敵の亡霊に震えているおまえ、悪党、女達を挑発にここまでやって来て、不埒にも嫌らしい恋を誇っている。女王をその宮殿で奪い取り、悪行の報酬として女王との結婚を求めている！神々を恐れなさい、この悪人、神々を、あるいはポンペを恐れなさい。神々の憎しみ、あるいはポンペの腕、神々のいかずち、あるいはポンペの剣を恐れるのです。どんなに罪な傲慢がおまえを盲にしようとして、ポンペはまだ私を愛

している、怯えるがいい、もうじき、この悪党、思ってるよりずっと早くポンペに会おうだろう。ポンペからしかるべき報いを期待するがいい。

ペルペンナ

ポンペが奥方の乱心を信ずるなら、私も死を覚悟しよう。でも、おそらくポンペは信じはしないだろう。私が何度もポンペを打ち負かした軍の指揮を執るのを見るならば、たやすく和平を締結する決心をするだろう。それは先程来、殿の最大の願ひであった。私はかなりよい担保を手に行っている、有利に交渉を進めるだろう。その間、奥方はそなたと私の幸運のために、そなたに黙っている人々に声高く話さないでいられよう。この亡きも同然の脅しが苦痛に過ぎるといふなら、私がことを為した後は女王にしたいがままにさせとくがいい。そなたに関わりのない想いを非難したりせず、夫の心を再び取り戻すよう考えるがよろしい。

ヴィリアト

奥方、実際、答えなければならぬのは私なのです。そして、恩知らずにも沈黙しているのは私には当惑でしかありません。あの勇ましい武勲、高貴な感情には私は深い感謝の念を贈るものです。それを延ばすのは、大殿に礼を失するものです。

殿は確かに私に著しい奉公をなさいました。それは殿の偉大さの半分には過ぎません。偉大なセルトリウスはペルペンナの完全な友人でした。それを覚えておくのです、殿、(というのは、あなたが新たに就任された位からこの尊称を用いるべきだと思うからです、この尊称があなたに留まるのは僅かの間でしょうから、あなたにそれを授けることは私には取るに足りないことです)よく聴くのです、あなたのために殿は私の不興を買おうとなさったのです、あの英雄が敢えて私の怒りを浴びようとしたのです、その愛にもかかわらず、私の憤りにもかかわらず、殿は全力を注いで私をあなたのものとしようとされました。あなたが約束を反故にしようとなさらなかったなら、私の目論見はすべて徒な希望に過ぎなかった。殿はあなたのために私の求婚を拒まれたのです。

アリスティ

おまえは殿の胸に短刀を刺した、それからおまえの腕は...

ヴィリアト

奥方、愛の大きさを罪の大きさを測ることをお許しください。自分の部屋で、自分の食卓で、宴会の最中、これほど完璧な友人の暗殺者となる、友情から自分のために尽力してくれる將軍を血祭りに上げる、栄光を断念し、永久に消えない汚名、大罪につきものの恐怖を受け入れる、私の部屋にまでやってきて暴力を働く、私と結婚するため私を無防備のままここに釘付けにする、このこと一切が、殿が忝なくも私に向けられた深い愛にどれだけ私が負っているのか益々よく示していただきます。このことすべては極限まで愛に憑かれた魂が為したことです。もし私を愛することがより少なければ、かの方の罪ももっと軽かったです。私は恩を知らないものでいたくありませんので、この方に私と結婚なさらないよう忠告します。いつも殿の生命を愛するものに代わって敵を床に入れることになるでしょうから。私はかの人々の心臓を貫く最良の場所を選ぶためにありあまる名誉を受け入れる決心をするのです。

殿、私の感謝のお礼です。更に、私の身はあなたの力の内にあります、あなたはここでは支配者なので、命令しなさい、私をどのようにでもなさい、そして私と結婚なさい、敢えてなさろうとするなら。

ペルペンナ

それがしが、敢えて為すかですって？奥方の忠告が寛容なものであったなら、我が罪を繰り広げるに大した弁論は必要なかっただろう。わしは奥方よりもその残酷さをよく知っている。知るために、罪は十分高いものについた。これほどの裏切り、忘恩の徒となって耐え難い後悔に責められているのだ。奥方のために、セルトリウスを飼ひ馴らし、奥方のためにセルトリウスを滅ぼした。わしはその汚名を着せられ、その果実を手にするだろう。わしの大罪を詰るがいい、わしの首を斬るがいい。これと同じ大罪の戦利品と奥方はなるのだ。たとえわしの幸運が二日間しか続かなくとも、奥方は明日にもわしのものとなる覚悟をするのだ。奥方の憎しみは承知の上だ、それ相応のことをした。その後のことも見通した、それがどんなものかも知っている、わしの戦利品となるとは...

第五場

ペルペンナ、アリスティ、ヴィリアト、オフィド、アルカス、タミル

オフィド

殿、ポンペが到着しました。我らの兵士は反乱を起こし、人民は決起しております。門の扉はポンペの名が出ただけで、ポンペがやって来るといふ噂だけで開かれました。数の力に譲らない仲間はおりません。アントワヌ⁽²⁸⁾とマンリウス⁽²⁹⁾はばらばらに裂かれ、死に絶え血塗れになっても、まだ、暴虐を受けております。人々は興奮して残りの共犯者を捜し回っております。殿自身が残りの者を拷問に追いやる始末で。私は自分の持ち場を守っております、殿はそれを突如うち破り、自らの手で、ご覧のように私を刺しました。一切の紛れない支配者となった殿はここで護衛を交替しました。ご自身のことをお考えください、私は死にます、伴の者が殿を見ている。

アリストイ

どのくらいの時が、殿、あなたに約束された幸運を手に入れるのに必要なのでしょうか？あなたはよい人質を得て、有利に交渉を運べる？

ペルペンナ

私のためにいささか心配が過ぎますぞ、奥方、わしはここに幸運をものにする手段を持っている。

第六場

ポンペ、ペルペンナ、ヴィリアト、アリストイ、セルスス、アルカス、タミル

ペルペンナ

大殿、私の為したことをお知りになられるでしょう。殿のために、平和の敵を葬りました。殿の奥方の恋人として、かくも名の知られた敵はすべてにわたって殿の願いを妨害した。私は殿にアリストイを返し、殿の心が苦しんだ恐れを終わらせます。殿をアリストイが他人の腕に抱かれはしまいかという切ない悩みから解放します。更に為したいことがあります。私は殿に誇り高い敵、その傲慢さとリュジタニを合わせて譲ります。私はこの土地と、幸運にも殿の手に入ったすべてのローマ人を殿の支配に譲りましょう。遠大な計画においては、迅速に事を運ばねばなりませんので、詳細にわたってはお話ししません。私は明日大殿のもとに行くつもりだと言うことを皆に教えなければならぬとは思っておりませんでした。しかし、私は確実な証拠を我が身に持っております。この手紙は私

の忠誠のよい証拠となるでしょう。殿は不実な輩の筆跡によってローマにはどれほど殿の隠れた敵がいるか知られるでしょう、奴らは皆、アリストイのために復讐に燃えてセルトリュスと関係を結んでいたのです。お読みください。

(ペルペンナはポンペに、アリストイがローマからセルトリュスに運んできた手紙を渡す)。⁽³⁰⁾

アリストイ

なんと、悪人なのか？卑怯者！おまえはよくも．．．

ペルペンナ

奥方、ここではポンペがあなたの主人であり、私の主人ですぞ。主人の前では、もう少し慎みを。私があなたに返答を強いたとしても、苦味なく、侮辱を交えずなさって欲しい、どなたの前でお話なさっているのかお忘れなく。ご覧のように、大殿、二人の有名な仇がおり、セルトリュスの死によって等しく憎しみに駆り立てられております。最後の最後まで、二人は私を侮辱しました。しかし、殿にお目にかかったからには、私は十分その仇をとったのです。私は大殿を守護神と同様に見立て奉っております、これはなんと言うことだ！殿、何をなさるおつもりか？

ポンペ

(手紙を読まずに燃やした後で)⁽³¹⁾、
こんな秘密の何を予が知ろうとするものか、貴公が予を知っていたなら予見できたであろうに。ローマは長きにわたって二つの党派に別れてきた、予の故に再び分裂に投げ入れたくはない。シルラがローマに栄光と幸福を返したとき、予は殺戮と畏怖を取り戻そうとは思わない。聞くのだ、セルスス、

(ポンペはセルススに耳打ちする)⁽³²⁾、
特に、アリストイがわしのためにローマでつづった敵について誰の名もあげないようにせよ。

(ペルペンナに)⁽³³⁾、
貴公はこの弁士について行け、わしはいくつかの用件があって、ここで内密の話をしなければならぬ。

ペルペンナ

大殿、こうした手柄には、それなりの褒美が．．．

ポンペ

それはよく弁えているぞ、アリスティには裁きを与えるつもりだ、行け。

ペルペンナ

しかし、そうしてるうち、連中の憎しみは益々...

ポンペ

もういい加減にせい、予は指図するものだ、予が言っているのだ、行け、言うことを聞くのだ！

第七場

ポンペ、ヴィリアト、アリスティ、タミル、アルカス

威張りくさった口を利いたからといって、ご立腹なさらなくてください。偉大な女王、それは裏切り者を罰するためだけのこと。そなたのことを穿ちすぎた罪深さ、奴の卑劣に含まれた無礼、わしは女王に何か述べる前に自分を正当な者にするために奴をしっかり懲らしめねばならないと思った。こうして親しくお近づきになれたことに乗じようなどとは思わない。予は自分の成功を隠すことを知らなかった。今奥方から奴の支持が消え失せようとも、予はそなたに和平をさしのべ、休戦も破っていない。そして奥方の側にいるローマ人は予の怒りを恐れることなく、ここに留まってよい。もし何らかの危険から奥方を護ったとしたら、予は褒美としてただアリスティを連れて帰りたい。アリスティは、奥方もご覧のように予の主人であり、予は喜んで夫婦の誓いと忠誠を捧げる。愛については言うことはない、それは変わらずアリスティのものであった。

アリスティ

私も互いに交わしあった情けをあなたにお返ししましょう。新たにされた愛を一層固めるために、誰かがそれを盗んだことは忘れてしましましょう。

ヴィリアト

殿の提案された和平を受諾します。それは私が滅亡した後、できるただ一つのことです。私の滅亡は取り返しがつきません。殿に並び立つ大殿もわれに値する王も見つけられない以上、戦争も婚姻も放棄します。しかし、生まれついた王冠の誉れに執着しておりますので、正しい友愛の掟を守ることは知っても、我が王達が支

配するような支配の仕方は知りません。もし殿の支配のもとに、我が王達と同様支配しなければならぬなら、自分の滅びの下に埋もれましょう。恥もなく配偶者もなく支配できるとしたら、殿のローマか殿しか相続人として求めません。殿がお選び下さい。もし殿の同盟者が我が国々がわれ一人の勢力下にあるのが不服とあれば、殿がこの地を掌中に収めればよい。われはもうローマの虜と思っております。

ポンペ

女王、あなたの心はきわめて生まれつきがよく、光輝溢れる平和を作り上げないわけにはいかない。そして、そこで予の権力がいつか倒れるのを見ることになるか、もしくは、いつまでも徳に榮えあらしめることになるかだ。

第八場⁽³⁴⁾

ポンペ、アリスティ、ヴィリアト、セルスス、アルカス、タミル

ポンペ

やり終わったのか、セルスス？

セルスス

終わりました、殿。二心を持った者はあまたの腕が己の殺戮を罰するのを見ました。殿の命令により怒り狂った民衆に渡され、何も言うことなく...

ポンペ

よろしい、ローマは安全になった。予が強い予を憎むようにし向けた人々も、予について恐れることは何もないのだから、予も連中を脅すようなことをする必要はない。そなた、女王、我らの偉大な英雄のためにその復讐された霊が全き平安のうちに眠ることを受け入れ給え。その名声にふさわしく、輝かしく壮麗な葬儀のために、女王の命令を与えに行こう。そして、殿の不幸の証人となる墓を建てるのだ。それは殿の栄光の証人でもあれば、我々の苦難の証人でもある。

幕⁽³⁵⁾

(註)

- (1) ヴィリアツスの死は紀元前139年、従って、この劇は紀元前71年に設定されている。
- (2) Et du consul Brutus l'Astre prédominant を Et de Servilius l'astre prédominant に変えればよいということ
- (3) 原文は、執政官ブルツスの優勢な運命、Et du Consul Brutus l'Astre prédominant, これを Et de Servilius l'astre prédominant, と変えればよいと言うこと。
- (4) (羅) Lusitania, ヒスパニアの地方で、イベリアの部族ルシタニア人の居住地。初めの首府は Olisipo(Lisbonne)、帝政時代に帝国の州となり首府は Emerita Augusta(Merida)
- (5) 年代は註1に示したように紀元前1世紀と推定される。それからコルネイユの時代迄およそ1700年近い開きがあるわけで、ローマ時代の古都市とコルネイユ時代の都市を同定するのは困難なはずだ。従って、コルネイユが言うようにネルトブリジとカラタユが同一という確証はない。又、コルネイユはカラタユ(Calatayud)と記しているが、この都市は今でも存続しており、現在の名前はカタラユ(Catalayud)となっており、コルネイユの錯誤かこの三百年の間に名が変わったのか不明である。
- (6) ローマ共和制末期の惨劇はよく知られたところである。追放、殺戮、略奪。なお、カルボンはマリウスの副官。
- (7) ローマ共和制末期、マリウス、シルラ、三頭政治家によって取られた、政敵制裁の手段。その名がフォーラムに張られると、誰もがその人間を殺すことができる。殺した者には報償が与えられ、それは殺された者から没収した財産であることもあった。追放という訳語が定着しているが、それは司法手続きのない過酷な人権剥奪だったのである。
- (8) 現在は、Huesca。サラゴスの北東、ピレネ山脈の麓にある。GDELによれば、人口41500
- (9) 原文では、セルトリュスが落ちている。前行のペルペンナの科白とこのセルトリュスの科白が合わさって12音綴になっている。
- (10) ヴォルテールは、セルトリュスは舞台上一人残っていると注釈しているが、それが合理的な見方だろう。
- (11) リュジタニの南部に定住した部族。
- (12) リュジタニの北部に定住した部族。
- (13) イレルジェットの君主、マンドニウスはその

- 兄弟。ヒスパニアの諸侯はスキピオー族と同盟したり、敵対したりしたが、結局は滅ぼされた。
- (14) シルラは綽名として、Felix と称していた。
- (15) (羅) Tiberius, ローマ市内を貫流する川
- (16) ローマにある七つの丘の一つ。
- (17) (西) Tajo, イベリア半島を流れる主な河川。スペインに発し、ポルトガルを経てリスボン湾に流れ込む。
- (18) 註の(9)を参照
- (19) アルプスから地中海へ流れる河川だが、ここではガリアの比喩として使っている。
- (20) Lucius Cornelius Cinna, マリウス党の人、執政官になること四度。反逆した兵士に殺された。
- (21) ポンペに破られ、死んだ。
- (22) シルラに破られ、自殺した。
- (23) ヒスパニアのローマ領に住んでいた部族
- (24) 上に同じ。
- (25) アルプスに発し、アドリア海に注ぐイタリア北部を流れる河川。
- (26) 執政官の威儀の象徴。
- (27) 上と同じ。
- (28) 哩=千歩の距離
- (29) セルトリュスを剣で斬った人物。プルターク英雄伝、巻8、38頁、岩波文庫版参照
- (30) ローマの将軍で、ペルペンナの陰謀に加担した。
- (31) 原文は括弧なしで、イタリック。
- (32) 上と同じ。
- (33) 上と同じ。
- (34) 上と同じ。
- (35) 原文は、最後の場
- (36) 原文は、五番目の最後の幕終わり
底本、Pierre Corneille, SERTORIUS tragédie,
Edition critique par Jeanne Streicher, Droz, 1959

Rotrou : *Céliane*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇
 初演 1631年頃 オテル・ド・ブルゴーニュ座
 出版 1637年
 出典 デュルフェの『アストレ』に類似のエピソードあり。

ランカスターはこの作品について「面白くはないが、構成が悪い。ただ、人物を描こうとする作者の努力は評価してよい」と総括している。概ねその通りである。しかし、秩序立った構成にするには、三組目のカップル（フィリドールとジュリ）が登場する必然性はないと彼は述べているのだが、人物として興味深く描かれているのは実はジュリだけである。他は多少の工夫がなされているとはいえ、ステレオタイプの人物だ。一応、恋と友情との葛藤のテーマが前面に押し出されてはいるが、友情についていくらでも個性的で真摯な述懐がパンフィルやフロリマンの口から漏れることはない。しかもどう見ても「友情」はパンフィルの側にしかない。フロリマンは凡庸でわがままな若者で、この点、「兄が死ぬ死ぬってわめいても、二カ月もすれば忘れちゃうわよ」というジュリの見解には現実味がある。そういえば自殺未遂が5回もある作品も珍しい。つまりこれらの自殺未遂は観客の了解をも前提にした人物の甘えのポーズで、死の身振りは恋のゲームに必須のルールだと語っている。田園劇の踏襲もここまでくるとパロディ一歩前である。時は二日にわたり、場所はフロリマンの家と近くの森周辺だが、マウロは上手に家、下手に森、中央に洞窟の透視図という舞台を製作している。

【第一幕】パンフィル(Pamphile)はニーズ(Nise)と恋仲。だが彼女が事実無根の不貞を疑い責めるので、耐えられず出奔し、親友のフロリマン(Florimant) に会いに来た。思い悩んだパンフィルは森の中で眠り込んでしまう。そこへ騎士の姿のニーズが現れる。彼を追って旅に出たのだが、多情な男に恋した自分が情けなく、絶望して自刃しようとする。ちょうど目覚めたパンフィルはあわてて止めるが、彼女は彼を見てあらためて怒りを燃やし罵倒する。彼の方はニーズとわからず無礼なやつだと怒り、二人は一戦を交える。ニーズは傷を負い、倒れる。やっと恋人だと気づいた彼は介抱し、なおも罵る彼女を宥め、変わらぬ愛を誓う。一方フロリマンが恋しているのはセリアヌ(Céliane) だ。彼女は嫌味な男フィリドール(Philidor)にも言い寄られている。

【第二幕】フロリマンを長い間じらしてきたセリアヌだったが、ついに接吻を許してしまう。彼は狂喜するが彼女は不安だ。おあずけをしている間は女の力は持続するが、一端許し始めると男は女への敬意を失い、愛も薄れてゆくのではないかと。彼はそんな彼女の不安を打ち消し、二人はさらなる喜びを味わうため森の奥に入っていく。さて、ニーズの傷は軽傷で、床に就いたままパンフィルと結婚の約束をする。婚約者の胸に接吻し、恍惚となるパンフィル。そうこうするうち日が暮れる。森から出てきたセリアヌとフロリマンは、フィ

リドールにつかまってしまった。何があったかすぐ見て取ったフィリドールは嫉妬から難癖をつけ、抜刀してフロリマンと戦う。だがパンフィルが止めに入り、フィリドールは捨て台詞を残して去る。

〔第三幕〕フロリマンは悩んでいる。恋人と親友の両方を裏切ってしまった。つまり彼はニーズに一目惚れをしてしまったのだ。そんな彼の自責に満ちた独白をパンフィルが耳にし、恋より友情が大切、自分は身を引く、と申し出る。恥じたフロリマンは短剣で自殺を図るがパンフィルに剣を取りあげられる。俺を信用しろ、ニーズを説得してやる、と言う親友に感謝するフロリマン。だがニーズはもちろん簡単には説得されない。怒る彼女を前にしてパンフィルは剣で自殺を図る。あなたに死なれるよりはまし、と彼女は涙をのんでフロリマンを受け入れることを承諾。

〔第四幕〕ニーズがフロリマンのもとにつれてこられる。「君の悩みは今夜にも雲散霧消する、この美女が君の寝床に入ることでね」とパンフィル。フロリマンは有頂天だ。が、パンフィルの悲痛な表情を目にして愕然。自らの理不尽な要求に気づき、またもや自殺しようとする。またもや友が止め、男二人は女一人を譲り合う。結局、恋人に「もう愛してないから」とまで言われたニーズは、男たちの友情に呆然としつつ惨めな思いでフロリマンを受容する。さて、セリアーナは怒りと絶望で気も狂わんばかりだ。花籠を抱えて庭師に変装し、新たなカップルの語らいを盗み聞きしようとする。しかし近づいてきたフィリドールにすぐ正体を見破られ、退散。恋する女にいつも冷淡にされ意気消沈するフィリドールだったが、そんな彼に恋する女もいる。フロリマンの妹、ジュリ(Julie)だ。彼女の悩みは、好きな男の前でふざけ半分の口調でしか話せず、まともに聞いてもらえないこと。たとえ恋の告白でさえ。彼女はニーズが毒をあおって死のうとするのを阻止し、理性をもって、ニーズ自身の意志を表明すればすむことだと説く。庭師に扮したままのセリアーナも仲間に入れ、ジュリは事態を解決するための策略を練る。

〔第五幕〕ジュリの策略とは、ニーズと庭師のセリアーナの密会場面をフロリマンに見せ、彼に愛想尽かしをさせようというもの。計算通り彼は仰天、すかさずジュリは悲嘆のあまり姿を消したパンフィルを探しに彼をやる。さらに彼女はフィリドールにも「狂った」セリアーナが見すばらしい男装でニーズを口説いている場面を見せてショックを与え、理性的な自分だったら嫉妬に狂うことはないとは断言。虚々実々のやりとりの末、ジュリとフィリドールは愛を誓い合う。一方フロリマンは、森の中で自殺寸前のパンフィルを見つけ、変事が起こったと家に連れ帰る。ジュリが彼らを導き、身分違いの恋に酔う不届きな二人がまさに接吻しようとする現場に踏み込む。やっとセリアーナの男装が明らかになれば、女たちは自分たちの真情を述べ、男たちは許しを乞う。勝ち誇るジュリ。三組の結婚が行われるだろう。愛の奇跡を讃えよう。

(鈴木美穂)

Rotrou : *Pèlerine amoureuse*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇
 初演 1632～1633 年頃 (ランカスター) オテル・ド・ブルゴーニュ座
 出版 1637 年
 出典 Girolamo Bargagli : *La Pellegrina* (小説、1589 年出版)

筋の展開が錯綜していて、要約が非常に困難な作品である。ランカスターは、「作者は自らの脚色で筋の運びをぎこちなくしたが、脚色の大半は面白くなくはない」と、『セリアーナ』と似たようなニュアンスの評価を下している。ロトルー独自のアレンジは、セリの役割を拡大したこと、レアンドルの画家への変装、大祭司の登場(ランカスターによれば『アストレ』の模倣)、リュシドールの従僕フィリダンの「評論家兼詩人ぶり」などで、さらに、佯狂、トルコ人による誘拐、同名の二人の取り違えといった時代の好みはしっかりおさえている。現代人に興味深いのはフィリダンで、「このご時世じゃ、賢い男は財産と結婚するんですよ」「頭のいい女はどうしても煩わしいもんです」という台詞は、当時支離的な(今もなお残存しているが)結婚観、女性観をそのまま表している。時は半日程度と短い。舞台はフローレンス(イタリア)だが、場所の言及はリヨン(フランス)、ヴァレンシア(スペイン)、ビザンチン(トルコ)とヨーロッパ各地に及ぶ。

【第一幕】フローレンス。リュシドール(Lucidor)は金持ち娘セリ(Célie)と婚約している。経済的理由からの婚約で、彼の心には亡きアンジェリク(Angélique)の面影が焼きついている。彼女とはリヨンで出会い深く愛し合ったが、一時帰郷が長引いている間に死を知らされたのだ。だがセリとの関係も前途多難のようだ。明らかに望みがないのに現実を認識できず、いつまでもセリを諦めないおめでたい男、セリアント(Céliante)の存在は別にして、肝心のセリが精神に異常をきたしているようなのだ。自分は月の女神だと言ってみたり、荒れ狂ってリュシドールに殴りかかったりする。彼女の父親エラスム(Erasme)の心痛もこの上ない。実はこれは佯狂で、父が決めた婚約者を追い払い、かつ医者を選ばないための策略である。そう、彼女は妊娠しているのだ。相手は恋人の画家レアンドル(Léandre、だが本名は婚約者と同名のリュシドール)。策略は彼が考えた。

【第二幕】リュシドールはさすがに結婚を躊躇している。だが従者フィリダン(Filidan)はさかんにこの結婚の有利な点を列挙する——そもそも妻に愛情を抱くのは流行遅れ、結婚の理由は財産しかない、それに狂った妻は好都合、夫の挙動を見張らない、嫉妬はしない、愛人ももてる、云々。リュシドールは自分はそこまで墮落していない、と言う。さて、セリの父は大祭司クリダマン(Clidama nt)に娘の狂気の診断を仰ぐ。大祭司は妄想症だと判断。そこで、その種の病に詳しい巡礼女がちょうど当地に滞在しているらしいので、その女に相談することになる。

【第三幕】巡礼女とは、恋人に死んだと思われているアンジェリクだった。彼がリオンを發って約束の半年が

過ぎて戻ってこないの、絶望のあまり死んだようになったが、息をふき返し、巡礼の名目で彼を探し旅に出た。そしてフローレンスに着いていち早く彼の婚約と婚約者の病を知り、優れた治療師だという偽りの噂を自ら広めておいたのだった。前準備は功を奏してセリの治療を引き受けることになったはいいが、その後の展望が何もないアンジェリクは不安である。そこにセリがやってきて事情を明かし、協力を要請（恋人の名は告げない）。アンジェリクは恋と治療技術の二重の不安から開放され、喜んで承諾する。セリは皆の前でまたもや派手に狂気を演じ、アンジェリクは、極めて重症、特効薬があるがそれが効かぬば死に至る、と診断する。

〔第四幕〕悲嘆にくれる父親に、フィリダンがご注進。セリと乳母の話を持ち聞きしたのである。セリは「リュシドール」の子を妊娠しており、佯狂は彼の差し金である、と。父親はわけがわからない。娘と婚約者は互いに気に入ってる様子はなかったし、妊娠したのなら結婚式を早めればよかった。これが今時の恋愛か...と悩む父親。そこでリュシドールに会い、妊娠させたのなら早く結婚しろ、と迫る。婚約者リュシドールも困惑。そこに覗き屋フィリダンが新たな情報をもたらす。セリが父親の肖像画家レアンドルと抱き合っている現場を見たのだ。どこまでもふしだらな娘に愕然とする父親。一方アンジェリクも、セリの妊娠相手が「リュシドール」だと知らされて再度絶望に陥る。

〔第五幕〕父親は、無垢な娘を誘惑した科で画家を巡視隊に逮捕させようとする。セリは事ここに至って真実を明かす。画家の本名はリュシドール、ヴァレンシア出の貴族で、身分に不足はないと。それを聞いたセリアントがせせら笑う。なぜなら自分もヴァレンシア出身、リュシドールとは自分の兄弟で、もう死んでいる筈だ。そこで偽画家リュシドールはこれまでの苦難の生を語る。幼い頃トルコ人に誘拐され、ビザンチンで奴隷として成長した。その後解放され、当地に流れてきてセリと恋に落ちたのである。父母の名前が口に出されてようやくセリアントは納得し、感激の兄弟再会となる。アンジェリクは、「リュシドール」とセリが結ばれると知り、彼の不実を訴える。だが人間違いだと気づき、彼女とセリの元婚約者の恋も皆の知るところとなる。そのリュシドールが連れて来られ、死んだと信じていた恋人を見て狂喜し、愛のない婚約を反省。誤解はとける。そこにアンジェリクを想い、死に挑戦する詩を作るよう主人から命じられていたフィリダンが現れ、リュシドールがそれを朗読する。皆で賞賛して幕。

（鈴木美穂）

作品梗概集

(ローマ数字は掲載号、アラビア数字はページを示す)

Bidar: <i>Hippolyte</i>	III 79	: <i>Astrate, roi de Tyr</i>	X 96
Boyer: <i>Ulysse dans l'île de Circe</i>	III 95	: <i>Atys</i>	VI 91
Corneille, Thomas		: <i>Cadmus et Hermione</i>	VI 86
: <i>Ariane</i>	III 89	: <i>Thésée</i>	VI 89
: <i>Bérénice</i>	IV 83	Mairet	
: <i>Camma</i>	III 88	: <i>Chryseïde et Arimand</i>	IV 63
: <i>Circé</i>	III 98	: <i>Les Galanterie du duc d'Ossonne</i>	IV 68
: <i>Le Comte d'Essex</i>	VI 92	: <i>La Silvanire</i>	IV 66
: <i>Darius</i>	IV 85	: <i>La Sylvie</i>	IV 65
: <i>La Mort d'Achille</i>	III 9	Pradon: <i>Phèdre et Hippolyte</i>	III 81
: <i>La Mort de l'empereur Commode</i>	VI 83	Du Ryer: : <i>Alcionée</i>	X 92
: <i>Persée et Démetrius</i>	VI 85	Rotrou	
: <i>Timocrate</i>	IV 81	: <i>Agésilan de Colchos</i>	VII 94
Corneille, Pierre: <i>Andromède</i>	III 96	: <i>Amélie</i>	IX 79
Desfontaines: <i>Bélisaire</i>	VII 100	: <i>Antigone</i>	VI 80
Desmaretz de Saint-Sorlin: <i>Mirame</i>	VII 103	: <i>La Bague de l'Oubli</i>	III 83
de Visé, Donneau		: <i>La Belle Allphrède</i>	III 85
: <i>Les Amours de Bachus et d'Ariane</i>	VII 107	: <i>Belisaire</i>	VIII 98
: <i>Les Amours de Venus et d'Adonis</i>	VII 106	: <i>Captifs ou les Esclaves</i>	IX 78
Garnier: <i>Hippolyte</i>	III 74	<i>Céliane</i>	XII 71
Gilbert		: <i>Célimène</i>	VIII 84
: <i>Les Amours de Diane et d'Endimio</i>	VII 105	: <i>Cleagénor et Doristée</i>	IV 72
: <i>Hypolite</i>	III 78	: <i>Clorinde</i>	IX 81
Gougenot: <i>La Fidelle Tromperie</i>	VII 96	: <i>Cosroès</i>	IX 76
La Pineliere: <i>Hippolyte</i>	III 76	: <i>Crisante</i>	VI 78
L'Hermite de Vauzelle: <i>La chute de Phaéton</i>	III 94	: <i>Diane</i>	VIII 82
Lully et Quinault		: <i>Don Bernard de Cabrière</i>	VIII 80
: <i>Alceste</i>	VI 88	: <i>Filandre</i>	VIII 85
: <i>Amalasonte</i>	X 94	: <i>Florimonde</i>	IX 82

: <i>L'Heureux Naufrage</i>	VIII 93		
: <i>L'Hypocondriaque ou le Mort amoureux</i> X90		Tristan l'Herrnite	
<i>Iphigénie</i>	VI 81	: <i>La Folie du sage</i>	IX 84
<i>Les Ménechmes</i>	XI 77	: <i>La Marianne</i>	III 74
<i>Pèlerine amoureuse</i>	XII 72	: <i>La Mort de Chrispe</i>	IV 78
: <i>La Sœur</i>	VII 102	: <i>La Mort de Sénèque</i>	IV 77
: <i>Laure Persecutée</i>	III 86	: <i>Osman</i>	IV 80
: <i>Les Occasions perdues</i>	IV 70	: <i>Panthée</i>	IV 75
		: <i>Le Parasite</i>	X 99

会員名簿（アイウエオ順）

浅谷真弓	伊藤洋	岩瀬孝	大越敏男	片木智年
小林卓	自石嘉治	神保剛	鈴木美穂	関根敏了
関谷苑子	千石玲子	竹田宏	戸口民也	富田高嗣
野池恵子	萩原芳子	橋本能	浜野トキ	真下弘子
丸山弓子	皆吉郷平			

エイコス XII

発行日 1997年6月24日
発行者 〒162 東京都新宿区西早稲田早稲田大学教育学部
伊藤洋 C/O
17世紀仏演劇研究会 TEL 03-3203-4141
印刷 ㈱七月堂
〒156 東京都世田谷区松原 1-38-5 田坂ビル 3F
TEL 03-3325-5717

頒価 500円